
G × S ! 夕陽が紡ぐ世界

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G×S！夕陽が紡ぐ世界

【Nコード】

N6243U

【作者名】

乱

【あらすじ】

一つの闘いが終わった世界、生涯消える事のない傷を負いながらも世界を救った青年、横島忠夫。やがて彼はその身に神魔を越えるほどの力を宿し始めるがそんな彼を疎む過激派神魔族は横島を排除する為に動き始めた。デタントを覆す為に動き始めた神魔族の攻撃の中、攻撃と文珠の作用によって横島はタマモと共に平行世界へと飛ばされてしまう。だがその世界はかつて横島が生まれ育った故郷でもあった。

G S 美神とS H U F F L E ! のクロスで、乱が放つG × シリーズの
第一弾。

この作品はT I N A M I とA r c a d i a にも投稿しています。

注・この作品には途中T S 要素が含まれる事があります。それが苦
手な方にはお勧めできません。

第一話「また会おう、三人の思い」

ある日、少年と少女は出会った。

偶然だったのか？必然だったのか？それは誰にも分からない。ただ、分かるのは二人にとって幸せな出会いだった事。

しかし、出会いがあれば別離もある。

誰も望まない悲しき別離だった。

しかし、別離は新たな出会いをもたらす。

運命だったのか？宿命だったのか？

それは誰にも分からない……

第一話「また会おう、三人の思い」

楓視点

何時も見ていた夢、此処では無い別の世界で生きている“タダくん”の夢。

一方通行だけ夢の中でだけ彼に会えていた。

でも数日前からその夢も見れなくなっていた、あの闘いの後から。全世界を巻き込んだ「魔王」と人間達との闘い、スパイとして敵の中に潜り込まされたタダくんは魔王の娘である三姉妹の内の一人、ルシオラさんと恋に落ちた。

最初は凄く嫉妬したけど二人の恋は本物だった。
ほんの少しの、ほんの細やかな幸せな日々、それはあっけなく終わりを告げた。
闘いの中で生まれた恋、闘いの中で育まれた恋、そして闘いの中に消え去った恋。
彼の心の中にはどれ程の傷が刻まれたのだろうか？見る事しか出来なかった私には分からない。

私の名前は「芙蓉楓」

今私は思い出の場所に立っている、タダくと初めて出会った場所、そしてタダくんが消えてしまった場所。

タダくん、彼の名前は「浜菊忠夫」でも、“向こう”での名前は「横島忠夫」。私の初恋の人。

そう、彼はこの世界には居ない。遠く離れた別の世界に彼は居る。私だけが知っている私だけの秘密。

「好きだった」「その男の子が好きだった」

「大好きだった」

「優しくかった」「本当に優しくかった」

「誰よりも優しくかった」

「あの男の子も好きだった」「あの女の子も好きだった」

「でもその男の子が一番好きだった」

「声が好き」「笑顔が好き」

「手をつないだ時の温もりが好き」

「お父さんはいなかった」「お母さんもいなかった」

「なのに強かった」

「みんなと遊んだ」「みんなと笑った」

「何でも信じれた」

「そう……」「あの優しい嘘さえも……」

「信じてしまった……」

「好きだった……」「その男の子が好きだった……」

「大好きだった……」

「だから大嫌いになってしまった……」

「叩いた……」「突き飛ばした……」「ケガをさせた……」

「お父さんも、二人の友達も、辛そうな顔をしてたけど何も言わなかった……」

「ある日魔族の一人が騒ぎを起こした…」

「その日からその男の子がいなくなった…」

「お父さんも、二人の友達も、みんな泣いた…」

「私は泣かなかった…」

「本当は泣きたかったけど、泣けなかった…」

「そしてちょっとだけ大人になったある日」

「私は真実にたどり着いた」

「私は泣いた、泣けなかった分だけ思いっきり」

「好きだけど嫌いになった」

「嫌いだけど好きだった」

「思いっきり泣いた後、私は笑うことにした」

「その為に吐いてくれた嘘だから」

「笑おう」

「私は私らしく」

「高校生になったある日から私は夢を見るようになった」

「別の世界に彼はいた」

「笑っていた、友達も沢山いた」

「ちょっと？エッチになっていた」

「大事な女ひともいるようで胸がチクツとした」

「そしてだんだんと大変な戦いに巻き込まれていった」

「彼はそんな中でドンドン強くなっていった」

「大切な仲間も増えていった」

「そして始まった『魔神大戦』」

「敵に連れさらわれ、再度スパイとして潜り込まされた」

「そんな中で出会った彼女」

「彼が初めて心から愛した女ひと」

「彼女を守る為に本物の魔王に立ち向かう彼」

「彼女を守る為にその身を盾にした彼」

「彼を守る為に命を捧げた彼女」

「彼女と世界の二者択一」

「彼女の想いを守る為に世界を選んだ彼」

「傷ついた心が流す涙と叫び」

「なんで私はあそこに居られないんだろう」

「慰めてあげたい、一緒に泣いてあげたい」

「でも彼は立ちあがる」

「そして再び笑う」

「彼が彼らしくある為に」

「会いたいな」

「夢じゃなく現実の世界で」

「そして一緒に笑いたい」

「だから信じる」

「信じよう、きっとまた会えると」

そんな風に思いを馳せていると後ろから私を呼ぶ声が聞こえて来た。

「楓」

「楓ちゃん」

「稟くん…桜ちゃん」

私を呼ぶ声に振り向いてみると其処に居たのは幼馴染で大事な友達。

「土見稟」くんと「八重桜」ちゃん。

二人もまたタダくんの大事な友達、二人もタダくんが何時か帰って来ると信じてくれている。

「また此処に居たんだな」

「うん…ごめんね稟くん、心配かけて」

「構わないさ、俺も時々一人で此処に来るしな」

稟視点

俺の一番の、掛け替えのない親友『浜菊忠夫』

何時の間にか引っ込み思案だった楓の傍に居て、何時の間にか俺達を中心に居た。

幼い時に両親を亡くし、孤児院で過ごしていたが俺達にはそんな事は関係無かった。

俺達の誰かが泣いていても、あいつが傍に居るとすぐに笑顔になれ

た。

そして“あの時”、俺の代わりに忠夫が付いた一つの嘘。その嘘のおかげで楓は笑顔を取り戻したが代わりに忠夫の笑顔が消えた。

助けたい、助けようと思っている内にこの空き地での爆発事故で忠夫はいなくなってしまった。

だが、俺は信じている。諦めはしない、忠夫とはまた会えると。今度こそ俺が守って見せると。

桜視点

「楓ちゃんは此処で忠夫くんに出会ったんだよね」

「うん、あの木の上で泣いていた子猫を助けてくれたんだ」

忠夫くん、子供の頃あまり笑わなかった楓ちゃんを笑顔にしてくれた男の子。

楓ちゃんとはお互いの家でしか遊ばなかったけど忠夫くんと出会ってからには皆で外で遊ぶようになった。

私達は女の子同士だから分かる、楓ちゃんは忠夫くんが好きなんだって。

だって私はあの頃すでに稟くんの事が好きだったから。

…辛かったんだよ忠夫くん。楓ちゃんの為とはいえ忠夫くんだけが犠牲になった事が。

楓ちゃんの笑顔も好きだったけど忠夫くんの笑顔も何だか胸の中がほんわかして好きだったんだよ。

だから私も待つてるね、何時か忠夫くんが帰って来るのを。

三人視点

「さて、プリムラが心配する頃だしそろそろ帰るか」

「そうだね。桜ちゃんも晩ご飯食べて行く？」

「え、いいの？じゃあ、お邪魔しちやおうかな？」

「ああ、そうしろ。プリムラも喜ぶだろうしな」

「うん。そう言えば稟くん、宿題終わった？」

「宿題？……ああっ、しまったぁー！っ！！」

「はあ、稟くんってば……」

「か、楓、いや楓さん？」

「ああは、先に家によって宿題持って来るね。写させてあげる」

「桜、恩に着る！！」

そして三人は夕陽が照らす空の下歩いて行き、楓は振り返ると紅い夕陽を見つめながら呟く。

「タダくん、私信じてるから、そして待つてるから。だから……」

『また会おうね、タダくん』

その頃、一つの闘いが終わったばかりの異世界では……

「タマモ、大丈夫か!？」

「わ、私は大丈夫だけどヨコシマは？」

「俺は大丈夫だ、心配しないでお前は其処に居ろ!!」

タマモと一緒に夕食の買い出しに出ていた所を俺達は神魔の過激派達に襲われていた。

町はずれの森の中で俺達に遠慮なしの魔力砲が雨の様に降って来る。

「くそうっ! しつこいぞ、いいかげんに諦めたらどうだ!」

「諦めるのは貴様だ!」

ルシオラから受け継いだ魔族因子が原因で俺の体は魔族化を始め、今では神族、魔族、人族それぞれの因子を持つ存在となってしまうた。

神魔どちらの勢力に傾くか解らない俺を神魔の半デタントの過激派が俺を排除しようと襲いかかって来た。

デタントを覆すために反デタント同士が手を組む、悪い冗談だ。

力で押し返すのは簡単だ。

しかし、それをしてしまえばそれこそハルマゲドンの火種になりかねない。

「ヨコシマー!!」

「来るなタマモー!!」

【護】の文珠の結界の中から飛び出そうとするタマモを俺は止める。

「でもこのままじゃ」

「安心しろ、半魔だけじゃなくその狐も一緒に始末してやる」

「先ずは貴様からだ、半魔!!」

ヨコシマに攻撃が集中しそうになった時、私は思わず飛び出した。

「やらせないよ、『狐火!』」

私の狐火が神族に襲いかかったが大した効果はなかった、逆に怒らせただけだった。

「くっ、このクソ狐がー!!」

全員の攻撃が私に襲いかかった。

「あ、ああ」

「タマモー!!」

ヨコシマはそんな私を守るように抱きしめた。

「ダメッ、ヨコシマ、逃げて!!」

「そのまま消えてしまえー!!」

「くそっ！一か八か」

【転】【移】

「ヨコシマー！！」

「掴まれ、タマモ！！」

私達は爆発と同時に光に包まれた。

焼けつくような痛みと共にヨコシマの温もりが体を包む。

足元から地面の感触が消え何処かに落ちて行くような感じがした。

続く

《次回予告》

彼が帰って来た。

ボロボロに傷ついて、大事そうに狐を抱いて。

でも私達の事を忘れてるみたい。

思い出して、みんなで遊んだ思い出を。

たとえ、私の事嫌いになってもいいから。

あなたの心の中にいられるなら……

次回第二話「帰郷・そして夕陽の思い出」

もう一度、あなたとの物語を

第一話「また会おう、三人の思い」（後書き）

この話は、以前書いた物の書き直しになります。

前に書いた一話目はただ、楓のセリフを並べただけだったので改めて書いてみた。

変えて見たのはSHUFFLE！世界での横島の姓、前は何のひねりも無く「菊」を入れただけの菊山でしたが改めてつけたのは「^{ぎく}浜^{はま}菊」です。

以前は孤児院の先生の姓を名のっていたという事でしたがこれはこの世界での正式な姓と言う事にしました。

花の名前にしようと適当に付けたんですが詳しく調べてみると花言葉は「逆境に立ち向かう」だそうで、何とも横島に相応しい感じでした。

そしてこの話の中では横島と百合子と大樹の夫婦には血縁関係は無いという事になっています。

ともあれ、本名は浜菊ですが、育ててくれた百合子達の為にも横島姓を名のる事になります。

第二話「帰郷・そして夕陽の思い出」

交通事故で楓の母ちゃんと稟の父ちゃんと母ちゃんが死んでしまった。

風邪で寝込んだ楓を心配した紅葉母ちゃんが急いで帰ろうとして事故を起こしたらしい。

稟はひどく落ち込んで泣いている。

楓はまだよく理解してないみたいで、ただボーゼンとしている。

紅葉母ちゃんたちの葬式で母ちゃんが死んだことをやっと理解した楓はそのまま倒れてしまった。その後はただ寝たまんまで何をいつても答えてくれなかった。

病院のセンサーとおじちゃんとの話を立ち聞きしてたら楓には生きる目的が必要らしい。

一緒に立ち聞きしていた稟が何かを考えてたが俺にはそれが何か分かってしまった。

だから俺が先にすることにした、稟も父ちゃんと母ちゃんが死んだばかりで辛いんだからやらせるわけにはいかない。

俺には父ちゃんと母ちゃんがないからガマンは慣れてる、大丈夫だ、ガマンできる。

病室に入ると楓はベッドの中で虚ろな目をして横になっていた。

誰が何を言っても反応しない。

大好きなチヨコの匂いを嗅がせてもピクリともしない。

でも、これならきつと反応する。楓は帰って来る。笑ってくれるようになる。

でもきつとその笑顔は俺は見れない。それでもいい、約束したんだ紅葉母ちゃんと。楓を…守るって……

そして俺は楓に最初で最後の嘘をつく……………

『楓、ゴメンな。俺のせいなんだ、俺が紅葉母ちゃんに電話したから、俺のせいで……俺のせいで紅葉母ちゃんたちは……死んじやつたんだ……』

言い終わるとゆっくりと楓の目に光が戻って来た、見たことのない激しい光が。

バターーン！

『忠夫！お、お前……』

『た、忠夫君……』

飛び込んできた二人はただ、愕然としていた。そんな中楓がゆっくりと起き上った。

『タ、ダ、くんが？……』

『か、楓、違うんだよ。忠夫君は』

『そうだ！忠夫はなにも』

二人はかばおうとしてくれたが俺はその「言葉」を口にした。

楓が生きる目的になるために。

『そうだよ、俺が……殺しちゃったんだ』

『忠夫君……君って子は……』

楓の目はその光と一緒にだんだん鋭くなっていった。

『タ、ダくんなんて……タダくんなんて……忠夫なんか……』

その目から止めどなく涙を流しながら楓は叫んだ。

『忠夫なんか死んじゃえーーーーー！！』

十年前に発見された太平洋上にある遺跡から異世界に通じる二つの扉が発見された事により世界は大きく変わった。

それまでは神話といった物語でしかなかった神界や魔界が実在し、あまつさえ神族・魔族の存在が確認されたのだ。しかし以外にもそ

の二つの世界の王達は友好的で思った以上の混乱はおきなかった。後に「開門」と呼ばれる出来事であった。これにより「人界」「神界」「魔界」の三世界は数千年ぶりに結びついた。

二年後、某国において『三世界平和宣言』が執り行われたがそれを不服とした魔族の一人がある街で暴動をおこし、神魔の警備隊に取り押さえられた。

その際に一人の人族の少年が行方不明になったがこれ以上の混乱を避けたかった上層部はなかった事として神魔王達へのは報告しなかった。

その少年を知る者達はみな悲しみに暮れたが政治的な事だけにどうしようもなかった。

それから暫くしたある日…

少年が最後に居たであろう空地に一人の少女が佇んでいた。

泣くでもなく、笑うでもなく、ただ虚ろな目をして、一人っきりで

……

サヨナラ、タダオ……

（―――）

第二話「帰郷・そして夕陽の思い出」

キンコーンカーンコーン

「ふう、終わった終わった」

溜息交じりに鞆を抱えながらそう言う青年、「土見稟」に彼の悪友、「緑葉樹」は語りかける。

「何処の還暦だい、稟」

「ほっとけ」

そんな何時もの会話をしていると、彼等に近づいて来る少女達がいる。

「稟くん、帰ろう」

「稟さま、私も一緒に」

「お兄ちゃん、帰ろ」

「それじゃあ皆で帰りましょう。桜ちゃんも一緒に帰ろう」

「ごめんね、私ちよつと用事があるんだ」

「うーん、残念っス。麻弓ちゃんは？」

「申し訳ない。私にも用事があるのですよ」

「ごめんね、じゃあ明日」

「うん、明日。行きましようか」

「そうだな、じゃあな樹」

彼女達は稟の幼馴染「芙蓉楓」に「八重桜」神界と魔界のプリンセス「リシアンサス」通称「シア」と「ネリネ」仲間内では「リン」と呼ばれている。

そう言つてさらりと帰りのメンバーから樹を外し、バーベナ・アイドル軍団と共に教室を出ていく稟を樹と男共は見つめていた。

「に、憎しみで人が殺せたら……」

「コクコクッ」

血の涙を流しながら……

帰り道でまっすぐ進まず横道に逸れる稟と楓にシアは不思議そうに尋ねた。

「ねえ稟くん、前から聞こうと思ってたんだけど何時も此処で横道に逸れるの？」

「……………」

「……子供の頃この先の空き地で俺達の友達が行方不明になったんだ。……だから……いつかあそこに帰って来るんじゃないかと思つてさ」

「そうなんだ、何か悪いこと聞いたやつたかな？」

「……いえ、いいんです。言おうとは思つてたんですけど」

「……………」

そんな話をしている中、プリムラは何やら怪訝な表情で空を見つめている。

「どうしたんですか、リムちゃん？」

「……何かヘン、ザワザワする……」

「ヘンで、何が？」

すると何処からか火花が飛び散るような音が聞こえてきた。

「な、何だ？」

「稟さま、危ない！」

突然空の一角から、放電が起き、それがだんだん大きくなっていく。そして、まるで落雷の様に地面へと落ちて行く。

「……稟くん、あそこって、たしか……」

「ああ、あそこはあいつが……忠夫が消えた空き地だ！」

「……ひよつとして……」

楓は咄嗟に走り出す。

「楓……！」

「カエちゃん、危ないよ！」

「くっ、皆はここにいろ。楓……！」

（もしかして、もしかして、もしかして）

楓は危険を顧みず走り続けた、一縷の望みに賭けて。

「待て！危ないぞ楓」

「で、でも、もしかしたらタダくんが……」

其処に突然二人の人影が現れる。

「稟殿！」

「稟ちゃん！」

転移魔法だろう、突然神王と魔王が現れた。

「おじさん達」

「一体何が遭ったってんだ？」

「突然強力な魔力を感じたと思ったたらこんな事になってるし」

「俺達にも何が何だか…」

ようやく放電が収まって来て、小さくなっていく放電の中に人影が見えてきた。

「ん、誰か居るようだよ？」

「ああ、男みてえだな」

「……」

楓はそれを見て愕然とした。そこには子狐を抱きしめた傷だらけの青年がいた。

ボロボロになっているが、その男が着ているのは「向こうの世界」で彼がいつも着ていた

GジャンとGパンにトレードマークの赤いバンダナだった。

「…や、やっぱり…タ、タダくん…タダくんだ」

「何！ほ、本当か楓！」
「タダくーんっ！！」

楓は稟の手を振り払って横島の元へと駆けよる。

「タダくん？」

「知り合いなのかい？」

「ええ、俺達の幼馴染です」

「タダくん！タダくん！タダくん！大丈夫？しっかりして！」
「…う、うっう……」

「楓ちゃん、落ち着いて。とにかく家に運ぼう」

「お願いします。俺はシア達に知らせて急いで帰ります」

「おう、こっちは任せときな！」

「楓ちゃんしっかり掴まってるんだよ。行くよ」

神王と魔王は楓達と共に転移して行った。

「…忠夫……おっと、こうしちゃいられない」

稟はシア達に事情を説明すると家路を急いだ。

芙蓉邸のリビングにシアやネリネ達は集まっていて、神王達の治癒

魔法によつて横島の傷は殆ど治っていた。

「タダくん……」

楓は忠夫の手を握りしめたまま片時も離れようとしなかった。

「ひでえ傷だな……」

「うん、この傷もそうだけど体中に付いてる古傷、特にこの背中の傷なんか、かなり強力な魔力砲を受けた跡だよ」

（それはあの女性^{ひと}を、ルシオラさんを助けた時の……やだな、私こんな時に嫉妬してる）

「忠夫、一体お前に何があつたんだ？」

「お父さん、この子の傷ももう大丈夫だよ」

「でも珍しいですね。尾が九本もある狐なんて」

「でも可愛い」

攻撃を受けた為か、狐形態に戻っていたタマモはシア達にヒーリングを受けていた。

「尾が九本……！！九尾の狐！」

「うわっ！ど、どうしたんスか、稟くん？」

「どうしたも何も、九尾の狐といったら……」

「稟くん、大丈夫だよ。だってタダくんが大事そうに抱いて守っていた子なんだから」

「……そうだな、忠夫を信じるか」

「ずいぶん信頼なさってるんですね」

「ああ、忠夫は友達というだけじゃない。俺達にとって大事な恩人なんだ」

そんな風に稟が昔を懐かしむ様にしていると横島の意識が覚醒して来たのかうつすらと目を開けて来た。

「うつ、こ、ここは？」

「タダくん！」

「忠夫！」

「……知らない天井だ……」

「……何かヤバイ事を言ったような気もするが、大丈夫か？」

「……誰だ、お前？」

「誰って、そうか、あれから8年立つから分からないのか。俺だよ、俺は土見稟だ」

「……悪い、やっぱり知らん」

「……!!そ、そんな……忠夫……」

自分達の事を知らないという横島に稟は愕然とするがならばと、今度は楓を思い出させようとする。

「ならこの娘はどうだ？楓、芙蓉楓だ。楓の事も忘れたのか？」

「おお、可愛い。お穰さん、僕は横s……あれ？」

横島は楓を見るなり、何時もの様にナンパをしようとするが何かが彼を押し留めた。

（何だ？何か変だ。何時もならすぐにナンパをしようとするのに……何かが頭に引つ掛かる。誰だろうこの娘は？いや……誰だっけ？）

「タダくん…やっぱり…」

「ゴメン、君は俺の事知ってるみたいだけど俺には…分からない」

その時、離れていた場所でタマモのヒーリングをしていたシアは突如立ち上がり横島に声を上げる。

「ちょっと、知らないなんて酷いじゃない。稟くん達、貴方の事ずいぶんと心配してたのよ！」

横島はそう言って抗議してくるシアを見た瞬間その場から消えて、

「僕の名前は横島忠夫。美しいお嬢さん、貴女のお名前は？」

「え、え、え？…わ、私っスか？私の名前はリシアンサス、シアと呼んでほしいっス」

何時の間にかシアが居る場所に移動し、シアを口説いていた。

「は、早い…」

「み、見えたかまー坊？」

「い、いや、全然…」

（そうでした、向こうに行ってからタダくんはこうでした…）

その一瞬の出来事に稟、そして神王と魔王は啞然とし、楓はやはりという感じで一人溜息を付いていた。

「あ、あの…」

そんなシアの隣でタマモを抱き抱えていたネリネが呼びかけて来た。

「おお、ここにも美女がっ…て、タマモ!？」

「あ、この子なら大丈夫ですよ。酷い怪我でしたがもう治ってます」

横島はネリネからタマモを受け取るとすぐさまタマモに靈氣を送り込み彼女を覚醒させた。

「何だ!今の力は?」

「魔力とは何か違う力だね」

靈力という概念を知らない神王と魔王は横島が放ったその力に驚いている。

「キューン…」

「大丈夫か、タマモ?」

「コンッ!」

覚醒したタマモは目の前に横島が居るのに気付くと笑顔で抱きついて来た。

「タマモちゃんという名前なんですか?」

「そういう美しい貴女のお名前は?あ、僕は横島忠夫」

安心したのも束の間、タマモを頭に乗せてさっそくネリネの手を掴み、口説く忠夫であった。

「は、はい。ネリネと申します、宜しければリンとお呼び下さい」

「うゝん、俺はネリネちゃんと呼びたいけどいい?」

「はい、構いませんよ」

すると当然面白くないのがタマモ。すぐに？れて横島に噛み付くのであった。

「ウゝ、コンッ！」ガジガジッ

（いいかげんにしなさい！この節操無し！）

「こら、やめろ、痛て、痛てー！」

「…変わったな…忠夫の奴…」

子供の頃とはあまりに変わっている横島に稟はただ、啞然とするほかなかった。

「なあ、忠夫君といったかな。少し話をしてもいいかい？」

そこに魔王フォーベシイが近づいてきて横島に語りかける。

「その魔力、あんた魔族か？」

「あ、ああ。自己紹介がまだだったね、私の名はフォーベシイ、一応魔王をやらせてもらっているよ」

「魔王だと！性懲りもなくまた俺を狙ってきたのか！」

感覚的にはついさつきまで反デタントの神魔族と闘っていた横島は魔王という言葉に過剰に反応し、半歩下がって右手に霊波刀を展開させた。

「お、おい忠夫！何をするんだ？」

「タダくん、待って！この人は悪い魔族じゃありません」

その事情を何となくだが理解した楓は横島に駆け寄ってフォーベシ

イに悪意が無い事を説明する。

「えっ、… そうなのか。反デタントの勢力とは関係ないのか？」

「その反デタントとやらががどんな勢力かは知らないけど私は君を傷つけるつもりはないよ」

「そっすか。スンませんでした」

そう言つて横島は謝りながら霊波刀を消した。

「な、なあ、今のそれは何なんだ？ それにお前さんが使っているのは魔力とはちがう力みてえだが」

「何って霊力を知らないんスか？」

「落ち着いて神ちゃん。とにかく、一度今の事態を整理し直してから話を進める事にしようか」

「そうだな」

話を進めるうちにお互いの事情がわかつて来た。

忠夫はもともとこの世界に住んでいてある魔族が起こした事件のせいで平行世界であるGS世界へ飛ばされその時に記憶を失ったらしい。

GS世界にも神族や魔族は存在するがお互いに対立しあっている事。忠夫は魔力ではなく霊力を使うGSである事など。

(ヨコシマ)

(分かっている。魔神大戦や文珠の事、魔族化の事は喋るつもりはない)

ピンポン、ピンポン

そこに来客を知らせる呼び鈴が鳴った。

「私が出ますね」

『忠夫くんが帰って来たって本当？』

『ええ、本当ですけど…』

足音と共にやって来たのはもう一人の幼馴染である桜だった。

「忠夫くん！」

「えーと、君は？」

「私だよ、桜、八重桜。忘れちゃったの？」

「どうもそうらしいんだ」

「えー。稟くん、それってどういう事？」

「8年前だったか？俺は子供の頃の記憶って覚えてないんだ」

「そ、そんな…何で？」

「じゃあ、改めて自己紹介しようか。さっきも言ったけど私の名前はフォーベシイ。魔界の王だよ」

「俺の名はユーストマ。神界の王だ」

「私も改めましてリシアンサスです。長いからシアって呼んでくれていいよ。神界の姫だけど気にしないで気軽に友達付き合いたくねると嬉しいっす」

「改めましてネリネです。私も魔界の姫ですが、友達として気軽にお付き合いして下さると嬉しいです」

「私はプリムラ。…人工生命体3号……」

「プ、プリムラ！」

「そこまで正直に言わなくても」

「いや、隠しきれぬ事じゃないしはつきり言っておくべきだよ。彼女はある理由から人工的に生み出された生命体なんだ。詳しい事情は言えないけど今はこの家で稟ちゃんや楓ちゃんと三人で暮らしてるんだよ」

「ふん、でも見た目は普通と変わらない可愛い女の子だな」

そう言つて横島はプリムラの頭を優しく撫でた。

「あつ……」

プリムラは照れながらもその手を拒まなかった。

（出た。人外キラースキル）

横島の無自覚で発動するそのスキルをタマモは溜息を付きながら見ていた。

「…驚かねえのか？」

「何を？」

「何をつて、人工生命体だよ。普通はもつと驚くだろう？」

「そんな事を言われても、向こうじゃバンパイアハーフの友達はいやし、九十九神の机妖怪はいやし、人口魂を持つアンドロイドはいやし、そのアンドロイドを作った錬金術師はもう千年も生きてるし、ウチの事務所には人工幽霊が憑いていて会話も成立するし…」

「ちょ、ちよつと待て！何なんだそりゃ！」

「それに何より…タマモ！」

『…了解』

「喋った！」

タマモは横島の頭から降りると体から光を放ち人型形体になった。

「き、狐が人の姿になった！？」

「だから今更人工生命体ぐらいで驚けと言われても…なあ？」

「ねえ？」

「な、なあ、忠夫。その娘ってやっぱり九尾の…」

「ああ、金毛白面、九尾の妖狐だ。言つとくけどタマモは何も悪い事はしてないぞ」

「もつとも、殺生石から転生したての頃に追い立てられて殺されかけたけどね、ヨコシマとおキヌちゃんが庇ってくれなかったら確実に殺されてたわ」

（ああ、やっぱりタダくんだ）

「解った。そう言う事なら私達もその娘には手は出さないと約束しよう」

「…信じていいんスね？」

「ああ、神界と」

「魔界の」

『王の名に賭けて約束しよう』

「じゃあ俺も二人の事を信じます」

「ヨコシマが信じるなら私も信じるわ」

「ねえ、忠夫くん。やっぱり私達の事思い出せない？」

「……タダくん……」

「えっと、桜ちゃんに楓ちゃんに……鱗だっけ？」

「……稟だ……何でそんな無理やりな変換をする」

「ごめんな、見覚えがあるような気はするんだけど……やっぱり思い出せない」

「何か思い出す切っ掛けがあればいいんですけど」

「じゃあ、みんなで遊んだ公園に行ってみない？」

「そうだな、行ってみるか！」

「いいですか、タダくん？」

「ああ、このままじゃ埒が明かないからな」

そうして皆は思い出の公園に向かった。

「ここは私達みんなで遊んだ公園……やっぱり思い出せない？」

「鬼ごっこしたり、かくれんぼしたり……後……お医者さんゴッ」とか。きやつ」

「それは思い出さなくていい……」

稟は何処か遠い眼をして呟いた。……何かあったらしい。

忠夫は周りを見回しながら思い出そうとしているようだ。

（たしかに見覚えがあるような、ありふれた公園だけど妙に懐かしい）

そうしていると母親だろう、遊んでいる子供達を呼ぶ声がした。

『美紀ー、そろそろ帰りなさい』『隆ー』『桂子ー、ご飯よー』

『はー……い！！』

「私達もあやってお母さん達が迎えにきたよね」

「桜！！」

「あつ！ご、ごめんなさい忠夫くん……」

だが横島は呆然としてその光景を見ていた。

「……タダくん？」

（そうだ、たしか遊んでいて……誰か呼ぶ声がして……そして……）

・
・
・

夕陽に染まる公園で遊ぶ4人の子供達、みんな笑顔で笑いが途切れなかった。

そこに桜の母桃子、稟の母蘭、そして楓の母紅葉が迎えにやって来

た。

『桜ー、そろそろ帰りなさい』

『稟、あなたもよ』

『楓、帰りましょう』

『はーい』

『じゃあ俺も帰るね』

『あ、忠夫君、ウチでご飯食べていかない？』

『え、ホントお母さん』

『でも、園長先生が待つてるし』

『園長先生には私から言っておいてあげるから』

『うん！ありがとう、おばちゃん』

ピクッ

ふと、紅葉の目がつり上がった。

彼の肩に置いた手に少し力がこもる、気のせいかなその瞳には何やら怪しい光が見え隠れしている様な。

『も、紅葉？』

『ねえ忠夫君？前から聞こうと思ってたんだけどなんで「おばちゃん」なの？』

『え、だ、だって母ちゃんじゃないし……』

『そうね、だったら「紅葉母ちゃん」って呼んでみて』

『えっ？か、かあ……』

『うん、さあ早く』

『も、紅葉か、かあ……』

『早く、早く』

『紅葉母ちゃん……』

忠夫少年はさすがに照れくさいのか真っ赤になりながらもようやく

呼び終えた。

『きゃーーーーー』うれしい！私、男の子もほしかったのよ』

そう叫びながらギュツと抱きしめた。

『ねえ稟君、桃子お母さんって呼んでみない？』

『え？で、でも』

『もーもーこー』

『いいじゃない、ケチ！』

『さあ、帰りましょ。今日はシチューだからね』

『わーい、私お母さんのシチュー大好き』

『ありがとう、紅葉母ちゃん！』

『はあ〜。ねえ忠夫君、本当のお母さんになってあげようか？』

『え、え、え、え〜そ、そんな、タダくんのお嫁さんだなんて、そんな』

『じゃ、じゃあ私は稟くんの…』

楓と桜は何を考えたのか耳まで真っ赤にしていた。

『ぷっ』

『あはははははは』

桃子と蘭はそれを見て笑いだした。

『な、なんで笑うの〜？』

『ひどいよ〜』

『ふふふ、さあ！』

笑いながら楓と忠夫少年に手を差し出す紅葉、そしてその手をつか

む忠夫。

そんな皆を夕陽が染めていた。

『うん！紅葉母ちゃん！！』

・ ・ ・

「ヨコシマ？」

「タダくん！どうしたの？」

横島は夕焼けに染まる公園を見つめて泣いていた。

「忠夫？」

「忠夫くん」

「も、紅葉…」

「！！！！」

「紅葉母ちゃん……」

「お、思い出したのか！！」

「本当？忠夫くん！」

「…タ、タダくん？」

楓は横島を見つめながら涙を流していた。思い出した、その事を信じて。

横島は振り返り楓を見つめ、そして言った。

「…ごめんな、楓」

「…う、ううう、グスッ…な、何で、何でタダくんが謝るの？謝るのは…うう、うう、謝るのは、グスッグスッ…私が、私が…うえええええ」

「楓？」

楓は泣きじゃくりながら横島に抱きついた。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「楓、何で謝るんだ？俺は……」

「忠夫、楓は気付いてるんだよ、本当の事に」

「稟…そっか…」

横島はしがみついて泣いている楓をそつと抱きしめて頭を撫でてやる。

「むっ…まあ、とりあえず良かったわね、ヨコシマ」

「まあな、気にするな楓。俺がそうしたかっただけなんだ。その事で楓が苦しむと俺が苦しい、だからこれで終わりだ、笑ってくれ」

「うん、うん、うん」

楓は横島の腕の中で頻りに頷く。

「よかったね、稟くん」

「ああ、ようやく元通りだ」

（ほんとに良かった、これで気兼ねなく稟くんにアタックできるよ）

「ところでヨコシマ…」

「なんだタマモ？」

「いつまでやってるつもり」

「何を？」

「いつまでその娘を抱いてるのかって聞いているのよ！」

横島の胸の中に抱きしめられたまま頭を撫でられている楓はまるで猫のように丸くなっていた

「ふにゃ〜〜あ」

「は、ははは、はははは……」

「レア？ミディアム？ウエルダン？」

「堪忍や——！成り行きなんや——！あつたかくて柔らかかったんや——！」

「や、やだ、タダくん」

「ウエルダンけて——い——！」

タマモの狐火が横島に襲いかかる。

「ギャ————！」

そんな横島達をシア達は笑顔で見つめている。

「あはは、面白い人っスねー」

「ええ、賑やかになりそうですね」

「あの人、優しそう」

「うん、なんといっても稟くんの友達だもん」

「それに楓さんの今の笑顔、あんな嬉しそうなお顔初めて見ました」

「じゃあ、私達も行こう」

「うん」

「はい、行きましょう」

（神ちゃん、気づいてるかい？）

（おう、うまく隠しちゃうが忠夫殿のあの魔力、今まで感じたことのない波動だぜ）

（しかも、ヘタをするとプリムラを上回るかもしれないよ）
（ああ、何とかあの馬鹿共から守ってやらねえとな）
（稟ちゃんや楓ちゃんの大事な友達だからね）

横島はこの世界に帰って来た、これからどのような物語を紡いでいくのか？

それはまだ誰にもわからない。

続く

キャラ設定 1

横島忠夫

本作の主人公。

美神除霊事務所所属のGS。正式な免許は貰っているがいまだ美神の丁稚扱い（涙）

魔神大戦の時にルシオラをかばって重傷を負うが彼女の霊的構造を受け継ぎ命を長らえる。

その後魔族因子の暴走による魔族化で命の危険に晒されるが小竜姫の神族因子を注入する事により事なきを得る。

この魔族化により、神魔の半デタント勢力に狙われる事になる。

神魔の因子を同時に持つ事によりアシユタロスクラスの魔力を持つ神魔人（老師命名）となる。（外見上に大幅な変化あり）

一般の神魔族はこの事を知らされて無い為横島を半魔と呼ぶ。

普段は魔力封印の宝具により力を抑えている。

神魔の過激派の攻撃と文珠の作用により元々住んでいた平行世界に戻って来た。

土見稟

本作のもう一人の主人公。

神にも悪魔にも凡人にもなれるという某Sロボットののような属性を持つ男。

両親が死んだ後、楓の父親に引き取られ芙蓉家で暮らす事になる。
子供の頃にシアとネリネ（？）に出会い彼女達の心を救った事で想いを寄せられる。

忠夫とは楓を通じて知り合い、一番の友達になる。

彼にとって楓は友達というより妹といった感じで恋愛感情はない。

忠夫への呼び方は「忠夫」

芙蓉楓

忠夫と稟と桜の幼馴染。

忠夫とはある出来事がきっかけで出会い想いを寄せるようになる。

（次回のアバン参照）

子供の頃に母親の死で心を閉ざしかけたが忠夫が自分に憎しみを向けさせた事で

彼を憎むようになり、それが生きる気力になった。

後に父親と稟の会話から真実を知り忠夫の気持に応えるために笑うようになる。

何故か高校生の頃から平行世界にいる忠夫の夢を見るようになり魔神大戦や、

ルシオラとの悲恋の事を知っているが稟達には秘密にしている。
それ以降の事は夢を見なくなっていた為タマモの事は知らない。

忠夫への呼び方は「タダくん」

八重桜

忠夫と稟と楓の幼馴染。

初めて会った時から稟に想いを寄せている。

忠夫と楓の仲の変化は稟に聞いて知っている。

その為二人が元通りになるまでは稟に告白しない事になっていた。

本作では楓達と一緒にバーベナ学園に通っている。

親衛隊は「SSS」（桜、咲く、咲く）ps（シアの場合は「SSS？」（ツヴァイ））

忠夫への呼び方は「忠夫くん」

タマモ

金毛白面・九尾の妖狐の転生体。

転生したての頃、政府に追い立てられ殺されそうになるが忠夫とおキヌの手で

助けられる。最初はその恨みから人間を憎んでいたが忠夫達と触れ合うことで

徐々に仲間たちに溶け込んでいく。

特に忠夫にはよく懐き、その想いを恋心に変えていく。

買物の途中で神魔の過激派に襲われ忠夫と共にこの世界に転移してきた。

忠夫への呼び方は「ヨコシマ」

以降は次回。

《次回予告》

事件です事件です、事件なのですよ！

なんとあの、バーベナアイドルの頂点に君臨していた楓に遂に恋人が！？激怒する「KKK」

その恋人とやらは生き残れるのか？

そしてその恋人はなんと私をナンパしてきた！？おおお、遂に貧乳の時代が！！

次回第三話「激震！嵐のバーベナ学園！！」

さあ、お祭りの始まりなのですよ！

第三話「激震！嵐のバーベナ学園！！（前篇）」

大きな木のある空き地で少年と少女、忠夫と楓は出会った。

『え〜ん、え〜ん』

『ねえ、どうして泣いてるの？』

『え？ひつく、ひつく、あの子』

楓の指さす方を見たら子猫が木の上で小さくなって震えていた。おそらく何かの拍子に木に登って降りられなくなったのだろう。

『ニャ〜ン、ニャ〜ン』

『助けてあげたいけど、ひつく、わ、私、ひつく、木に登れ、ひつく、登れないから、ひつく、かわいそうだよ、うええ〜ん』

『わかった、俺が助けてあげる。だから泣かないでいいよ。』

『えっ、ほんと？』

『うん、俺木登り得意なんだ』

忠夫はするすると木を登って行き、子猫に手を差し伸べた。

『さあ、おいで。一緒に降りよう』

『…ニャ〜ン…』

トコトコ…

子猫は忠夫の所に行くと頭の上に乗った。

『よし、じゃあ降りるよ』

『だ、だいじょうぶ？』

『だいじょうぶだよ…あつ』

『きゃあつ』

忠夫はうつかり足を滑らせてしまったが、あまり高くない所からだったので尻もちをつく程度で済んだようだ。

『いててて……』

『ね、ねえ、だいじょうぶ？ケガしてない？』

『うん、これくらいヘツチャラだよ！』

『ニャオ、ニャーオ！』

『ニャーンー！』

親猫だろう、子猫を呼ぶように鳴くと子猫もそれに答えた。

子猫は忠夫の肩に乗ると忠夫のほっぺたをぺロリと舐め親猫の所に走って行った。

『お母さんのところに帰れたんだね、よかった』

『いいな……』

『え？』

『俺、母ちゃんも父ちゃんもいないんだ…』

そう言って寂しそうにしている忠夫を見て楓は何かしてあげたかった。

『だったら私の家にあそびにくる？』

『えっ？』

『私のお母さんの作るおかし、とってもおいしいの。いっしょに食べてほしいな』

『いいの？』

『うんっ！私のなまえは楓。芙蓉楓』

『俺の名前は忠夫。浜菊忠夫』

『じゃあ、タダくんだ』

『じゃあ、楓』

『うん、タダくん。行こう』

手を差し出すとギュッと握ってくれた。

（えへへタダくんのお手手あったかい♪）

そうして手を繋いで二人で走り出した。

カーテンの隙間から朝日が差し込み、目覚ましの電子音で楓は目を覚ます。

「懐かしい夢、久しぶりに見たな」

机の上を見ると子供の頃の写真が幾つか飾られている。

その中に楓と忠夫と紅葉の三人で写っている写真があった。

あれがタダくんと私の初めての出会い……

そして、あれが私の初恋……

第三話「激震！嵐のバーベナ学園！！（前編）」

あの後お父さんにタダくんが帰って来た事を伝えると出張先から飛んで帰って来た。

『忠夫君、よく…よく無事でいてくれたね。……本当に良かった…』

『幹夫おじさん…心配させてすみませんっす。それから、ありがとう』

お父さんはタダくんの肩を抱いて泣いていた。本当にタダくんの事を心配していたから。

戸籍の事などはタダくんは行方不明という事になっていたので問題はなかったけどむしろ問題だったのはタマモちゃんだった。

でもそれも神王様達が『何か』したらしく数時間でタマモちゃんの戸籍が用意されていた。

どうやら、タダくんの従妹という事になったらしい。

タダくん達がどうやったのかを聞いていたけど『いや、人間話し合いつてのは大事だよな』と言っていた。

結局、詳しい事は知らない方が良いいう事で済ます事になった。

そしてタダくんは孤児院を経営していた菊山先生に会いに行った。孤児院はすでに閉鎖されていたが菊山先生はタダくんが帰って来た事をまるで自分の子供が帰って来たかのように喜んでいた。

『信じていたよ忠夫君、良く帰って来てくれた』

『先生…有り難うございます』

『今は姓を横島と名のってるらしいけど？』

『はい。母ちゃんと父ちゃんには悪いけど今の俺がいるのは横島の両親のおかげっすからこれからこれも横島の姓を名のるつもりっす』

『ああ、それでいいだろう。御両親も分かってくれるさ。そうだ、御両親と言えば…』

そう言う先生はタダくんに通帳と印鑑を差し出した。

『これは？』

『君の御両親が残された遺産だよ。君が成人するまではと私が預かっていたんだがもう渡してもいいだろう』

『…母ちゃんと父ちゃんが……』

タダくんのお母さんとお父さん。どんな人だったんだろう？
家に帰るとタダくんはその通帳をお父さんに渡した。

『タダでお世話になるのも何ですからこれを生活費の足しにして下さい』

『そんな事は気にしないでいいんだがね。分かった、取りあえず預かっておこう』

そう言う通帳を受け取る幹夫だったが……

『ああ、預かっておくよ。君と楓の結婚資金としてね。ふふふふフフフフフフ』

そんな幹夫の呟きは誰の耳にも聞こえなかった。

そして今日からタダくんも私達と一緒にバーベナ学園に通う事になった。

コンコンッ

タダくんの部屋の扉をノックして部屋に入るとタダくんはまだ布団をかぶって寝ていた。

「タダくん、朝ですよ。起きて下さい」

ユサユサッ

私はそう言いながらタダくんを軽くゆする。
えへへ、何だか新婚さんみたいだな♪

「ううん」

「タダくん、タダ……」

モコッ

「……え」と……」

モコッ

「……………（　・　・　・　）」

モゾモゾ

「動いた！」

モコモコ

「あわわ…お布団から出ちゃう…／＼／」

ヒョコッ

「はうあっ！！」

慌てて両手で目を覆い隠したけど、好奇心に負けてチラッと指の間から覗いてみたら……
布団の裾から狐の姿のタマモちゃんが顔を出していた。

『……………』

「……………」

『…おはよう…』

「…お、おはようございます……」

『何だと思った？』

「はわわ……」

タマモちゃんは人型になると私の傍に近づいて来て……

「…エッチ……」

そつと呟いて部屋を出て行った。

「うつゝタ、タダくん！今日から学校です。早く起きてください！」

そう言つて布団を剥ぎ取ると……

モコッ

「ひゃあああ~~~~~！」

そして学園に行く為に歩いている横島の頬には真っ赤な紅葉が刻まれていた。

「朝なんだからしょうがないじゃないか……」

「うつゝ〜」

俯きながらそつ呟く横島を楓は頬を赤く染め、涙ぐみながら睨んでいた。

「稟さま、何があつたんですか？」

「聞かないでやってくれ」

「そ、そうですか……」

今私たちは皆で学園に登校している、タマモちゃんも神王様達のおかげで一緒に通うことができた。

プリムラちゃんと同じ学年だということだ。

「はあ……」

力無く溜息を付く稟にシアが話しかける。

「どうしたの、稟くん？」

「いやな、これから樹が二人になるかと思うと頭が痛くなって……」

「あはは……」

シアも横島と樹のツーショットを思い浮かべると、乾いた笑いしか出て来なかった。

「何、その樹って奴そういう奴なの？」

「ああ、そういうy……」

「稟ちゃん、おっはよー！ー！」

稟の背中に亜沙の平手が小気味いい音を立る。

「いたたたた……あ、亜沙先輩、おはようございます」

「なーに、稟ちゃん。朝からため息なんかついちゃって、幸せが逃げて行くよ？」

「今ので三割ほど飛んで行った気がしますかね……」

「まあまあ、ところで見慣れない顔があるみて……」

「僕の名は横島忠夫。お美しい貴女のお名前は？」

横島は何時もの如く亜沙の手を取って口説きを始めた。

「わっ、びつくりした。え〜と、キミは？」

「俺と楓と桜の幼馴染で浜菊……じゃ無かった、横島忠夫といいます。詳しい説明は後でしますけどこれからはこのタマモという娘と一緒に俺達と暮らすことになりました」

「一緒って、楓とも？」

「は、はい。タダくんと一緒です」

「ふ〜ん、タダくんか……稟ちゃんとそういう雰囲気じゃなかったと思ったらそういうことか」

「えへへ」

「忠夫ちゃんだね、ボクは時雨亜沙。三年生だよ、よろしくね。そしてこっちが……」

「まあまあ、亜沙ちゃんてば稟さんという人が居るのにその方とそんな事を、まあまあ」

「あ〜、また始まった。とにかく、この娘はカレハ。ボクと同じ三年生、ちよつと……かなり妄想壁が強いけど、とてもいい子だから」

「は、はあ……」

「まあまあ、そんな、三人でだなんて。亜沙ちゃんてば、まあまあ」

「どこまで行く気なの！いい加減帰って来なさい！」

「ともかく急ぎましょう。このままだと遅刻してしまいます」

「そうね、行くわよカレハ」

「はい、まいりましょう」

「……つかめない人ね……」

そう言いながらも私達は学園に着いた。

「おはよう」

「おはようございます」

「おはよースッ」

「おはようございます」

「おはよう」

挨拶をしながら教室に入ってきた稟達に麻弓「タイムは駆け寄って行く。」

「あつ、土見くん、ラバーズ諸君、聞いた？このクラスに転校生が来るんだって」

「男らしいから俺様には何の関係もないけどな」

「このクラスに？ということとは」

「一緒のクラスになったんですね」

「何？もしかして知ってる人」

「は、はい」

「わっ、楓ってば何赤くなってるの？もしかして楓の好きな人だったりして」

「はははは、麻弓、冗談は胸だけn…グボハッ」

樹は麻弓の鉄拳を受けて吹き飛んだ。

「まったく、乙女の胸を冗談呼ばわりするとは何事よ！ねえ、楓……」

そう言いながら楓を見ると楓は真つ赤な顔をしながら俯いていた。

「ち、ちよつと、楓……えっ、マジ……？」

「何だ――――！！」

KKKの悲痛なまでの叫びは学園中に響き渡った。

「まったく、仮にも担任になる女性をいきなり口説こうとする奴があるか」

撫子は横島に注意をしながら廊下を歩いていた。

「すんません」

「いいか、くれぐれも問題を起こすんじゃないぞ。いいな、横うち」
「なるべく努力してみます」

教室に着くと騒がしい生徒達を一括する。

「みんな、席に着け。知っているようだが転校生を紹介する。先に言っておくがこれから紹介する奴はある事情からツツチと一緒に

芙蓉の家に住む事になっているがこれは芙蓉の父親も承知していることだから詮索は無用だ。では横っち、入って来い」

呼ばれると横島は教室に入って行くが、

「どうも、横島忠夫です。よろし……」

男共は殺気を隠すことなく横島を睨み付けて来る。

「な、何だこの尋常じゃない殺気は」

「気にするな。もてない男共の哀れなやつかみだ」

撫子はその男共にあっさりと止めをさした。

「ひ、ひどい……」

男共に出来たのは涙ながらにそうそつと呟く事だけだった。

「ねえねえ、貴方、楓とどんな関係なの？そこの所をちょっと詳しく……」

「僕は横島忠夫、美しい君の名前を覚えてくれないかな？」

横島は麻弓に話しかけられるや否や、すぐさま麻弓に駆け寄り両手をつかみナンパを始める。

「えっえっえっ？美しい？私が？何、ひょっとして私ナンパされているの？あ、そっか、私は麻弓「タイム。よ、よろしく」

「よろしく、麻弓ちゃん。へー、オッドアイか。幻想的で素敵な瞳だね」

そう左右、色の違う瞳を見つめながら横島は麻弓に微笑みかける。
ニコポ発動。

（へ……今何て言ったの？……幻想的で素敵……そ、そんな事言われたの初めて、何？これって私のターン？つ、遂に私の…貧乳の時代がっ！！）

麻弓は手を握られたまま顔を赤くする。

「むー、タダくんてば」

「あはは…」

「よかったじゃないか、麻弓。その胸でもいいそうだよ」

「誰だ、お前は？」

横島はそう言って来る男、樹を睨みつけながら聞く。

「自他と共に認める史上最悪の女好きの男。緑葉樹よ」

「史上最悪とは聞き捨てならないね。俺様はすべての女性を平等に愛しているだけだよ」

「では緑葉よ、その胸でもとはどういう事だ？」

「どうも何も麻弓の貧乳では…」

「馬鹿野郎……っ！！」

「がはあっ！！」

横島は樹に駆け寄るとJETなアップパーをぶちかました。

「い、行き成り何をする！？」

「愚か者め、貧しいとは何事だ！！女性の胸に貧しいという形容詞はあつてはならない。俺も男だ、巨乳は大好物だ。しかし、同時に小さな胸も否定はしない。女性の胸は生命を育む神秘の象徴だ、それを小さいというだけで否定した貴様に女好きを名乗る資格はない！！」

忠夫が言い終えると樹は真っ白に燃え尽きた。

とたんにクラス的女子から拍手が巻き起こった。

「そうっす、胸の大きさなんか関係ないっす」
「だよね、だよね」

「はあ、またややこしい奴が増えたか」

撫子は額に手をやりながら頭痛を堪えている。
まだまだ騒動は収まりそうにない。

続く！

「お、俺様は……俺様は……」

樹は未だ白く燃え尽きたままだった。

キャラ設定2

麻弓「タイム

魔族と人族のハーフ。それ故に子供の頃に迫害にあってきた。
自分の小さな胸とオッドアイにコンプレックスを持っていたがそれらを全く気にしない忠夫に気を惹かれていく。

いったん彼女に弱みを握られると逆らうことは出来なくなるバーベナのヒル。

忠夫への呼び方は「横島くん」

紅薔薇撫子

忠夫達のクラスの担任。

生徒達からは紅女史と呼ばれている。

緑葉二世となりそんな忠夫に頭を抱える今日この頃。

忠夫への呼び方は「横っち」

緑葉樹

バーベナの及川……以上！

忠夫への呼び方は「忠夫」

シア達の設定は彼女達がメインの話で行います。

《次回予告》

学園を駆け巡る「芙蓉楓に恋人現る！」の大ニュース。

稟ちゃんから忠夫ちゃんに移ったKKKの追撃戦。

そしてお昼休みに聞かされた忠夫ちゃんの生い立ち。

GS？平行世界？妖狐のタマモちゃん？

でも二人ともいい子だから問題なし♪

次回・第四話「激震！嵐のバーベナ学園！！」（後編）

面白くなりそう！

第四話「激震！嵐のバーベナ学園！！（後編）」

今日は『三世界平和宣言』がある日だ。

あの日から楓は元気になって友達と遊んでいる。

でも俺に対しては憎しみを思いつきりぶつけて来て、みんなも楓に嫌われた俺をさけている。

覚悟はしてたけどやっぱり辛い。

稟や桜はホントの事を言うべきだと言ってくれたけど今はまだダメだ。

今ホントの事を知ると楓は多分耐えられない、俺がガマンするしかない。

『平和宣言か。魔族や神族の子供がここに来ると友達になってくれるかなあ』

俺は空き地でそんな事を考えながらぼんやりとしていた。

そこに誰かの声が聞こえて来た。

『やはり此処の空間が不安定になっているな、強引な開門が影響しているようだ。まあ、俺には好都合だったかな。何が平和宣言だ！魔力もろくに持たない人族と対等に付き合えなんて冗談じゃない、此処の空間をぶち壊せば三世界は再び分断されるはずだ』

そんな危なっかしい事を言っている男が居た。あの長い耳は魔族だ。そしてその魔族の男は爆弾みたいな物を取り出した。

『待てよ！何をするんだ！』

俺はその男に飛びかかって爆弾みたいな物を奪い取ろうとした。

『な。何だこのガキは！離せ、くそっ！…あっしまった！』

男の手から爆弾が落ちた。

『くそっ 魔力補給が十分じゃないってのに、邪魔した罰だ！そのまま死んでしまえ！』

『…えっ…』

男が逃げだすと爆弾から光が飛び出し、爆発した。

ドガアアアーーーーーン！

『うわああーーーー！』

厳戒態勢の中で起きたその爆発は直ぐに神魔の警備隊に察知されその魔族はあえなく取り押さえられた、そして爆発のあった空き地には一つの帽子が焼け焦げた形で落ちていた。

……それは稟が忠夫にあげた帽子だった……

ある病院で彼は目覚めた。

『うつ……』

『目が覚めたかい？』

『先生、この子は大丈夫ですか？』

『ああ、もう峠は越したからね』

『本当ですか、良かった』

忠夫が目を覚ますとそこには涙を流しながら微笑んでいる夫婦が居た。

その夫婦の名は横島大樹と横島百合子と名のつた。

『この人達は傷だらけだった君を助けてくれたんだよ』

『そうなんだ、ありがとうおばちゃん達』

『そんな事はいいのよ。ねえ、君の名前は？』

『俺の名前……忠夫……』

『忠夫君かい。それから？』

『後は………わかんない……』

その後彼は夫婦の養子になり、『横島忠夫』として生きて行く事になる。

この世界での『再会』と『出会い』は運命だったのか…それとも……

第四話「激震！嵐のバーベナ学園！！（後編）」

授業が終り、休み時間になるとタマモとプリムラが横島達の教室へとやって来た。

「ヨコシマ、新しい学校はどう？」

「おうタマモ、そっちはどうだ？」

「プリムラと同じクラスになったわ」

「そうか、プリムラ、タマモをよろしくな」

そういつてプリムラの頭を撫でる。

「うん、タマモは友達だから／＼／＼／＼」

ピクッ

横島に頭を撫でられて紅くなるプリムラを見て男共の表情が陰しく

なる。

「あれ、ひょっとして楓だけじゃなくプリムラちゃんまで落としたの？」

ギリリッ

男共の眼が紅く光る。

「横島忠夫――！！人誅の時間だ――！！」

「何じゃ、お前らは――っ」

「問答無用――！！大人しく地獄に召されろ――！！」

「冗談じゃないわ――い！」

タタタタタタッ

横島はすぐにその場から逃げ出す。

「逃げたぞ、追え――！！他のクラスからも援軍を出すんだ――！！」

「応ともよ――！！」

ドドドドドドドドドドドドドド

そうして男共は横島の追撃戦へと入って行く。

「…何なのアレは？」

「アレは楓とプリムラちゃんの親衛隊で『きつときつと楓ちゃん』

KKKKと『プリムラちゃんプリティープリティー』 PPPPよ

「バカみたい」

「そのうちタマモちゃんにも出来るかも」

「全つ力で遠慮したいわ!!」

「それにしても横島さまは大丈夫でしょうか?」

「あんな有象無象ザコキャラがいくら集まってもヨコシマの敵じゃないわよ」

「忠夫くん、そんなに強いのか?」

「まあ、見てなさい」

窓の外を見てみると校舎から出て来た忠夫が校舎の間の通路で親衛隊『KKK』と『PPP』に挟み撃ちにされていた。

「はーーーーはははははっ!!これで最後だな横島忠夫!さあ、皆の者止めだーーーー!!」

「おおおおおおーーーー!!」

襲いかかって来た親衛隊を横目に見ながら忠夫はほくそ笑んで指を鳴らした。

パチンツ

KKK↓【穴】(。(【穴】↑PPP

「平安京エイリアンの術ーーーー!」

突然足元に現れた穴に親衛隊達はなすすべもなく落ちていく。

「い、隠居掘りだとーーーー!?!」

「わははははっ正義は勝つーーーー!!」

忠夫は穴の中でもがいている親衛隊の頭を踏み台にして走り去った。

「あいつ、何時の間に穴なんか掘ってたんだ？」

「あはは…確かにすごいね」

（こんな事に文珠を使って、ばれたらどうするのよ。もっとうまい方法あったらるうに）

（タダくん、不用心です）

その後も休み時間のたびに忠夫は追いまわされたがのらりくらりとかわし続け残りの親衛隊、『SSS』『SSS?』『RRR』は忠夫の動向を監視する為に待機していて、稟はおそらく入学以来初めてあろう平穏な休み時間に一人涙していた。

そして昼休み、亜沙とカレハも一緒に屋上で昼食を取りながら話をする事になった。

「ゴーストスイーパー？」

「そうよ、ヨコシマはGSなのよ」

「でもそんな職業聞いたこともありませんわ」

「ああ、俺とタマモは平行世界を移動して来たんです」

「へえ、それじゃあ忠夫ちゃんとタマモちゃんはことは違う別の人界から来たの？」

「はい。もっとも俺は元々この世界に住んでたんですけどある事情で向こうの世界に飛ばされてそれからタマモと一緒にこっちに帰っ

て来たわけですよ」

「どうやって？」

「それは、その、何と言うか……」

「ああ、言いにくい事なら無理に言わなくてもいいのよ」

「すみません」

「それで向こうはどんな世界なんだい？ やっぱり神族や魔族もいるのかい」

「まあな。ただ向こうでは神族と魔族は明確に聖と邪に分かれていて対立してるんだ。もっとも今はハルマゲドンを回避するためのデタントが進んでいて表立った対立は少なくなっているがな」

そこまで言うとしアとネリネは辛そうな顔をした。

「向こうの神族と魔族は敵対してるんだよね」

「残念です」

「だ、大丈夫大丈夫。全員が対立してるわけじゃないから。実際に俺の友達には神族も魔族もいるし」

「敵対勢力同士なのにお互いの友達がいるのか？」

「ヨコシマは基本的に種族に垣根を作らないのよ。完全な敵じゃない限りは魔族だろうが妖怪だろうが差別することなく同じ目線で接してくれるのよ」

「接してくれる？」

「あ、そうか。麻弓達には言っただけだけど私は妖怪なのよ、それも最強の妖狐として名高い金毛白面九尾の妖狐よ」

「えーっ！？ あ、あの九尾の狐なのタマモちゃんは？」

その事に驚く亜沙達だが横島は慌てずに説明をする。

「九尾の狐が邪悪だっていうのはただのでっち上げなんだよ。本当は身を守るために時の権力者に身を寄せて居たんだ。それを陰陽師

達が妖怪だというだけで邪悪と決めつけただけなんだ」

「そうなんだ、じゃあ何の問題もないね。これからもよろしくね、タマモちゃん」

「私もよろしくお願いしますねタマモさん」

「俺様は美女と美少女の味方だからね、俺様もよろしく」

「私も友達だからね、よろしくなのですよ」

「良かったな、タマモ」

そう言つて忠夫はタマモの頭を優しく撫でた。

「うん…ありがとう……」

ドドドドドドドドドド

其処にやつて来たのは『KKK』と『PPP』。増援を募ったのか、更に人数が増えていた。

「やはり此処にいたな横島忠夫！今度こそ覚悟してもらつぞ！」

「ええ〜い、しつこい奴らめ」

タタタタタタタッ

「逃がすなー！ー！」

ドドドドドドドドドド

「懲りない奴らね」

「平和だな〜」

稟はコップのお茶を飲みながら青空を見上げながらそつと呟く。

「土見くん、オヤジ臭い」

「あはは……」

「無理ないっスね」

「そういえばシアとネリネは稟の婚約者候補って本当なの？」

「はい、本当ですよ」

「えへへ、照れるっス／＼／＼／」

（私もいつかは）

と、桜は呟き。

「世の間違っている」

と樹は不貞腐れていた。

「ひがまないひがまない」

「そうか、良かった。とりあえず恋敵にはならないのね」

「忠夫ちゃんはモテたの？」

タマモは溜息を付きながら遠い眼をして言った。

「ヨコシマに想いを寄せているのは人・神・魔・妖、種族に関係なく沢山いたわ。ただ、ヨコシマはナンパやセクハラを繰り返す割には自分に純粋に向けられる好意にはとことん鈍感なのよ」

「へー忠夫がね。何だかその娘達が可哀想だな」

稟はそう言うのだが……

《お前が言うのか！！》

タマモを除いた皆の心が一つになった瞬間であつた。

「横島くんは恋人は居なかつたの？」

（！！）

「さ、さあ。居るには居たらしいんだけど皆そのへんは詳しく教えてくれなかつたのよ（悪いけど今はあなた達に教える事は出来ないわ）」

（タダくんには……あの女性^{ひと}が……たぶん今も心の中に……）

「な、何か変な事聞いちゃつたかな？」

麻弓がそう言つた瞬間、校舎の外から横島の声が響き渡つた。

『平安京エイリアンの術——！！』

『あ、秋葉掘りだ——っ！？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そして放課後、せつかくだから皆で帰ろうという事になり横島達は亜沙達の部活が終わるのを屋上で待っていた。

「お待たせ——」

「お疲れ様です」

「うっっん、いい風」

外を眺めると空は夕焼けに染まっていた。

そんな夕焼けを女性陣は手すりに掴まりながら眺めている。

「うわっっ、すごい夕焼け」

「何で夕焼けってこんなに綺麗なのかな？」

「……昼と夜の間の一瞬の隙間、短い間しか見れないから余計に綺麗……なんだってさ……」

シアのそんな疑問に横島の口からは“あの言葉”が零れていた。

「ひゃっっ、忠夫ちゃんてばロマンチストなんだか……忠夫ちゃん？」

「どうしたの、忠夫くん？」

「え、何が？」

「忠夫、泣いてる」

プリムラにそう言われ、横島は自分が涙を流している事に気付いた。

「あれ、ははは……いや、何でも……何でもないんだ……」

「また紅葉さんの事思い出したのか？」

「いや、違うんだ……ただ、うっっ」

「ヨコシマ？」

（タダくん、やっぱり傷は癒えてないんですね。そこまでルシオラさんの事が……）

亜沙は涙を堪えている横島の肩を優しく抱いてそつと言った。

「ねえ、忠夫ちゃん。泣きたいんだっいたら思い切り泣いちゃいなよ。大丈夫、此処に居る子たちは笑ったりしないから、安心して泣いていいんだよ」

「うう、お、俺は…うわああ…うわああああー!!」

堪え切れなくなったのか、横島は優しく抱いてくれる亜沙の膝に顔を埋め、声を上げて泣き出した。

（ルシオラ、この世界の夕日も優しく綺麗だ。俺はもう一度お前と夕日が見たい…もう一度、お前と見たかった。でもそれはもう…叶わない…）

横島は恋人を想って泣いた。今生ではもう会えない、会う事が叶わなくなった…蛍の少女を想って…

続く…

《次回予告》

ちやらっちゃー↑あの予告のノリ。

「横島の前に立ちほだかる漢達。

彼らは闘う、己が信念の為に。

たとえ報われぬ想いだとしても誓いを共にした仲間達が居る限り。次回「さらばあＴＴ。おとくおたちのぬあみだはいちどうおだ

くええ！」

（CV・千葉繁）

親衛隊の掟は俺達を守る」

第四話「激震！嵐のバーベナ学園！！（後編）」（後書き）

最後はちよつと横島っぽく無かったですね。

次回予告は脳内補完をお願いします。（笑）

第四・五話「さらばT T T! 漢達の涙は一度だけ!」 (前書き)

書き足しと修正をしました。

第四・五話「さらばＴＴＴ！漢達おんくの涙は一度だけ！！」

『集まったか？』

『ああ』

黒いカーテンで窓が覆われた教室の前面にはある少女の大きな写真が飾られていた。

『美しい、我等の女神よ』

『しかし、またしても邪魔者がいるな』

『ＫＫＫ・ＰＰＰは軽くあしらわれているらしい』

『役立たず共が』

『だが何としても』

『うむ、我らが女神を……』

『タマモタンを我らが御前に！！』

そう、彼等の眼前に飾られている写真には……

隠し撮りされたタマモの笑顔が写っていた。

第四・五話「さらばＴＴＴ！漢達おんくの涙は一度だけ！！」

キンコーンカーンコーン

「ふう、やっとメシか。腹減ったー。」

「今日も今日とて愛妻弁当なのですか？」

「いえ、今日は……」

楓は申し訳なさそうに俯いてしまった。

「今日は珍しく楓も寝坊してな、弁当までは手が回らなかったらしい」

「すみません……」

「いや、いいんだよ。今日寝坊したのだって疲れがたまってたんだろうし、少しは手を抜くぐらいの方が……」

「それはダメです！タダくんのお世話で手を抜くなんて考えられませんー！」

そう言つて楓はすごい勢いでまくしたてた。

「本当に好きなんですな、横島さまのお世話が」

「は、はい。私の生きがいですから／＼」

それを見て男共から何やら黒いモノが噴き出してきた。

「な、何で楓ちゃんはあんな奴の為に……」

「奴を葬れるなら俺は悪魔にだって魂を売るぞ！」

「……アレにか？」

男共の脳裏には何処にでも居そうな長髪の男が再生される。

「二束三文で買い叩かれた上にクーリングオフで突き返されるのがオチだな」

「神は死んだ…」

「……アレがか？」

男共の脳裏には和服を着こんだ恰幅のいい親父が再生される。

「……………」

そして、昼休み。

「ヨコシマー、食堂に行きましょう」

タマモがプリムラと一緒にやって来た。

「今日は私もお弁当はないから一緒に行ってもいい？」

「私も」

「では、私もお願いしますね」

「当然でしょ、皆で行こう」

シアと桜とネリネがそう言つとタマモは当然と笑いながらそう言つた。

「じゃあ行くか、麻弓はどうする？」

「当然お付き合いしますのですよ」

「ならこれで全員だな」

「さりと俺様を除外した稟には地獄への片道切符をプレゼント、フォーユー」

「……自分で使え」

そして忠夫達は生徒たちで賑わう食堂にやって来た。

ガヤガヤ

「初めて来たけど結構広いのね」

其処に、亜沙とカレハが連れだってやって来た。

「あつ稟ちゃん、皆も今日は食堂組なの？」

「ええ、亜沙先輩達もですか」

「うん、今日は日直だったのをすっかり忘れていてお弁当作る暇がなくて」

えへへと笑いながら頭を掻く亜沙であった。

タマモはメニューを眺めながら“ある食べ物”を捜していたが、どうやら無事に見つけた様で目を輝かせながら注文する。

「私はきつねうどん」

「じゃあ、俺も」

それぞれが自分の食事を注文していった。

モグモグ

「ここのお揚げは美味しいわね、気に入ったわ」

「タマモちゃんはやっぱりお揚げが好きなんだ」

「もちろん、あ…もう無くなっちゃった」

「ほれ」

忠夫はごく自然に自分の揚げをタマモの器に移した。

「うふ、ありがとヨコシマ」

「でもそれじゃあ忠夫くんの分は素うどんになっちゃうよ」

シアの疑問に横島は溜息を付きながら答える。

「俺のお揚げはタマモの腹に入るように宇宙意思に定められてるんだ」

「そついう事」

「う、宇宙意思っスか…」

「宇宙意思っス」

「まままあ、宇宙意思に定められた二人、そして二人はあーなつて、こーなつて、まままあ」

もう、突っ込む者はいないらしい。

そんな彼等を食堂の入口から見つめる集団が居た。

『おのれ横島め、なんと羨ましいシチュエーションを……まあいい、今日こそ目に物見せてやる』

そして放課後。

「今日の追撃戦は結構楽しかったな」

「そついえば何だか人数が少なかったような」

「……まさかな……」

稟はそつと呟いた。

「何か心当たりでもあるの？」

タマモは横島に肩車をさせていて、彼の頭の上から聞いた。

「いや、プリムラが学園に通いだした時にもこうやって親衛隊の数が減った事があって」

「……ちよつと待て……それって、まさか……」

横島が嫌な予感に顔を青くしていると。

「じーーーーー」

プリムラは羨ましそつに横島に肩車されているタマモを見つめている。

「なによ、プリムラ。ここはダメよ、私の指定席なんだから」

そう言つてタマモは横島の頭にしがみ付き居場所を主張する。

「ちえ」

そしてその視線を稟に変えて。

「じー」

「な、何かなプリムラ」

「お兄ちゃん、私も肩車」

稟がプリムラの視線にうろたえていると、数十人の集団が道を塞ぐように広がって行く。

『横島忠夫！今日こそ決着をつけさせてもらうぞ！』

横島達が目を向けるとそこにはバーベナの制服を着た一団が居た。

「……やはりか」

「何よあいつら？」

タマモがそう呟くと集団の中から一人の男が歩み出て来た。

「我々ですか？タマモちゃん。我々は……」

男がそう言いながら右手を高々と上げると、後ろに居る集団はその合図で声を上げて叫び出す。

『我々は麗しきタマモちゃんを悪しき横島から解放するために結束を固めた同志達、その名も』とつても、とつても、タマモタン』通称「ＴＴＴ」であります！』

ひゅ～～～
…

シアや楓達女性陣を含め、全員は残念そうな目でその集団を見つめていて、タマモはというと、全身に鳥肌を立てそのナインテールも逆立っていた。

『さあ、我らが女神よ！今こそ我々にお言葉を！』

期待に満ちあふれていた彼らにタマモが下した言葉は。

「……死ねば？」

パキンッ

そして、彼らは期待に満ちていた笑顔を崩すことなく一瞬で石化した。

稟と横島はその石像を通行の邪魔にならない様に道の端へと転がしてて行く。

「…さて、帰るか」
「そっすね」

「ねえねえ楓、今日はこのまま楓の家に遊びに行ってもいい?」

「構いませんよ、シアさん達も良かったらどうぞ」

「わーい、行く行く」

「遠慮なくお邪魔させていただきます」

「じゃあ、早く帰ろう」

稟はすたすたと足早に進むが、

「じーーーーー」

プリムラは稟の肩を見つめながら後を追いかけていた。

「ねえ、お兄ちゃん。肩車…」

「微笑ましいねー」

「そうですね」

微笑みながらプリムラを見つめるシアとネリネだが、楓はタマモを肩車している横島を見つめていた。

「じーーーーー」

「な、何を見ているんじゃ」

「い、いえ何でも／＼」

「ふふん」

「むっ」

暖かな雰囲気の中忠夫達は帰って行った。

そして、残されたＴＴＴの面々は数日後、自力で復活するまで放置されていたという。

そんな日常。

続く？

《次回予告》

何時もそこに笑顔があつた。

何時もそこで笑い声が聞こえていた。

何時もそこに貴方がいた。

でも今は……

次回・第五話「広くて狭い世界」

横島さぁん……会いたいよぉ…

第五話「広くて狭い世界」

『おい、横島』

学校の帰り道、友達の銀一と歩いていた横島を同じクラスメイトの夏子という女の子が呼び止めた。

『なんや、夏子』

『あれや、あれ』

夏子の指さす先を見てみると子猫が木に登ったまま降りられずに鳴いていた。

『ニャーン、ニャーン』

（なんや前にもこんな事があつた気がするな）

『ま、ええか。あの子猫を助けたらええんやろ？』

『そついつこつちや』

『大丈夫か横つち？』

『まかせとき』

横島はするすると木に登ると子猫に手を差し伸べた。

『ほら、こつちに来いや。はよ降りるで』

『…ニャーン』

子猫は一度鳴くとトコトコと近づいて横島の頭の上に乗った。

『乗ったな、じゃあ降りるで』

この追いかけてこは忠夫が力尽きて捕まり半殺しになるまで続いたという……

銀一という罪のない少年を道連れに……

「…何か懐かしい夢だったな、……ところでタマモ」
「何？」

「俺の布団に入る時には狐の姿になれと言った筈だが」

タマモは布団の中でじゃれつきながら言った。ちなみに、下着姿。

「気にしない、気にしない」

「いいから早く布団から出て着替えんかい、こんな所を誰かに見られたら……」

だが、非常にも部屋の扉は開かれる。

ガチャッ

「タダくん朝ですよ、は」

はい、お約束ですな解ります。

「ふふーん」ゴロゴロ

楓が見たのは布団の中で横島にじゃれつくタマモ（くどい様だが下着姿）の姿であった。

「タ、タダくん……やつぱり……」

楓は瞳を潤ませながら後ずさっていく。

「ちゃうんやー！ー！ワイはロリやないんやー！ー！」
「ちゅっ♪」

タマモが頬にキスをすると楓は泣きながら走り出した。

「ふええー！ーん！タダくんのロリペドー！ー！」
「人聞きの悪い事を言うなー！ー！」
「言わせときなさいよ♪」

横島は楓を負い掛けようとするがタマモがしがみ付いたままなので動けないでいると廊下から楓が何処かへと電話をかける音が聞こえて来る。

ピポパポ……トゥルルルル
ガチャリ

『えゝゝん、もしもし、麻弓ちゃゝん』

「待たんかー！ーい！ー！」

「…………朝から何だ、このカオスは？」

歯ブラシを咥えながら稟はそつと呟いた。

第五話「広くて狭い世界」

横島達に加わり、賑やかさをましたSHUFFLE！世界と違い横島達が消え去った此処GS世界では…

都庁地下にある会議室には忠夫に関わりを持っているメンバーが集められていた。

令子・おキヌ

「何の話があるんでしょうね？」

「さあ？……」

横島さんが居なくなつて数週間、私達は仕事そっちのけで彼を捜し続けた。死んだとは誰も考えなかった、きつとどこかで身を隠しているのだと。そのうち『あゝ、死ぬかと思つた』と呑気に現れる筈だと。

反デタントの過激派達は神魔の正規軍に捕えられていた。

ハルマゲドンを画策し世界を滅ぼしかけたとして厳しく処罰される
との事だ。

この世界は横島さんが守った世界、愛した女性の命と引き換えに…
あの時の慟哭は今でも忘れる事が出来ない。
この世界は横島さんが守った世界、でも今の私達にはあまりにも広
く、そして狭い世界。

雪之丞・タイガー・ピート

「まさか、横島の搜索を打ち切るなんて話じゃないだろうな」

「そんなのワツシは許せないんジャー！」

「僕もそんな話は認めません！」

友人達三人は憤っていた。彼らにとって横島は得難い友人なのだか
ら。

雪之丞は魔に墜ちかけた自分を闇から救ってくれた、
ピートとタイガーは人外の力を持つ自分を唯の友人として受け入れ
てくれた、

横島からすれば何の事はないただ、当たり前的事。

冥子・めぐみ・エミ

「えゝそうなのゝ、そんなの冥子は嫌なのゝ」

「私だって嫌です！」

「もしそうなら上層部全員呪い尽くしてやるワケ」

彼女達も横島を見捨てるような事は許せなかった。

冥子はその能力ゆえに避けられている自分を普通に女の子として扱ってくれた。

魔鈴も魔女と疎まれていた自分に自然体で接してくれた。

エミも呪術師で殺し屋でもあった自分を恐れずに居てくれる。

横島からすれば女の子に対して当たり前前の事。

シロく

「拙者は一人でも先生を見つけて見せるでござる！」

彼女は何処までも諦めない。

シロにとって横島は師匠、そして兄、そして意識し始めた恋しい男性。

彼にとっても大事な弟子、そして妹、当たり前だがロリとは認めてない。

令子・おキヌく

「もし、そんな事になったら…私……」

（ママがそんな事をするはずないと思うけど、もしそうなら…）

二人にとって横島は掛け替えのない存在。

おキヌには幽霊だった頃からの想い人、楽しい時も悲しい時も彼と共にいた。

暫しの別れの時、流してくれた涙を今も忘れていない。

令子にとって彼はただの丁稚だった。

彼女は覚えてなくとも魂には刻まれている、彼への想いを。

認めたくないだろうが認めざるを得ない、彼を想っている事を。彼が其処に居る。それが当たり前だった、だが今は……

愛子

『横島くん……こんなの……青春じゃない……』

彼女は人では無く妖怪、それは自分でもよく分かっている。

横島も彼女を妖怪として認識しているし、人とは見ていない。

だが、ただそれだけ。彼にとって彼女は“愛子という名の九十九神”。

妖怪と認識した上で仲間として受け入れている、あくまでも自然体で。

彼女にとってそれは何よりも心地良かった。

小鳩

「横島さん……何処に居るんですか？」

『小鳩……』

誰もが離れて行った、誰も近付いて来なくなった。

当然だろう、誰も貧乏神に取り付かれた者に関わり合いたくなどない。

だが横島は、彼は違った。いくら元から貧乏だったとはいえ、自分から歩み寄って来た。

貧乏神の呪いを中和させる為ではあったが、彼との結婚式は彼女にとってある意味での本物の儀式であった。そして何時かは本当に彼の隣に立ちたい、そう想っている。

「揃った様じゃな」

美神美智恵や小竜姫、ヒヤクメなど神魔の陣営を連れて老師がやって来た。

彼女達もまた横島を想う者達。

小竜姫にとって彼は久しぶりにやって来た修行者の一人だった。でも今は心を許した唯一人の男性。

ヒヤクメは神界の仲間からも心を覗かれるのを恐れられていた。だが彼はそんな事も関係なかった。

ワルキューレ。彼女にとって彼は任務遂行の為の障害でしかなかった、だから令子から遠ざけた。

だが彼は自分の意思で強くなった、戦士であると認めざるを得ないほどに。

パピリオ。最初はただ面白そうなペットだった、そして敵だった。だが彼は魔族であり敵であった姉を愛してくれた、命を賭けて闘ってくれた。

結果、姉は死んでしまったが今でも愛し続けてくれている。そしていつの間にか自分も女として彼を愛している。

ペスパ。姉を誑かした憎い相手、愛する人の前に立ちふさがった倒すべき敵。

だが、姉が命を賭けて愛した男、愛した父の願いを叶えてくれた男。

愛とは違つが気にはかかる。

歩いて来る猿神に雪之丞は食つて掛かる。

「てめえ、この猿！横島の搜索を打ち切るつてのはどういう事だ！」

「……何の事じゃ？」

「とぼける気が、搜索打ち切りの報告なんだろう！」

「馬鹿モン！そんな事はワシが許さん、誰がそんな事を言ったんじや！」

「へ……？」

凍てつくほど冷たい空気が辺りを包む、そして…

「このクソガキッ！！」

バシイインッ！！

「がはあっ！！」

令子の神通鞭が雪之丞に襲い掛かる。

「みんな、お願い」

ギヤオオオーーーーーッ！！

冥子の式神十二神将が雪之丞に襲い掛かる。

「ぎゃあああ~~~~~っ!!」

「全く、困った方ですね」

めぐみによるエミ顔負けの呪いが雪之丞に襲い掛かる。

「ぐわあ~~~~、む、胸が苦しい!!」

「紛らわしい御仁でござるな」

シロの霊波刀が雪之丞の“霊体”に襲い掛かる。

「ぐわあ~~~~!!や、止めてくれ~~~~!!」

『ちよつと教育が必要ね』

愛子の本体の机から異空間に飲み込もうとする舌が雪之丞に襲い掛かる。

パクンッ!モグモグ……ペッ!!

「……せ、青春万歳……」

「貧ちゃん」

『任せとき!!兄ちゃん、今日からアンさんは“さらに”貧乏や』

小鳩に頼まれた貧の神通力で貧乏の呪いが雪之丞に襲い掛かる。

「い、嫌だあ~~~~っ!!ゆ、諭吉い~~~~、行かないでくれえ~~~~」

「!!」

「ウフフ、雪之丞サンツタラ」

ピロロロロ~~~~~♪

病^やキヌが奏でるネクロマンサーの笛の音色は幻覚作用を持って雪之丞に襲い掛かる。

「ぎゃああああ~~~~~っ!!寄るな触るな近づくな勘九郎!!何故服を脱ぐ!?!やめろお~~~~~っ!!」

そして数十分後、HP1の彼が其処に居た。

「まったく、まぎらわしい。で、ホントの所は何なのママ?」

「横島君とタマモちゃんのことだけとある程度の事が解ってきたわ
「な、何が解ったんですか?」

横島とタマモが神魔の過激派に襲われ行方不明になってから数週間、彼女達は気が気ではなかった。

神界と魔界も同様で、もしどちらかの勢力が単独で行ったものであればハルマゲドン突入はおそらく間違いはなかったであろう、表現は悪いが両陣営が関わっていた為に最悪の事態にならなかったのは不幸中の幸いであった。

そしてヒヤクメが説明を始める。

「横島さんが襲われた場所を調べていたら時空震の痕跡があったのね。」

「時空震って事は未来か過去に居るって事？」

「どうもそうじゃ無いみたいなのよ。」

「??？」

不思議がっている令子達に猿神が説明を付け加える。

「時空震のベクトルが過去にも未来にも向かっておらんのだよ。つまり二人はどうやら平行世界の何処かに飛ばされたと考えるのが自然じゃ。」

『へ、平行世界ー！？』

呆然としている皆の中で令子が問いかけた。

「ちょっと待ってよママ、いくら何でも平行世界っていうのは考え過ぎじゃない？」

「私も最初はそう思ったけどそう考えざるを得ない事実があったのよ。」

「何それ？」

「…入って来てください。」

美智恵がそう言うのと扉を開けて一組の夫婦が入って来た。

「!?!」

「よ、横島さんのご両親…」

「申し訳ないがもう一度詳しい説明を頼む」

そうワルキューレに言われ百合子は大樹に肩を抱かれながら辛そうな顔で語り始めた。

「忠夫は…私達夫婦の実の息子ではないんです」

「そ、そうなんですか？」

「ええ、私は生まれつき妊娠が出来ない体で色々治療を受けていたんです…」

「そんなある日でした。病院からの帰り道で突然目の前の空間に放電が起こったんです、そして放電が収まった後に傷だらけの子供が横たわってました。それが忠夫です」

「あの子は忠夫という名前以外の記憶を失っていました、だから私達が養子として迎え入れたんです」

「そこで私の時間移動能力を使ってヒヤクメさまに霊視してもらったの。そして解ったのはその時の時空震も今回と同様に別の世界からの移動らしいという事」

「つまり小僧はもともと別の世界の人間だということか」

そうカオスは聞き返す。

「あんた居たの？」

「居ちや悪いのか！ワシだって小僧の事は心配しておるんじゃぞ」「はいはい。…ちょっと待って、それっておかしいわよ。横島クンの前世は高島っていう陰陽師でれっきとしたこの世界の住民だったわよ、なのに何故別の世界から横島クンがやって来るのよ」

小竜姫が呆れた顔で答えた。

「それなんですけど、どうやらヒヤクメが原因らしいです」

「え〜ん、あれは事故だったのね〜私だけが悪いわけじゃないのね〜」

「どういう事ですか？」

「あの時アシタロスを嬢ちゃんの力を使って時間移動させた時に高島の魂もそれに巻き込まれたと言っておったな」

「ええ、でも横島クンは無事に転生してたんだからあまり気にしてなかったけど」

「どうやらその時に高島さんの魂は別の世界に飛ばされていたらしいんです」

「…つまりそれって、下手したら横島クンと私達は永遠に出会えなかったかもって事？」

「はい…」

「だからあれは事故なのね〜」

ポン

肩を叩かれたヒヤクメが振り返ると其処には…

「ちょっと向こうでOHANASIしましょうね〜」

病^ヤキヌが降臨してました。

「お、おキヌちゃん？」

「さ、逝きましよう」

「字が違うのね〜、いや〜おキヌちゃんから何か黒いモノが〜。見えないモノまで見えてしまうこの目が憎いのね〜。小竜姫〜助けてほしいのね〜！」

「い、嫌ですよ。諦めなさい」

「いゝゝやゝゝ」

「くすくす」

「…話を戻しましょう。以上の事から考えると横島君は神魔の過激派から攻撃を受けた際おそらく文珠で転移を試みたと思うわ、でも攻撃の影響を受けて別の世界へと飛んでしまった。多分だけでも居た自分の世界に」

「じゃあ、もうヨコチマには会えないって事でちゅか？そんなのパピは嫌でちゅよ！」

「落ち着かんか。今も神魔両陣営の調査部隊が全力をあげて二人を捜しておる所じゃ」

そこにハンカチで手を拭いているおキヌが戻って来る。

……ハンカチが赤く滲んでいるのはおそらく気のせいだろう。

「横島さんにもう一度会える可能性はまだあるんですね」

「おキヌさん・お帰りなさい」

「勿論です。諦める理由など何処にも有りません！」

（そうですとも、諦めてたまるものですか！横島さんは私のものです）

と、小竜姫。

（何を考えてるか丸わかりよ！アイツは私の…そうよ！アイツは私の丁稚なんだから）

と、美神。

（美神さんには横島さんは似合いません。横島さんは誰にもワタシマセン。クスクス）

と、おキヌ。

（式神の子達も、横島君には懐いてるの。お母様も、横島君なら六道を任せてもいいって言うてくれるし、私も横島君好きだし）

と、冥子。

（私には横島さんが必要なんです！私も横島さんに必要な存在になって見せます。諦めてたまるもんですか！）

と、めぐみ。

（横島先生は誰にも渡さぬでござる。先生と添い遂げるのは拙者でござるよ）

と、シロ。

（引き離された二人が運命によって再び巡り合う。ああ、青春だわ）

と、愛子。

（横島さん、小鳩は横島さんが帰って来るのを信じて待っています。そして今度こそ本当の結婚式を……ぱっ）

と、小鳩。

（ルシオラちゃんの為にもヨコチマはパピが貰いまちゅよ。だからどんな世界に行ったとちても逃がちまちゅん）

と、パピリオ。

（マリア・横島さんと・離れたくない・一緒に居たい）

と、マリア。

《フフフフフフフフフ》

「横島君は帰ってこない方が安全と思うのは僕だけでしょうか？」

「いえ、僕もです」

「モテモテのはずじやのに羨ましい気がしないんジャー」

「マリアも成長したのー。嬉しいやら寂しいやら」

ジーク、ピート、タイガー、は女性陣を見つめながら何処となく怯えていた

で、カオスは成長したマリアを見ながら感慨にふけていた。

「神よ、彼を救い給え」

唐巢神父は横島の為に祈りを捧げていたが……………

『えー、でも面白そうなんですが』

キちゃん
神に祈りは届かなかった…

「奴は愛されてると思ってよいのだろうか？」

「どうでしょう」

「愛されすぎるのも問題なワケ」

ワルキューレに美智恵にエミはそんな光景を溜息交じりで見つめていて、

「忠夫の奴め、まるでハーレムじゃないか。うらやm……」

言い終わる前に大樹は百合子の折檻を受けていた。（残酷すぎる描写の為文章に出来ません）

「横島よ、早く帰って来い。じゃないと…胃が痛い」

そんな中、猿神は一人胃を押さえながら俯いていた。

再び彼女達が彼に会える日は来るのだろうか？

この世界に彼が帰って来る日はあるのだろうか？

それはまだ、解らない。

そしてSHUFFLE!世界。

ブルッ

「どうかしたの、タダくん？」

「いや、何だか向こうの世界から殺気めいたものが」

（どうせ、美神達が諦めてないんでしょね。でも無駄よ、ヨコシマは私の物よ。この世界ならライバルは…増えそっね）

続く

「いやなの～、くらいなの～、こわいの～、ごめんなさいなの～」

駄女神^{ヒヤクメ}は未だに部屋の隅で震えていた。

キャラ設定3

美神令子

美神除霊事務所の所長にして忠夫の上司。

前世はアシュタロスに作られた魔族メフィスト・フェレス。

横島の前世である高島と恋仲になるが本能で記憶を封印している。

横島が好きだが高すぎるプライドが邪魔して素直になれない。

横島への呼び方は「横島くん」

氷室キヌ

300年前に死津喪比女を封印するために人柱となった少女。

幽霊の時から横島に想いを寄せており生き返ってから想いは変わっていない。

どこか一歩引いた感じがあり今一つアピール不足。

怒らせると病キヌに進化する。

横島への呼び方は「横島さん」

六道冥子

GS業界でも屈指の派閥を持つ六道家の一人娘。

12体の式神を持つが霊力が不安定になりがちですぐに暴走させ周りに甚大な被害をもたらす。その為友達が少なく令子やエミに頼りがち。

男の中でも横島だけは普通に女の子として接してくれるためいつの間にか彼に想いを寄せるようになる。

横島への呼び方は「横島くん」

魔鈴めぐみ

すでに失われていた魔法を現代に蘇らせた女性。

だが、現代においても彼女を魔女と蔑む者が居る中で変わることな

く女の子として扱ってくれる横島は彼女にとって無くてはならない心の拠り所になっていく。

横島への呼び方は「横島さん」

小竜姫

妙神山修行場の管理人で竜神の女性。

横島の才能をいち早く見だし、心眼を与えて霊能力を目覚めさせるきっかけを与えた。

彼の師匠としての誇りもあるが神魔の闘いに引き込み、その心に消える事のない傷を与えてしまったという自責の念もある。
気づいた時にはすでに彼を愛していた。

横島への呼び方は「横島さん」

犬塚シロ

人狼族の少女。本来ならまだほんの子供の筈だが犬飼に傷つけられた際、令子と横島の霊波によるヒーリングを受けた時に超回復によって急成長を遂げた。

タマモとはお互いを認め合ってはいるが恋のライバルでもある。

横島への呼び方は「先生」

愛子

机の九十九神。50年以上前から学校の生徒を本体の机の内部に作り上げた異空間に取り込んで自分の学校を作り上げようとしていた。横島と令子を取り込んだが令子によって自分が自分勝手な学校を作ろうとしていた事に気づき、取り込んでいた生徒をそれぞれの時代に帰した。

その後は一生徒として学校に住み着いていて、妖怪である自分を普

通に仲間として扱ってくれる横島に想いを寄せる様になる。

横島への呼び方は「横島くん」

花戸小鳩

横島が住んでいるアパートの隣の部屋に住んでいる少女。

悪徳高利貸の祖父のせいで貧乏神にとり憑かれていたが、横島が無自覚に受けた貧乏神の試練に打ち勝ったおかげで長年の貧乏神の呪いから解き放たれた。

その恩とは別に、横島が本来持っている優しさに触れて彼に心より想いを寄せている。

横島への呼び方は「横島さん」

貧乏神（貧ちゃん）

花戸家に取り付いていた貧乏神。

忌み嫌われている筈の貧乏神なのにそれでも家族として扱ってくれる小鳩を心より大事に思っている。横島が試練に打ち勝ったおかげで福の神に反転した。

外見は福の神ではなく貧乏神だった頃に戻っているが、花戸家には若干の福が戻って来ている。

一応、貧乏神としての力も未だに使える様である。

横島への呼び方は「横島」

ヒヤクメ

心眼の能力を持つ神族の女性。

神界の仲間達も心を読まれるのを恐れて近づかない自分に普通に接してくれる横島に想いを寄せている。

横島への呼び方は「横島さん」

パピリオ

ルシオラ、ペスパと共にアシュタロスに作られた魔族。
今は妙神山で小竜姫の下で修業中。

最初から忠夫には結構懐いており、今も彼の事が好きである。
横島への呼び方は「ヨコチマ」

マリア

カオスが作り上げた人工魂^{メタ・ソウル}をもつアンドロイド。

横島や令子達と過ごすうちにその心は人間の物とさほど変わらない
ほどに成長している。

横島の事もカオスと同じくらいに大切な存在と認識している。

横島への呼び方は「横島さん」

横島百合子

GS世界での横島の母。

養子とはいえ掛け替えのない大事な息子として横島を愛している。

魔神大戦において横島を巻き込んだ美智恵達に確執はあるが横島自
身が彼女達を責めようとして無い為気持ちを抑えている。

横島への呼び方は「忠夫」

横島大樹

GS世界での横島の父

百合子同様に息子として横島を愛している。

横島があのような性格に成長したのは紛れもなくこの男の責任。
横島への呼び方は「忠夫」

以降はまたの機会に。

《次回予告》

この歌声はあの娘の物。

この想いもあの娘の物。

そしてこの命も……

だから、だから私は……

それなのに何故貴方は……

次回・第六話「二人で奏でる天使の鐘」

リコリス…私は…

外伝「九尾の初恋」(前書き)

短いですがちょっとしたタマモのお話。

外伝「九尾の初恋」

私の名はタマモ、九尾の妖狐のタマモ。

私は夜中にふと目を覚ました。私は子狐の姿でヨコシマの布団の中で寝ていた。

普段は『ロリじゃない！』とかいって抱きしめてくれないが子狐の姿なら抱いてくれる。

足元にすりよれば『しかたねーなー』と笑いながらその胸の中に招き入れてくれる。

あの駄犬は『犬じゃないもん！』……シロはずるい、差別でござる、と騒ぐがあの図体では無理だろうからこれは私だけの特権だ。

あつ、ひのめちゃんが居たか。

前世を含め、過去の記憶は未だはつきりしないが私は恋というものをした事が無い。

かつてはただ身を守る為に権力者達に頼っただけで恋をしていた訳じゃない。

人間達に滅ぼされ、殺生石から転生した途端にまたしても人間達は私を殺そうとしてきた。

轟く銃声、火薬の臭い、草木を踏みしめる追手の足音、今思い出し

てもぞつとする。

逃げている最中に捕縛結界に捕えられ、死を覚悟した時に見た男の顔、ヨコシマの顔。

ヨコシマとおキヌちゃんは私を助けてくれた。でもその時はまだ感謝より人間達への憎しみの方が強かった、復讐しようとしたが美神達も結局ヨコシマが私を助けた事に気付いてるようだった。こんな奴らも居るんだと思った。

それからしばらく一人で暮らしていたがきつねうどんのお揚げの味が忘れられなくてうどん屋で何度か食べた。すると食い逃げだと言って美神達を呼んできた、店の人は葉っぱを変えたあのお金でもいいと言ったのに。あの事は今でも納得がいかない。まあ、おかげでヨコシマにまた会えたからいいでしょう。

シロはヨコシマの事を先生と呼んで懐いていた、何か胸がムカムカした。

美神の事務所でシロと一緒に暮らすようになって友達も増えた。悪い感じじゃないがやはり、ヨコシマの近くが一番心地よかった。

私が熱に苦しめられている時にシロは天狗の所まで薬を取りに行ってくれた。

結局、毛の生え換わりがうまくいかなかったただでシロが帰ってくる頃には落ち着いていたが正直嬉しかった、だから恋のライバルとして認めてやることにした。それにヨコシマも一緒に行ってくれた事の方が嬉しかった。

そう、もうその頃には私はヨコシマに恋をしていた。九尾の長い歴

史の中での初めての恋だった。こんな穏やかな時間が何時までも続くと思っていた、続いてほしかった…

ある日、妙神山でヨコシマが修行をしていたら突然ヨコシマが苦しみだした、私は何が起きたのか理解できなかった。ただシロと一緒に泣いているだけだった。魔族化、人で無くなる、そんな事はどうでもよかった、ヨコシマが居てくれるなら、あの温もりを失わずに済むのなら。

小竜姫達のおかげでヨコシマは助かったが代わりにヨコシマは大事なものを失った。

そして私とシロは初めて知った、ヨコシマの傷を、あの笑顔の裏にある深く癒える事のない傷跡を。

私達は泣いた、抱き合って泣きじゃくった。ヨコシマはそんな深い傷を持ちながら笑顔を向けてくれた、あの温もりをくれた。だから今度は私が…私達がヨコシマに笑顔を向けよう、温もりをあげよう、少しでも傷が癒えるように。

私は人の姿になるとそっと愛しい人の唇に自分の唇を重ねた。もう離れない、離しはしない、一人占め出来ないのは分かっているけど長い九尾の歴史の中で初めての恋、絶対に叶えて見せる。

そして彼の心の傷も癒して見せる。私が…いえ、私達が絶対に。

そう誓いながらヨコシマの胸に顔を埋めながら私は眠りに付く。

「………ところでタマモ」

「何？」

「俺の布団に入る時は狐の姿になれと言った筈だが」

「気にしな―い、気にしな―い」

「いいから早く出んかい、こんな所を誰かに見られたら……」

「タダくん朝ですよ、は」

「ふふーん」ゴロゴロ

「タ、タダくん……やつぱり……」

「ちやうんやー！！ワイはロリやないんやー！！」

「ちゅっ」

「ふえー！ーん！タダくんのロリペドー！！」

「人聞きの悪い事を言うなー！！」

「言わせときなさいよ」

歴史上、初めて九尾の心を奪った男。離さない、離しはしない。
たとえ一人占め出来なくとも叶えて見せる。
この想いを……

九尾の初恋を。

外伝「九尾の初恋」(後書き)

最後で分かるように前話で横島とタマモが寝てた時のお話でした。

今回はたいした書き足しは出来ませんでしたね。

第六話「二人で奏でる天使の鐘」（前書き）

注・今回、横島のセリフで口調が変わる部分がありますが、設定上の事なのであらかじめご容赦ください。

第六話「二人で奏でる天使の鐘」

『な、何でや…何でや…!』

転校する事を告げると夏子は泣きながら聞き返してきた。

『父ちゃんの仕事の都合やからな、仕方ないねん』

『銀ちゃんがあらんようになって、今度は横島かいな。そんなん嫌や!』

『夏子…』

夏子は横島の両腕を掴み、頂垂れて泣きじゃくっていた。

『別に外国に行くわけやあらへんのやからまた何時か会えるて…』

『何時かって何時や!私は…私は、横島と…ずっと……一緒に…』

『夏子?』

『…も、もうええわー!いつ!横島なんか何処へでも行つてまえ!』
『嫌いやー!うわああー!ん!』

そう言い夏子は泣きながら走り去って行った。

『嫌いか…何かものごつつ胸が痛い言葉やな』

胸に手をやりながらそう呟いた、閉ざされた記憶の底にあるその言葉に胸を痛めながら。

《忠夫なんか大っ嫌い!》

《誰なんやろな?あの子は》

一人残された横島の目から涙が一筋零れた。

第七話「二人で奏でる天使の鐘」

ある日の放課後、教室で帰り支度をしているとクラス的女子がネリネに話しかけて来た。

「ねえねえ、ネリネちゃん。ネリネちゃんの歌って凄く綺麗なんだった？魔族の友達から聞いたんだけど『天使の鐘』って称されるほどの歌声だった」

「そうなの？私も聞きたいな。ねえ、歌ってみてくれない」

（そういえばあの時公園で聞いた歌はとても綺麗だったな）

稟が近くの公園で歌っていたネリネの歌声を思い出し、周りが騒いでいるとネリネは何故か辛そうな顔をしていた。

「どうかしたのネリネちゃん？」

「い、いえ何でもないんです。すみませんが歌は歌えません」

「えー、どうして？」

「ごめんなさい、歌は…嫌いなんです」

そう言っているとネリネは一人で教室を出て行った。

「嫌い…か」(本当に嫌っているような顔じゃなかったな)

「忠夫、ちよつといいか？」

「何だ」

(ネリネの事で話がある)

(ネリネちゃんの？分かった)

稟と横島の二人が教室を出ようとすると、

「おや、二人で何処に行くんだい？はっ、もしかしてめくるめく禁断の世界に」

『キャーーーーー』
♪』

『めくるめく禁断の大霊界に逝けーーーー！！』

「ぐはあっ！！」

ガチャアアアンツ

二人に殴り飛ばされた樹は窓ガラスをぶち破り外へ飛ばされた

「うわああああああ」

ベシヤツ

「な、なんか聞こえてはいけない効果音が聞こえたような…」

「気のせいだ」

「気にするな」

「まあ、小一時間もすれば再生するのですよ」

「そ、そうなんだ」

「あはは…」

そうして二人が教室を後にすると、

（ねえ、どっちが受け？）

（うゝん、土見くんも捨てがたいけど）

（えゝ、横島くんだよ）

（むゝ、悩むっス）

（やはりここはリバシなのですよ）

（あ、それいいね）

（じゃあ両方作るって事でどうですか？）

《異議なし！》

そして男子生徒は教室の隅で震えていた。

『女の子って……』

稟と忠夫は屋上で話をしていた。

「ネリネちゃんが歌っていた？」

「ああ、ネリネとシアが転校してくる前の日だがな家の近くの公園で歌っていた。歌うのが嫌いならあんなに綺麗な歌声は出せないは

ずだ」

「好きだけど人前で歌えない理由があるって事か」

「おそろくな」

「お前の婚約者だろ、聞いてみたらどうだ？」

「…前にもう一度歌が聴きたいと言った事があるんだがはぐらかされて結局歌ってくれなかったんだ。だから俺でもダメだろう」

「そうか…」

そしてネリネは次の日から学園を休むようになった。

数日後

魔王邸の前ではシアや楓がフォーベシイにネリネの事を聞いていた。

「叔父様、リンちゃんは？」

「ごめんね、まだ具合が良くならないんだよ」

「お見舞いも駄目なんですか」

「…ごめんね」

フォーベシイは少し辛そうな目を伏せて謝った。

「じゃあ、ネリネによろしく。行ってきます」

「ああ、行つてらっしゃい」

学園に着くと麻弓達がネリネの事を聞いてきた。

「そつ、今日も休みなの」

「心配だね」

「ここは一つ俺様が付きつきりで看病を…」

「はいはい、人界を滅ぼすような危険な発言は控えるように」

麻弓はそう言いながら樹をロープでがんじがらめに括りつけ窓から外へと吊るす。

『あのー、麻弓さん。せめて頭を上…ああ、頭に血がのぼる』

そんな呟きを無視して窓を閉めると撫子が授業の為にやって来た。

「席に付け、よし全員いるな。授業を始めるぞ」

（何なんだろうな、ネリネちゃんの事ほっとけない気がする）

横島は窓の外を眺めながらそんな事を考えていた。

「お、俺様が…何を……した…」

放課後

「タダくん、帰ろう」

「ゴメン、ちょっと用事が出来た。楓達は先に帰っててくれ」

「用事ですか？…！分かりました、先に帰ってますね」

楓は横島の言う用事の意味に気付いて横島を笑顔で送り出す。

そして自分達とは逆の方向に歩きだした横島に稟は語りかけた。

「忠夫、ネリネを……」

「任せとけ！」

横島もそれに応えて親指を立てて歩き出した。

「分かったのよね、ヨコシマがこういう人だって事」

そしてタマモは横島に気づかれないうちに後を付いて行く。

「さてと、何処に居るかな？」

横島はストックしてあった文珠を意識下より取り出し【搜】の文字を刻みこむ。

「え」と、あの丘の上の公園か」

ネリネの居場所を見つけた横島はその丘の上の公園へと歩いて行く。

~~~~~

夕陽の中、ネリネは結界を張った公園で一人歌っていた。

「~~~~~」

そこに何処からか拍手が聞こえてきた。

「!？」

ネリネが拍手のした方を見ると、其処には何時の間にか横島が居た。

「やっぱり綺麗な歌声だね」

「横島さま…どうして此処に？人払いの結界を張っていた筈ですが」  
「ちよつとした裏技だね」

ネリネが使っていた人払いの結界は人の意識に作用するもので文珠による【捜】には作用しなかったのである。だから文珠に導かれるままに歩いてきた横島は難なく此処に来れたのだ。

「何の御用事でしょう、私は一人で居たいんですが」

「何で歌が嫌い何て言う嘘をつくのかな？」

「嘘じゃありません！私は…」

「嫌いだって言うなら何でわざわざこんな結界まで張って歌うんだよ。嫌いなら歌わなければいいだけだよ」

「…貴方には関係ありません」

「友達が苦しんでいるのにほっとけないじゃないか。それともネリネちゃんにとって俺は友達じゃないのかな？」

何故この人は踏み込んでくるのだろうか？

「…この歌は私の物じゃないからです」  
「ネリネちゃんの歌じゃない？」

何故私はこの話をするのだろうか？

「この歌は、稟さまへの想いは、そして…この命はあの娘の……リ  
コリスの物だからです」  
「……命が？」

…？何故貴方はそんな悲しそうな顔をするのですか？

「リムちゃんが人工生命体の三号体という話は知っていますね」  
「うん」

「二号体は…私のクローンだったんです」  
「ネリネ…ちゃんの？」

「はい、人工生命体はある魔法を完成させるために作られた存在で  
す。私は生まれつき強力な魔力を持っていました、でも幼い子供に  
はその魔力は体を蝕む毒の様なもので私の体は絶えず悲鳴を上げて  
いました。そんな時、人界の技術を取り入れた科学者達は私の体を  
強化したクローンを作り魔法の研究と並行して私の体の治療の研究  
を同時にしようとお父様に持ちかけたんです」

「おじさんはその話を」

「受け入れました。そして生まれてきたのがリコリス、私にとって  
は大事な友達で大事な妹。リムちゃんにとってもたった一人の姉で  
した、でも科学者達から見れば研究対象でしかありませんでした」

「……………」

怒っているのでしょうか、横島さまは俯いて手をきつく握りしめて

います。

「三世界平和宣言のあの日、私もお父様と一緒に参加する筈でしたが私は体調を崩し動ける状態ではなく、私の代わりにリコリスが代役として人界に来たんです。そしてあの娘は出会いました、稟さまに。…魔界に帰って来たりコリスは私に稟さまの事を話してくれて私の名前、nerineの中にrinを見つけではしゃいでました」  
「だから自分の愛称をリンにしたんだ」  
「はい、…でもそんなさやかな幸せの時間にも終わりがやってきました」

そう、終わりの時が…

「私の体はとうとう強すぎる魔力に耐えられなくなり、何時死んでもおかしくない状態でしたがリコリスがある提案をしたんです。自分と私との融合を」

「…！ゆ、融合って…じゃあネリネちゃんは…」

コクン

不思議…何で私は稟さまにも話した事がない秘密を話しているのだろう？

「私の命はリコリスの犠牲の上に成り立っているんです。確かにそれしか方法は無かったし、クローンであるリコリスにもあまり寿命が残されていませんでした。でもリコリスとの融合はあの娘から全ての物を奪ってしまった、命も、歌声も…一番大事に、心の中にしまっていた思い出さえも…うつつ…私は知らなかった…リコリスが、あれ程までに稟さまを好きだった事を…うつつ…グスッ」

あの頃の私には何も出来なかった、目を覚ました時には全てが終わっていた、そこにはもうリコリスはいなかった。

「そして私はリコリスになろうと思いました。リコリスになって、リコリスの出来なかった事をしようと、でも歌は…楽しそうに歌っていた歌だけは……」

「……でも、それは…間違っているよ。きっとリコリスちゃんは犠牲になったなんて思っていない。リコリスちゃんになろうだなんて…間違っている」

…何を、何を言ってるのだろうこの人は…何も、何も知らないくせに…

「貴方に…貴方なんかは何が解るんですか！！知ったような事を言わないでください！！」

私は彼を思いっきり睨みつけて思いっきり怒鳴った。生まれて初めての事だった。

でも彼は困ったような顔をしていながら右手を前に出した。

その右手が光ったと思ったら手の中に緑色の玉があり、その玉には【開】という文字が刻まれていた。今度はその玉を左手にあるブレスレットの丸い窪みにはめ込むと彼の体が光に包まれていき光が収まると其処には…

「よ、横島さま…その姿は…」

膝裏まである艶やかな黒髪は風になびき、

体は丸みを帯び、その胸も存在を主張し、

背中には薄緑色の一对の翼があり、

その瞳は高位魔族の証である深紅に染まっていた。

『これが今の私の本当の姿』

それは彼の声ではなく、何故か二人の女性の声が重なっているように聞こえた。

「本当の？」

『うん、ネリネちゃんの中にリコリスちゃんが居るように、私の中にも…ルシオラが居る』

「！！横島さまの…中に？」

そして彼は語り始めた。

『私は一度死んでいるの、その私を自らの命と引き換えに助けてくれたのが魔族の女性、ルシオラ』

「……」

『私が居た世界は神魔が争ってると言ってたよね。数ヶ月前にある闘いが起こったの、『魔神大戦』と呼ばれる闘いが』

「魔神大戦…ですか、それはどのような？」

『魔界六魔王の一柱が人界に攻め込んできたの。その名はアシユタロス』

その名前に私は愕然とした。

「ソ、ソロモン七十二柱の石柱。でもそれはただの物語で実在したという記録は何処にも…」

『此処では物語かもしれないけど私達の世界には実在したの。アシユタロスはまず108ある冥界のチャンネルを破壊して最上級神魔を人界に来れなくした。その為アシユタロスとは人間と僅かに人界に残っていた神魔が闘わなくてはならなくなった。そんな中で私は出会った、アシユタロスに作られたルシオラ、ベスパ、パピリオの三姉妹に』

話を聞きながら私はさっきまでの怒りが消えている事に気がついた。たぶん、彼の瞳から流れる悲しいまでに澄んだ涙を見たから。

『最初は唯の敵同士だった、でもスパイとして彼女達の中に潜り込んで行動を共にしているうちにいつの間にか好きあうようになっていた。だから私は決心した、アシユタロスを倒して彼女達を解放すると。…詳しい経緯は省くけど一旦は奴を退けて暫くの間は平穏な日々が続いた、でも結局闘いは再び始まってしまった。彼女を庇って攻撃を受けた私は霊気構造の殆んどを破壊された、ルシオラはそんな私の失われた霊気構造を自分ので補い、そしてルシオラは消えていった…私の代わりに…』

私と同じ…

『笑い話にもならないわ、助けたつもりが逆に命を奪う結果になったんだから…』

いえ、私なんかよりずっと…

『助ける方法はあった、でもそれには途方もない犠牲が必要で彼女もそれを望まなかった。ルシオラは何よりも夕陽が好きだった、昼と夜の間の一瞬の隙間に見れる幻想的な風景が。……約束…したんだよ…もう一度一緒に見ようって…』

「横島さま…だからあの時…」

『ルシオラの魂は私の中で眠っていた、本当は私の子供として転生するはずだった。でもルシオラから譲り受けた霊気構造に含まれていた魔族因子の暴走で私の体は魔族化を始め崩壊し始めた。知り合いの神族から神族因子を注入する事で事なきを得たけど神・魔・人それぞれの因子を同時に持つ事で私は三界で唯一の存在『神魔人』になった、これがその姿。そしてルシオラと私の魂も融合してしまい、今生でのルシオラの転生は不可能になった、だから今度会えるのは生まれ変わった来世』

「そうなの…ですか…」

『最初はただ泣いてばかりいた、一人で後悔ばかりしていた、心配してくれてる皆の事なんか考えもしなかった』

「私も、そうでした」

『でも気付いた、ルシオラはそんな事望んでないって、ルシオラが望んでたのは私が私で居ることだって。ねえネリネちゃん、リコリスちゃんもそうだったんじゃない？』

私は雷に打たれた様な気がした。その通りだ、リコリスは…あの娘は…

「リコリス、リコリス…私は…」

私はただ泣いた、瞳からは熱い涙が止めどなく流れていた。

横島さまはそんな私の肩を優しく抱いてくれた。

『もう大丈夫だね』

彼は再び緑色の玉を取りだした、刻まれている文字は【封】そして同じようにブレスレットの窪みにはめ込むと光と共に元の姿に戻っていた。

「横島さま…あの…」

「この事は皆に内緒にしといてね」

「はい、ありがとうございます横島さま。もう迷いません」

「うん、じゃあ俺は先に帰るね」

横島さまは背を向け手を振りながら帰って行った。

あの人はどれだけ悲しかったのだろう。愛する人を失い、その命で生き長らえた事が。

あの人はどれだけ辛かったのだろう。愛する人と会えなくなった事が。

それでもあの人は笑っている。それでもあの人は歩いている、前に向かって。

なら私も笑おう、そして私も歩こう、皆と、あの人と。

いいよね、リコリス。

そう、心の中で思うと何処からか懐かしい声が聞こえて来た。

クスッ、いいよ

「…えっ?」

リンが幸せなら私も幸せなんだから

「あ、ああ、居たんだ、こんな所に、こんなに近くに…」

やっと気付いた?

「ごめんね…ごめんね、リコリス、私」

いってば、稟くんへの想いは私の想い  
だからリンの想いはリンの想い、大事にしなくちゃ

「ありがとう、リコリス」

それより歌おう、久しぶりに!

「うん、歌おう、思いつきり!」

横島が丘の上へと続いている石段を下りていると再びネリネの歌声が聞こえて来た。

♪  
♪

「ん？」

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

その歌声に耳を傾けているとタマモが抱き付いて来た。

「おつかれさま」

「覗きとは悪趣味だな」

「何言ってるのよ。それなら美神のシャワーを覗いていたあんたは何なのよ？」

「そ、それは…」

「はいはい、さあ帰りましょ」

タマモは横島の腕にしがみつき、引っ張るように歩いて行く。

（ネリネが元気になったのはいいけど…まずいわね、おそろく…多分…絶対…）

魔王邸

「パパ」

「ああ、聞こえるね」

神王邸

「お父さん！」

「何年ぶりかな」

芙蓉邸

「ネリネ…リコリスお姉ちゃん……」

「綺麗…」

（やったな、忠夫）

その日、久しぶりに鐘は鳴り響いた。  
夕陽に染まる街に、二人が奏でる天使の鐘が…

翌日

「お早う、稟くん、みんな」

「ああ、お早う」

「お早う、シアちゃん」

「お早う」ございます」

「お早う」

「お早う、どうでもいいけど私達はいいでっばいわね」

「あはは…」

そんな風に朝の挨拶を交わしていると後ろから声が聞こえて来た。

「お、お早う、」ございます…」

みんなが振り向くと其処にはネリネが申し訳なさそうな顔をして立っていた。

「ネリネちゃんお早う！もう具合はいいの？」

「はい、心配をおかけしてすみません」

「リンちゃん………ん……！」

ネリネの顔を見たシアは涙を浮かべながらネリネに抱きついた。

「シ、シアちゃん」

「心配したんだよ、とーても心配したんだよ」

「御免なさい、もう大丈夫です」

「ネリネ」

プリムラがネリネの服を引っ張る。

「リムちゃん？」

「リコリスお姉ちゃんとの歌、綺麗だった」

「ありがとう、リムちゃん」

ネリネが笑顔でプリムラの頭を撫でていると近づいて来た横島がネリネに挨拶をする。

「お早う、ネリネちゃん」

「はい、おは y . . . . .」

「ネリネちゃん？」

何やら固まってしまったネリネの顔を横島が覗き込むと…

ポフンツ！！

横島の顔を見たたん固まっていたネリネだが、覗き込んでいる横島に気付くとすぐに顔は耳まで真っ赤になり頭からは湯気を出していた。

「ピクッ」

と、楓は反応し、

「えっ？」

と、シアは何があつたのかと首を傾げ、

「おお」ポンッ

とプリムラは手を打ち、

「はあ、やっぱり」

と、タマモは溜息を付き、

「なるほどな」

と、稟は状況を理解する。

自分の事は鈍感だが、他人の事には敏感らしい。

「え〜と、ネリネちゃん？」

「は、はひっ！おはやうございましゅ！た、忠夫さま／＼／」  
「た、忠夫さま？」

ポン

肩を叩かれた横島が振り向いてみると、

「お早う、忠夫ちゃん♪」

満面の笑みを浮かべたフォーベシイとネリネの母親セージが居た。

「お、お早う、おじさん……」

「やだなー、そんな他人行儀な。さあ、遠慮なくパパと呼び！」  
「じゃあ、私はママで♪」

「……えええー！？」  
「……こうなる気がしたのよ」

楓は驚きの声を上げ、タマモは諦めの境地に居た。

「リンちゃん」

「シアちゃん、私…」

ネリネは申し訳なさそうな顔をしていたがシアはにこやかに笑いな  
がら言った。

「それがリンちゃんの気持ちなら私から言う事は何も無いよ。私は  
応援するよ」

「ありがとう、シアちゃん」

笑顔で手を握り合う二人ではあったが……

（よしっ！！敵（胸）が一人減った！）  
ちよっと黒いシアであった。

楓とタマモは、

（ネリネちゃんが元気になったのは嬉しいです）

（ネリネは大切な友達だしダメって訳でもないわ）

（でも）

（でも）

《あの胸だけは敵よ（です）！》

二つの意味での巨大な敵の誕生を恐れていた。

ポン

そんな中、神王は稟の肩を叩きながら言った。

「いや、お互いにいい後継者ができたな！」

「へ？」

「そうだね、お互いにいい老後が迎えられそうだね」

「な、何じゃそりゃ？」

「おや？忠夫ちゃんはネリネちゃんじゃ不服なのかい」

「そ、そうなんですか忠夫さま？」

ネリネは瞳を潤ませながら横島を見つめている。

「いや、そういう訳じゃなく」

「ちなみにネリネちゃんと結婚すれば魔王の座だけじゃなくこのネリネちゃんの豊満なバストも忠夫ちゃんの物だよ」

「い、いやですわ、お父様だったらでも、忠夫さまなら／＼／」

「マ、マジッスかっ!？」

横島は憤ったが、

ポン

肩を叩かれ振り向いて見ると

「ちょっと向こうでOHANASIしましょうか？」  
↑あの眼。  
＜ ● ＞  
＜ ● ＞

病楓<sup>ヤエデ</sup>が降臨してました。

「力、カエデサン……」

「さあ、逝きましよう」

「いやー！堪忍やー！ただの出来心なんやー！」

「いいから来なさい」

「稟ー！助けんかい！」

横島は病楓とタマモに引きずられながら稟に助けを求めるが、稟はそれに答えずただ胸で十字を切っていた。

「おーぼーえーてーろーよー」

病楓<sup>ヤエデ</sup>とタマモに引きずられた横島は芙蓉邸の扉の向こう側に消えて行った。

「さあ、急がないと遅刻だぞ」

「そ、そっスね……」

「忠夫さまは大丈夫なんですか？」

「大丈夫、多分死なない」

「た、多分って……」

その日、バーベナ学園は紅く染まったという。RRRの血の涙によって……

同時刻、GS世界の横島の部屋では小隆：もとい、小竜姫やおキヌ達の手によって巨乳物のお宝は炎の中へと消えていったといふ。

続く

#### キャラ設定4

##### 横島忠夫（神魔人形体1）

横島は物語の中での説明通りに三種族の因子を同時に持つ事で三界に唯一の存在、神魔人<sup>しんまじん</sup>になった。外見のイメージとしては単行本36巻リポート6「マイ・フェア・レディ！」で女性化した時の姿に翼を加えた感じ。今回は魔力封じの宝具の力を一時的に弱めて姿だけを解放した。この状態では女性の言葉遣いになるが中身は横島のままだが、口調だけは女性の物になってしまう。

精神も若干女性寄りになり、女性の体を利用しての覗きやセクハラなどはしようとしてない。

ちなみにバストのサイズはネリネ並み。

神魔人形体での女性化にはきちんとした理由があり、決して“乱の趣味”だけが理由ではありません。

ネリネ

魔界の王、フォーベシィの一人娘であり魔界の姫。

生まれついでたの強力な魔力の為体が弱く、幼い頃よりほぼベツトの中で過ごしていた。

自分のクローンであるリコリスとは実の姉妹同然に仲良くしていた。自分の代わりに人界に行つて歸つて来た時に稟と遊んだ話を聞いていて、その後彼女との融合の際に稟への想いを知り彼女の代わりに稟を愛する事を決めた。

（ネリネ自身にも稟に対する淡い想いがあつたのは確か）

自分より遥かに辛く、苦しい思いをしている横島がそれでも笑い、前に歩こうとしている姿を見て横島を強く想うようになる。

横島への呼び方は「横島さま」↓「忠夫さま」（稟へは稟さまのま）

リコリス

蘇生魔法の研究の為に生み出された人工生命体の二号体でネリネのクローン。

ネリネの代わりに人界に行った際、稟に出会い彼に恋をする。

nerineの名前の中にrinを見つけてネリネの事をリンと呼び、自分の寿命が尽きかけている時遂にネリネの体が限界を超え、自分との融合で彼女の命を救う決心をする。

完全に消えたわけではなく、残留思念の形で今もネリネと共に居る。

フォーベシイ

ネリネの父親で魔界の王。神界の王ユーストマとは子供の頃からの大心友。（誤字にあらず）何よりもネリネが大事でそっけない態度を取られただけでもこの世の終わりのように泣きじゃくる。ネリネの想いが横島に変わつても慌てる事無く横島を後継者として認める。愛称は「まー坊」個人的には「フォっちゃん」

横島への呼び方は「忠夫ちゃん」

セージはまた今度

### 《次回予告》

バーベナ名物のクラス対抗祭、我がクラスは喫茶店。

生半可な企画では勝利は掴めない。

でも、心配は御無用。何故なら我がクラスには天使が居る。

そう、「天使」が…これが勝利の鍵だ！

次回・第七話「二人の天使が舞い降りる」

こらー、その二人！逃げても無駄なのですよ！

第六話「二人で奏でる天使の鐘」（後書き）

と、言う訳でネリネは横島ラバーズになりました。

これで書きたかったあの話も書けるな。

## 第七話「二人の天使が舞い降りる」

曇り空の下、一人の少女は其処にいた。

『・・・・・・・・』

【ねえ、どうして泣いてるの？】

【わかった、俺が助けてあげる。だから泣かないでいいよ】

【うん、俺木登り得意なんだ】

【さあ、おいで。一緒に降りよう】

【よし、じゃあ降りるよ】

【だいじょうぶだよ：あつ】

【いててて……】

【うん、これくらいヘツチャラだよ！】

【いいな……】

【俺、母ちゃんも父ちゃんもいないんだ…】

【えっ？】

【いいの？】

【俺の名前は忠夫。 浜菊忠夫】

【じゃあ、楓】

アイツはお母さんを殺した。

（違う！タダくんはそんな事しない）

アイツのせいでお母さんはいなくなつた。

（違う！タダくんのせいじゃない）

だからこれは天罰だ。

（違う！タダくんは罰を受けるような人じゃない）

神様がもう会えない所に連れて行ってくれたんだ。

（嫌！そんなの嫌だ！タダくんに会いたいよ…）

サヨナラ、タダオ……

（嫌——っ！さよならなんて嫌だ——！タダくん！タダく——ん！）

魔力爆弾の暴発事故により横島が消えた空き地、それは皮肉にも横島と楓が初めて会った場所でもあった。

少女は一人でその場所を見つめていた。虚ろな目をして。だが心の中では涙を流しながら……

少女は一人であり、二人でもあった。

嘘を信じた楓と、嘘を信じなかった楓。

彼女もまた、人知れず苦しんでいた。

## 第七話「二人の天使が舞い降りる」

ある日、横島のクラスメイトの麻弓「タイムは自分の席に座りなが

ら手を組んで必死に祈っていた。

「神様、魔王様、どうか、どうかこの最後の教科、赤点回避をお願いするのですよ」

どうやら麻弓はあと一教科の赤点で夏休みの補習が決定するらしい。

「麻弓、気持ちはわかるがあこの二人に拝む時点で可能性は無いと思うぞ」

「す、すみません。頼りにならない父で…」

「いや、ネリネが謝る必要はないぞ」

あれから横島はネリネの事を呼び捨てにするようになった。というのも、ちゃん付けすると他人行儀だと泣かれそうになるのである。

「ありがとうございます。やっぱり忠夫さまはお優しいです」

「何処がよ！優しいのなら私と苦楽を共にしてくれる筈じゃない。

タマモちゃんの話だと横島くんはしょっちゅう補習を受けてたそうじゃない、なのに何で赤点が一つもないのよ！」

「俺が補習ばかりだったのはバイトが忙しくてあまり学校に行けなかったからで別に勉強が苦手だという訳じゃないんだ。だから、ちゃんと勉強すればそれなりの点数は取れるぞ」

「裏切り者——！シアちゃん、シアちゃんだけが私の友達よ！」

「あ、あははー。ごめんね麻弓ちゃん、私さっきで赤点クリアしちゃったっス」

「そ、そんな…シアちゃんまで。女の友情は何処にいったっちゃったのですよ——！こうなったら…」

麻弓は窓から身を乗り出し力の限り叫んだ。

「あんなバツ者じゃない本物の神様と魔王様——！どうか、この哀れな私に奇跡を——！！」

「麻弓……」

「何よ！」

横島は明後日の方向を見ながら呟いた。

「……可哀想だが本物の二柱はあの二人なんか比べ物にならない位にはっちゃけてるぞ」

「そ、そうなんスか？」

「わ、私は……私は奇跡を望む事すら出来ないのですか——！」

「大丈夫だよ、麻弓！」

「緑葉くん……」

「俺様達は麻弓の分まで夏を謳歌して来るからね」

それから暫くの間、教室には樹の悲鳴が響き渡るが皆は知らんぷりをしていた。

「うっ、私の夏が〜」

「だ、大丈夫だよ麻弓ちゃん、夏休み全部が潰れる訳じゃないんだから。遊べる時に皆で遊ぼう」

「そうだよ、海に行こうよ海に！」

「楓、桜、ありがとうなのですよ〜」

結局麻弓の赤点は回避する事は出来なかったらしい。

「う、うっ、こ、ここは？俺様はひい爺ちゃんと美少女談議をしてたはずだが」

ついさっきまで、痙攣をしていた樹だが何とか還って来たらしい。

「ようやく還ってきたか、後一時間待っても還ってこなかったら茶<sup>だ</sup>毘<sup>び</sup>に付す所だったぞ」

「：勿論本気で言ってるんだよね？」

「何当たり前のことを聞いてるんだ？」

（後少し復活が遅かったら危ない所だった。こうなれば殺られる前に殺らなければ）

「と、嘆くのはここまで。さあ！来週からは夏休み前の最終イベント、クラス対抗祭なのですよ！」

麻弓は教卓の上に立ち、右手を高らかに上げて叫び、クラスメイト達はそれに応えて叫ぶ。

『応オオオオオー』

「クラス対抗祭？」

「何なのですかそれは？」

シアとネリネがそう聞くと、桜と麻弓が答える。

「小さな文化祭みたいなもので、各クラスが模擬店を出して売り上げを競おうというもののな」

「そしてそして、優勝したクラスは夏の間プール掃除の免除という特典があるんですよ」

「なるほど、それはいいな。うちのクラスは何をやるんだ？」

「それはやはり無難なところで喫茶店がいいだろうね。幸いにこのクラスには綺麗どころが揃ってるからね」

「ウエイトレスの衣装もめどが立ってるから明日にでも発表するのですよ」

「そうか」

この時、テスト期間が終わり緊張感から解放された為か横島と稟の二人はクラスを覆う異様な雰囲気気付かなかった。

翌日、

「さあ、これが女子用のウエイトレスの衣装なのですよ」

『キヤー、可愛い』

「そして男子はこのクジを引くように」

男子は次々とクジを引いて行くが実は彼らはクジは引いていない、最初から何も書いていない白紙の紙を隠し持つていてクジを引く振りをしているだけ。そう、これは麻弓と男子達による罠であったのだ。

「ではそれぞれ自分が引いたクジを確認するのですよ」

『ハズレだ』『俺もだ』『同じく』『右に同じ』『はっずれー』

そして横島の番になり引こうとするが、その手は箱の穴に入る寸前に止まっている。

「いったい、何のクジなんだ。…どうした忠夫？」

「い、いやな…何かこのクジからとてつもない悪意が感じられるんだ」

「はいっ！その二人、残りは貴方達だけよ。早く確認しなさい！」  
「わかったわかった」

横島と稟はクジを引くがそこに書かれている文字を見て固まった。

「……………」  
「……………」

「どうしたの二人とも？」

桜がクジを覗きこむと其処に書かれていたのは…

「…メイド服？」

「はーい、二人の衣装はメイド服に決定なのですよ！」

『うおおおおおおおー！』

その麻弓のセリフで我に返った横島と稟が周りを見渡すと男子生徒は皆ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべていた。

「は、謀ったな。謀ったなー、麻弓ー！！」

「ふっふっふっ、今更気づいても後の祭りなのですよ。そしてお祭りはこれからよ」

二人は逃げようとするが出入り口はすでに女子生徒に抑えられておりもはや逃げ場はなかった。

「お、落ち着け。大体むさい男の女装なんか誰が喜ぶっちゅーんじや！」

「そうだ、忠夫の言うとおりだ！」

「その心配なら無用だよ」

樹は満面の笑顔で二人の前に歩み出た。

「どういう事だ？」

「ふっふっふっ。こんな事もあるうかと子供の頃からの貯金をはたいて手に入れた物があるんだよ」

「な、何じゃそれは？」

樹はクッククックと笑いながら黄金色に怪しく光る小瓶を取り出した。

「これこそ性転換の魔法薬、その名も【蜂蜜物語】だ!!これなら女装じゃなくなるよ、安心したかい？」

『するか————!!』

そうこうしてるうちに二人は女生徒達に手足を拘束され、動きを封じられた。

「さあ、まずは土見くんから……」

「い、嫌だ…やめてくれ、やm…ムグ、ゴクゴク」

「さて、効き目はどうか？」

「うっ、体が熱い…うっう」

魔法薬の効果か、稟の髪は腰まで伸びて体も女性の物に変わっていった。

「ふわ、稟くん綺麗」

「稟くんならお嫁さんにほしいっす」

桜とシアはその姿に見惚れていた。

『うおおおおおおお——!!』

稟の容姿、それはあえていうなら「美人」である。

「こ、これは…此処まで変わるとは……で、では次は」

そう言いながら麻弓は怪しい眼で忠夫を見つめる。

「や、やめろ…ネリネ、楓、た、たしゅけて…」

「ごめんなさい、タダくん。私女の子になったタダくん見てみたい」  
「わ、私も…（もう一度見たいです）」

「話がついたところで…さあ、覚悟を決めるのですよ」

そして麻弓は忠夫の口の中に魔法薬を流し込む。

「む、ゴクゴク……うおお、か、体が熱い……」

横島の髪も膝裏まで伸び、体も女の物に変わっていく。

「タ、タダくん…か、可愛い」

「忠夫さま、やはり綺麗です」

二人は横島に見とれていたが麻弓は……

「…そ、そんな……何で、何でそんなに大きいのですか……」

その胸を見て打ちのめされていた。

横島の容姿、それはあえて言うなら「美少女」である。

『ほあああああああああ——！！』

「うつつうつつ——」

今回はただの女性化なので、翼も無く眼も黒いままだった。

「と、とにかくこれでウチのクラスが1位になるのは間違いないわよ。頑張るのですよ——！！」

『おおおおおおおおおおおー！！！』

そして夜、芙蓉邸にて……

「こ、こりゃあおでれえた」

「稟ちゃんも忠夫ちゃんもとーてもラヴ」

と、ユーストマとサイネリア。

「いやあ、美しいとはまさにこの事だね」

「ほんとに綺麗」

と、フォーベシイとセージ。

「元に戻るんでしょうね？」

そんな稟の疑問にフォーベシイは答える。

「ああ、蜂蜜物語の効果は個人差はあるけどある程度の時間を過ぎれば切れるからね」

「仕方ない、付き合うか」

「仕方ねーな」

そして当日……

「いらつしゃいませー」

「お二人様ですね、こちらへどうぞ」

メイド服に身を包み笑顔で接客をする横島と稟の姿があった。

「…ノリノリだね」

「あはは……」

なんだかんだいって責任感の強い稟、何気に神魔人で女性の仕草には慣れている横島、なり切るのは早かった。

「お待ちのお客様が多い為、入店時間は10分限定とさせていただきます。なお、写真撮影は禁止となっております」

客の回転を早める為に樹は入口で案内をしていた。

「いやゝ、大盛況だね」

「みなさん稟さんと忠夫さん目当てのようですね」

亜沙とカレハは接客をする横島と稟を見ながら笑っていた。

「はい、みなさんタダくん達ばかりを見えています」

「稟と忠夫、とても綺麗」

「私達の親衛隊も稟くん達に夢中っス」

「忠夫さまはあんなに綺麗なんですから無理もないです」

「以前聞いたんだけど仕事でユニコーンを魅了しかけた事があるんだって」

「マ、マジっスか！？ユニコーンは清らかな乙女にしか懐かないはずなんです」

「さすが忠夫さまです」

（その辺りは夢で見えていないな）

もつとも、外見はともかく中身は美神の催眠暗示で書きかえられてたのだが……

そんな稟と横島の傍に二人の男の子が近付いて来た。

「どうしたの？」

「ボク達二人だけ？お母さん達は？」

「お姉ちゃん達綺麗だね」

そう言うのは人族の男の子。

「あ、ありがとう」

「なんだか照れるね」

「せえの」

魔族の男の子は何やらニヤリと笑っていた。

そして二人の子供達は稟達の後ろに回り込むと…

『そおれっ！！』

稟と横島のスカートは思いっきり捲れ上がった。

『うおおおおおおおおおおおーーーーー！！』

「あ、あああ」

「あああああ」

ちなみに稟は青と白のストライプ、横島は緑と白のストライプ。

『やったあーーーー！！しましまだあーーーー！！』

『グッジョブ！！ΣdΣdΣdΣdΣdΣdΣdΣdΣdΣd』

客の男性達は鼻血を噴き出しながらも親指を立ててサムズアップ。  
しかしながら、さっきも説明したが稟と横島の二人は今、女性としてなりきっている。

そして、その顔を真っ赤に染めて叫んだ。

『きゃああああーーーーー！！』

「こら真聡！何をしてるの！」  
「マ〓サト！あなたまで！」

二人の母親は真つ赤な顔で駆けつけてきた。

『わあー！ーい！』

「待ちなさい、こらー！ー！！」  
「すみません、あの子達ったら」

「いえいえ、お気になさらずに」  
「タ、タダくん、大丈夫？」  
「稟くん……」

二人はというと……

「きゃああだと……男なのに……男がきゃああ……？」  
「ワイはオカマやない、ワイはオカマやない、ワイは……」

教室の隅で膝を抱えて蹲り、黒いオーラに包まれて落ち込んでいた。

なんだかんだで、稟達のクラスが売り上げ一位だったのはせめても  
の救いだっただろう。

さらに翌日……

「いや〜、やっぱり男の体はいいなあ」

稟は何事もなく元の体に戻っていた。

「稟くん、嬉しいのはわかりますけどその…もう少し気を使って…」

横島はというと……

「私の制服がピッタリでよかったです」

「ぶつくく……、に、似合ってるわよヨコシマ」

「う〜、でも女として屈辱っス」

シアは胸に手をやりながら呟いた。

「な、何で俺は元に戻れんのじゃ」

薬の効果は未だ切れずに、女の姿のままであった。

「よっぽど薬との相性が良かったんだろうね」

「まあ、効果が切れるのは確かだから気長に待つしかねえな」

「くっく〜、キーやんとサッチャンのアホー……!!」

横島の叫び声は虚しく夏の空に響くのであった。

その頃麻弓は……

「ほーほほほほほ、稟くんと横島くん様様なのですよ」

隠し撮りしておいた写真で一財産を稼いでいたとさ。

続く。

おまけ

その頃、とある学園では……

「アキ…ナニカナ、鞆カラ出テ来タコノ写真ハ？」

「ち、ちよつと待ってよ美波。その関節はそつちの方向には曲がない様に出来てて……ぎゃああ~~~~っ!!」

「ウフフフフ、マツタク明久くん八困ッタヒトデスネエ。ウフフフ」

「姫路さんも!! 其処にはそもそも関節自体が無いから曲がる筈が、止めてえ~~~~っ!!」

「…雄二、浮気には然るべき報いを」

「ま、待ってくれ翔子。これは出来心で、ぎゃああ~~~~!! 割れる割れる割れる!!」

ちやつかりと稟と横島の写真（スカートが捲られた瞬間）を手に入れていたバカ共であった。

ちなみにどうやって手に入れたかというと……

「……俺に撮れない写真は無い」

まあ、そう言う事らしい。

## 《次回予告》

…私は生れて来てはいけなかった…

そんな事はない！そんな事はないよ。

…私の存在なんて誰も望んでいない…

私は望んでるよ、私が望んでいる！！

…私は…魔族だから…

そんなの関係無い！！

…私、私は…

私達、私達は。

次回・第八話「たった一つのモノ。君の名は…」

シア、俺はお前を…お前達を…

第七話「二人の天使が舞い降りる」(後書き)

此処からしばらく横島は女性の姿のままで物語が進んでいきます。

…何で俺ってこうまでTS物が好きなんだろう？

第七・五話「約束」（前書き）

ちよつとした日常のお話。

## 第七・五話「約束」

「ねえみんな。今日、私の家に来ない？」

放課後、帰りの準備をしてると亜沙先輩がやって来て言った。

「亜沙先輩の家に？」

「うん。今日はお母さんと一緒にクッキーを焼くの。で、せっかくだから焼き立てをみんなに食べてもらおうと思って。」

「わーい、行く行く。ね、稟くんも行くよね」

「そうだな、じゃあみんなでお邪魔させてもらいます」

「亜沙のお母さんか。どんな人だろ」

「うふふ、驚きますよ」

「亜沙先輩の家は初めてだから緊張するっス！」

「楽しみ」

「忠夫さま、行きましょう」

「いや、俺は……」

「いいかげん落ち込むのはやめなさいよ。いいじゃない、女の格好だって」

横島は未だ薬の効果が切れず、女の姿のままだった。

## 第七・五話「約束」

亜沙の家に着き、扉を開くと一人の女性が現れた。一見すれば亜沙の姉妹、そしてどちらかと言うと妹にしか見えない様なこの女性の

名は時雨亜麻。

驚くべき事に亜沙の実の母親であつた。

「いらつしゃい。あゝ、りつちゃんだゝ！」

「お久しぶりです」

「ただいまお母さん。そしてこっちが前から話している新しい友達よ」

「はじめまして、横島忠夫です。今はこんな格好ですけどちゃんと男ですの」

「はじめまして。私はタマモよ」

亜麻はニコニコしながら二人を見た。

「たつちゃんにタマちゃんね」

「タマモでお願いするわ……」

「さあさあ、上がつて。稟ちゃんは私の部屋へ皆を案内して」

「分かりました」

「私はお菓子とお茶の用意をしてから行くから」

『お邪魔しまゝす』

家の中に入つて行くとタマモが横島に頼み事をする。

「そうだ！ねえヨコシマ、ついでにヨコシマの作ったのも食べたいな」

「忠夫くんが作ったのって、忠夫くん料理が出来るの？」

「うん、ヨコシマの料理って意外に美味しいのよ」

シアがそう聞いて来るとタマモは自慢げに答える。

横島は猿神との修行の際に加速空間の中で二ヶ月間過ごしていた。

その時は雪之丞やジークと交代で料理を作っていたが、味が一番良かったのは横島であった。

更に、神魔人化した際に封印具が出来上がるまで横島は妙神山で過ごしていたのだがその時にも何も手伝わないのは気まずいという事で掃除や炊事洗濯なども手伝っていた。

なので横島の家事などの腕前はそんな所其処らの女性などよりは遥かに上回ってるのであった

「クッキーやケーキなんかも良く作ってくれたわ」

「ふ〜ん、じゃあ忠夫ちゃんにも手伝って貰おうかな」

「別に構わないっスよ」

「わ〜い。楽しみだね、たっちゃん〜」

そうして横島と亜沙は亜麻と一緒に台所へと行き、稟達は亜沙の部屋へと向かった。

稟達は亜沙の部屋でお菓子が出来上がるのを待ちながら談笑していたが、稟は尿意を催し立ち上がる

「どうしたの、稟くん？」

「ちょっとトイレに行つて来る」

そして稟はトイレに向かう。

「勝手知つたる他人の家」

そう言いトイレのドアに手をかけて開くが、其処には……………。

「なっ!!」  
「ひゃっ!!」

稟はトイレの中を見て固まった。そして、トイレの中の人物も。

「あ、あ、あの……その……これは決してワザとじゃ……」

稟は真っ赤な顔で後ずさりながら説明を試みる。

「……り、稟ちゃん……トイレに入る時はノックぐらいしなさいよ……  
……／／／」

亜沙も真っ赤な顔でそう言った。

「い、いや……鍵がかかって無かったので誰も入って無いと思って」  
「それでもノックは礼儀でしょ!!言い訳しない!!」  
「は、はい」

「そ・れ・と……何時まで見てるの!!早く何処かに行きなさい!!」  
「す、すみませーん!!」

亜沙に怒鳴られた稟は直ぐにその場を立ち去った。

「まったく……それと」

そして亜沙は真っ赤な顔をしながら『トイレの中の人物』に話しかける。

「忠夫ちゃんも何時までも固まってないではやくパンツを上げなさい。……丸見えよ／／／」

……つまりはそういう訳だ。

副題に誤りあり。「約束」ではなく、「お約束」でした。  
ちゃんちゃん。

おまけ・もしも、G×S!のメンバーがバカテストを受けたら？

## 第1問 歴史

### 問題

旧ソ連の宇宙飛行士「ガガーリン」が地球を見て残した名セリフを  
答えなさい。

姫路瑞希の答え

「地球は青かった」

教師のコメント

「正解です。先生もTV中継を見ていて感動した事を覚えています」

芙蓉楓の答え

「神はいなかった」

教師のコメント

「正解です。姫路さんの答えの方が有名ですがこちらもガガーリンが地球周回中に残した言葉として有名です」

吉井明久の答え

「地球か、何もかも皆懐かしい」

教師のコメント

「確かに歴史に残すべき名セリフですが、不正解は不正解です」

横島忠夫の答え

「大気圏突入中でしたので地球を眺めている余裕はありませんでした。ちなみに、クレーターから這い出た時のセリフは「あゝ、死ぬかと思った」だったそうです」

教師のコメント

「…だったそうですって、君ね……。とりあえず実体験の様なので正解にはしておきます」

おまけ2・前回の続き。

「お早う皆。…あれ？どうしたの？」

僕達が姫路さん達にお仕置きを受けていると其処にAクラスの工藤愛子さんがやって来た。

「いえ、ちょっと明久君達のやんちゃが過ぎたモノですからちょっと話し合いを」

「は、話し合いでHPは減少しない…」

「…雄二は反省が足りない」

「も、もう勘弁してくれえ〜〜〜!!」

「ん、何この写真？」

工藤さんは足元に落ちていた写真を手に取る。

「……写真撮影禁止の店だったが俺にかかれば盗み撮りなど簡単」

そんな風にムツツリーニはドヤ顔で胸を張っている。

「あー、噂の横島君と土見君だね」

「……君…だと？」

ピタリッ

工藤さんのその言葉に全員の動きが止まった。

「うん。バーベナに通っている友達から聞いたんだけどこの二人は本当はちゃんとした男の子なんだけど、魔界のある魔法薬を使って

女の子になっただって」

ピクンッ

「その話をもっと詳しくっ！！」

即座に反応する姫路さんと美波の二人だった。

「魔界にのみ生息する蜂が作る蜂蜜なんだけどそれには人間の遺伝子に反応して性転換させる性質があるんだって。この二人もその蜂蜜を使っただけの子にされたらしいよ」

「何処で買えるんですか（のよ）！？」

「あれ？何故か偶然にもボクのポッケの中に噂の『蜂蜜物語が』」

何故か偶然にもって、何故偶然そんな危険な代物を持って来るのかな？

そんな素朴な疑問を口にする暇など無く僕はダッシュで出口に向かって駆け出した。

「邪魔しないでよ雄二。僕には大事な用事があるんだ！！」

「ぬかせ！！手前の用事なんかしつた事か」

コイツめ、あくまでも僕の邪魔をする気だな。

雄二なんか女の子になっちゃえばいいんだ、きっとその方が世の中の為になる。

「明久君、何処に行くんですか？」

「アキ、心配しなくてもちゃんと可愛い服は用意してあるから」

姫路さんと美波は工藤さんから受け取った瓶を持ったまま近づいて

来る。

ちよつと、二人共その眼は止めて。マジで怖いから!!

「そのセリフの何処に心配しなくて良い要素があるのかな!？」

「諦める明久。お前ならきつと絶世の美女になれる」

「何言ってるのさ雄二!？僕なんかよりもっと……」

そこまで言つて僕は視界の端に映っていた人物に目をやる。

「そつだよ、僕達なんかより秀吉の方が綺麗な女の子になれるよ!

」

「ナイスだ、明久!!Σd」

「……商会の主力商品になれる」

「何故お主達はこんな時だけワシを男扱いするのじゃ!？」

……こんな話ばかりが頭に浮かんで来る今日、この頃。

## 第七・五話「約束」（後書き）

最近、バカテスの話も書きたくなっている。

更新が止まっている連載が結構溜まっているのに何考えてんでしょ  
うね僕って……

ちなみにバカテストは以前、ブログに乗せた奴のコピーです。

第八話「たった一つのモノ。君の名は」(前書き)

少し具合が悪くて寝込んでました。

今回はたいした書き足しなどはありません。

## 第八話「たった一つのモノ。君の名は」

今日は新しい友達が出来た、魔族の女の子「ネリネ」ちゃんと神族の女の子「シア」ちゃん。それぞれの家に帰って行っただけど、あの子達なら忠夫とも友達になってくれる筈だ。

・  
・  
・  
・

『忠夫…その怪我…』

忠夫は頭に包帯を巻いていた、たぶん楓が…

『へへっドジだよな、転んじまった』

嘘なのはわかってる。だからボクもその嘘に付き合った。

『まったくだ、このドジ』

『ははは…』

ムリをして笑っている忠夫にボクは被っていた帽子を忠夫の頭に被せた。

『わっ、何だよ稟。……稟、この帽子…』

『忠夫にやる』

『何言ってるんだ、この帽子は稟が父ちゃんからもらったって言うてた大切な帽子じゃないかないか。もらえないよ』

『いいんだ』

『でも…』

『ボクがあげたいんだ。今はそれしか出来ないから…約束したよな、ボク達一番の親友になろうって』

『…ああ、一番の親友だ。ありがとっ、大事にするよ』

そう言いながら帽子を被り、照れくさそうに笑った。

・  
・  
・  
・

《今度は友達も紹介できそうだな》

ガヤガヤ、ザワザワ

何だろう、あの大きな木がある空き地の方が騒がしい。

『何があつたんだ？』 『爆弾が爆発したらしい』 『誰か子供が巻き込まれたらしいって』

ドクン

何か変だ、向こうに行きたくない、でも行かなきゃいけない気がする。

ドクン、ドクン

歩いて行くと誰かが泣いていた、あれは孤児院の菊山先生。何か見覚えのある帽子を持っている。

ドクン、ドクン、ドクン

幹夫おじさんもそこにいた。おじさんも泣いている、何で？…

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

目の前が歪んでる。何でボクは泣いてるんだろ？いやだ、逃げ出したい、そこに行きたくない。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

なのに足が勝手に動く、行きたくないのに、逃げ出したいのに。おじさん達がボクに気付く、目から零れる涙の量がどっと増える。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

菊山先生が手に持っていた焼け焦げた帽子をボクに差し出す。忠夫にあげたはずの帽子を……

『嘘だ…』

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

『嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ』

『稟君……』

幹夫おじさんがボクをやさしく抱きしめてくれた。おじさんも小さな声で泣いていた。

『嘘だ……嘘だ……！……！』

その叫びに答えてくれる人は誰も居なかった……

第八話「たった一つのモノ。君の名は」

終業式の後のホームルーム、撫子は生徒達に話をしていた。

「とにかく、アルバイトしようと『純粹』異性交遊しようとかまわ  
ないが私から言う事は唯一つ、節度ある行動をするように」

「勿論ですとも先生」

「ほう、一応自覚はしているようだな。自ら認めるとは」

「俺様の行動は何時だって純粹ですよ。ただ、相手の女性が他人の  
恋人や人妻だと言うだけで」

「その行動を慎めと言っているんだ!!」

もはや恒例となった紅女史と樹の漫才も終わりをづけ、後は最後の  
挨拶を残すだけとなった。

「では、今学期はこれにて終了。解散」

ワアアアアーーーーー!!!

クラスの中は湧きかえるが麻弓は……

「麻弓」

「……何でしょうか……」

「まあ、補習は来週からだ。それまでプールなどでリフレッシュし  
ておけ」

「はいなのですよ……」

「それと、横っち」

「……何でしょうか……」

「その。何というか……挫けるな！いい事もきつとある……！」

紅女史はそう言って素敵な笑顔でサムズアップしてくれた。  
そう、未だ俺の体は女のままだった。

「はあっ……」

「忠夫さま、元気を出して下さい」

「そうです。明日からは待望のプール開きなんですから」

帰り道、落ち込んでいる俺をネリネ達が慰めてくれる。

「楽しみにしていてねヨコシマ。私のビキニで悩殺してあ・げ・る

っ」

「そう言えば忠夫くんの水着はどうするの？」

「フオっちゃんか何とかしてくれると言ってたよ」

「フオっちゃん？」

「向こうじゃ魔界の最高指導者をサっちゃんと呼んでたと言ったら

『じゃあ、私の事はフオっちゃんて良いよっ』と言ってたから」

「……サっちゃんってまさかサタ……じゃあ、神界は……」

「キーヤン」

「……キ、キリ……」

「ならお父さんはユーヤン？」

「ああ、そう呼べと言ってたな」

「フオっちゃんとユーヤン。私もそう呼ばうかな」

「でも、何となくお似合いっス！」

「確かに魔王や神王という呼び方よりは似合ってるわね」

「……でも、どうせならお義父さんと呼んで下さった方が……」

ネリネは小さな声で呟いたが、

「…何か言った？」

タマモは聞き逃さなかった。

「い、いえ何も…／＼／」

「全く、油断も隙もない」

そして、翌日。

「り、稟……」

「何だ…」

「俺様は生きている事に心から感謝してるよ」

樹は目から涙、鼻から血を流しながら語っていた。

何しろ目の前には楓、桜、シア、ネリネ、プリムラ、タマモ、亜沙、カレハ、（ついでに）麻弓の眩い限りの水着姿があるのだから。

「ついでで悪かったわね！！くられ、なにがなんでもくらあっしゅ！！！！」

「ぐはあっ！！」

「そう言えば忠夫は？」

「あら稟、私達よりヨコシマの水着が楽しみ？」

「そ、そういう訳じゃ」

ザワザワザワ

突然ざわめきがして来たのでそちらを見てみるとバスタオルに体を包んだ横島がやって来た。

「やっと来たのね。さあ、その水着姿を待ち望んでいた稟に見せてあげなさい」

「タ、タマモ。そういう人聞きの悪い事は…」

横島は稟を一度ジロリと睨みつけるとため息を一つ吐き、諦めが付いたのかバスタオルを外す。

すると……

シ~~~~~ン

少しの間静寂に包まれるが次の瞬間。

『ほあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ！！』

男子生徒の絶叫が辺りに木霊した。

「た、忠夫……」

稟は信じられないような物を見るような顔をしながらも頬を紅く染め。

「ブラボー！ブラボー！グッジョブ！グッジョブ！G J Σ d」

樹は鼻血を滝のように流しながら喚き立てる。

「ホーーーーーッ！！紺色の旧スクに【ただお】とひらがな書きのゼッケン！更にはその文字も豊富な膨らみによって横に伸びきっている！！正しい、正しいです！Correct！！」

「千百合ちゃん、落ち着いて！！」

そう、フォーベシイが横島にと選んだ水着はあろう事が旧スクだったのである。

横島は冷ややかな目のままネリネ達の所まで歩いて行くとフェンスの外にある草むらに話しかける。

「そこに居るんだろ、出てこいフォっちゃん」

そう言つと草むらの中からフォーベシイがカメラを抱えて出てくる。

「い、いやゝ。に、似合ってるよ忠夫ちゃん」

だが、その顔は冷や汗でダラダラだった。

横島はそんなフォっちゃんを凍りつく様な目線で見つめると指さしながら大声で叫ぶ。

「ネリネ、キミに決めた！！」

「はい、決められました」

「ま、待ってくれないか忠夫ちゃん……」

フォっちゃんは真つ青な顔で後ずさっていくが。

「行けネリネ！「せきか」だ！！」

「はいっ！『魔王様なんか大っ嫌い！！』」

「ぐわあっ！！」

パキイン！！とフォっちゃんは一瞬で石化する。

【こうかはバツグンだ】

横島はそんなフォっちゃんを満足そうに見つめると目線を草むらに向ける。

「同じ目に遭いたくなければ早くソレを持って帰れ」

「りよ、了解しました！！」

草むらから出て来たユーさんは石化したフォっちゃんを抱えて逃げ出した。

「お父さん……」

「あはは……」

それから皆はプールに入り、思い思いに遊んでいる。  
しかし、楓達というと……

「…タダくん、ズルイです…」

「本当なら私がヨコシマを悩殺する筈だったのに…」

「世の中、何かが間違ってるのですよ」

彼女達の視線は横島のとある「一部分」に注がれていた。

「そんな事を言われてもだな」

「あはは……」

横島は「一部分」を隠すように胸に手を回しネリネはそれを見ながら苦笑していた。

「稟くん、向こうは向こうに任せておいて私達は私達で遊ぼうよ」

桜はそう言いながら稟の手を引きながらプールの真ん中に連れて行く。

そこに。

「稟——っ!」

シアが後ろから飛びかかりしがみ付いて来る。

「う、うわっ! シア、何だいきなり?」

「えへへ、どう? 柔かい?」

シアは自分の胸を稟の背中に押しつけながらそう聞く。

「こ、こら、何をするんだ何を!？」

「シアちゃん、大胆」

「照れなくてもいいじゃない。う・れ・し・い・くせに」

シアはさらにグリグリと擦りつける。

「シ、シア？何か何時もと違うぞ」  
「そう言えば」

稟と桜がそう言つとシアはクスリと少し寂しそうに笑つとゆっくり離れる。

「せつかくの機会だからね。ちよつと羽目を外したかったのよ」

「そ、そうか？」

「そうよ、さあ稟、桜も。遊ぶわよー！」

「そうだね、稟くん、早くー！」

「分かった、分かった」

そんなシア達を見て横島とネリネは。

「ネリネ、シアちゃんは…」

「はい、あれはシアちゃんじゃ…」

その後シアは皆と遊びまわるが、

「何かいつものシアじゃ無いみたい」

「あゝ、あれでしょ。いつもと違う私を見てと土見くんに対してのアピールな訳ですよ」

「いつものシアちゃんの方がいいと思うけどな？」

「こういう言い方は失礼ですがシアさんらしくないですよ」

「俺様としてはシアちゃんらしくないシアちゃんも新鮮味があつていいけどね」

そんな否定される言葉を聞くたびにシアは軽く笑うが寂しそうな表情は消えなかった。

プール遊びも終わり、それぞれが自分の家に帰って行き稟達も家に入ろうとすると。

「稟」

「ん、何だシア？」

「またね」

「あ、ああ……」

シアは軽く手を振り、家の中に入って行く。

「シア……なのか？」

その後、数日間は何事も無く過ぎていった。

シアも翌日からは何時もの様子に戻っていた。

そんなある日、街中を歩いていると稟は誰かに呼び止められた。

「稟」

それは塀の上に座っているシアだった。だが、その目は何時もより

少しきつめで何処となく睨まれている感じがした。

「シア？……いや、違うな。……キミは誰だ？」

「やっぱり稟には解っちゃうんだ。嬉しい反面寂しくもあるな」

「はぐらかさないでくれ」

「そうね、あえて言うならもう一人のシア。…裏シアってところね」  
「裏シア？」

裏シアと名のつた少女は塀から降りると道の向こうを指さしながら言う。

「此処じゃ何だから別の場所で話さない？」

「そうだな…行こう」

稟と裏シアは噴水のある大きな公園へとやって来た。だが不思議な事にそこには誰一人としていなかった。遊びまわる子供達も、ベンチでまどろむ老人達も誰一人。

「結構聞かれない話をするからね。人払いの結界を張つていたんだ」

「それで、話つて？」

「ねえ、稟。此処を覚えている？此処で遊んだ事を」

「え？遊んだって…もしかしてシアと初めて会った時の事か。でも俺と遊んだのはシアで…」

「私なの！！確かに稟と初めて会ったのはシアよ。でも…でも此処で稟と遊んだのは私なのよ！！」

裏シアは涙を流しながらそう叫んだ。

「私とシアは本当は双子として生まれてくる筈だった。でも生まれて来たのは一人だけ……私とシアは裏と表、一つになって一人として生まれて来た……」

「裏と表？」

「それだけならよかった、今まで無かった事じゃないしそれだけなら何の問題も無かった……問題なのは……シアが神族で、私が……魔族だった事……」

「ま、魔族……？」

「そうよ！シアは神族として生まれて来た、でも私は魔族として生まれて来た」

「それが何の問題なんだ？シアの母親は魔族なんだろう、だったら……」

そう言おうとした稟を裏シアは突き飛ばして叫ぶ。

「分かって無い……稟は何も分かって無い！！神界の王家の第一子に魔族が生まれると言う事がどういう事なのか。双子として生まれたのなら私を二女にする事で何とかなったのかもしれない。でも同じ体を共有すると言う事は私も長女、嫡子と言う事なのよ……魔族が神界の王家の嫡子だなんて認められる訳無いでしょ……」

稟は答える事が出来なかった。否、答えるべき言葉が無かった。

「プールでの皆の反応を見たでしょ、皆が皆シアじゃ無いと言う。変だって……私はただ私として普通に接しただけ、シアの真似じゃ無く私として行動したのよ。シアの姿だからと言われればそれまでだけど私が否定されたのは確かよ。稟に分かる？誰にも望まれない、誰にも愛されない私の気持ち……私の存在なんか誰も望んでないのよ……」

そんな事無い！！

「シア？」

「…何がよ…お父さんだって、お母さんだって私の事守ってくれなかったじゃない！！」

でも、私はあなたがいてくれてよかった。

私だってずっと一人ぼっちだったもん！！

外にも出れず、お友達だって作れなかった。

でもあなたが、もう一人の私がいたから寂しくなかった

！！

何時だってお喋りして、笑いあって……

全部…全部嘘だったの！？

「そんな訳無いじゃない！！私だってシアがいたから……でも、でも、もう嫌なの！！誰も私を見ていない、皆シアだけを見ている。もう…辛いよ……」

そうして裏シアの気配は消えていく。

待つて、待つてよ。どうするの？何をするつもり？

「シアの傍には稟がいるんだもん。もう私はいらないよね、もう、わた…しは…」

待つてよ！嫌だよ…待つて……

「待つて……っ！！」

裏シアの気配が消えると同時にシアの意識が体に戻ってきた。

「シア……」

「う、うう、うええ〜ん。り、稟く〜ん。うわああ〜〜〜んっ！！」

シアは稟の胸の中に飛び込んで泣きじゃくる。稟もそんなシアの肩を抱いてやることしか出来なかった。

それから稟は泣き続けるシアを家まで送ってやり、シアを母親達に任せるとユーストマに話を聞く事にした。

「今更はぐらかす様なまねはやめて下さいよ」

「……情けねえ親だよな。自分の娘を護る事さえ……助けてやる事さえ出来なかったんだからよ」

「おじさんは神界の王なんですよ、何とかならなかったんですか？」

「出来るもんならとつくの昔にやってらあ！！……す、すまねえ」

「いえ……俺の方こそおじさんの気持ちも考えずにすみません」

「なあ、稟殿。神界の王と言ったがな、神界の王だからなんだよ。

王だからこそくだらねえしがらみがついて回るんだ。サイネリアとの結婚でさえかなり無理をこり押ししたんだ。中にはシアを王家から放逐しろという意見すら出たほどだ、シアを守るためには裏シアをいらない事にするしかなかったんだ。俺がシアを溺愛するのも二人分の愛情を込めているつもりなんだ。……まあ、言い訳にしかならねえけどな」

「方法は……本当に方法は何もないんでしょうか？」

「無い事も無い」

そこに横島が話に割り込んできた。

「忠夫」

「無い事も無いってのはどういう事なんده」

「要するに二人が一人になっているから問題なんだろ。つまり二人に分かれる事が出来れば何とかなると言う訳だ」

「理屈で言やあそう言う事だけだよ、どうやるんだ？分離させる方法なんて…」

「だから言ったら、無い事も無いと。言いかえれば方法はあると言う事だ」

稟はそう言う横島に掴みかかる。

「ど、どうするんだ？教えてくれ忠夫！俺に出来る事なら何でもする！！」

「お、落ちて着け稟！出来る事ならと言うより稟にしか出来ない」

「稟殿にしか？」

「そうだ、考えても見ろ、何で「あの娘」は稟の前に出て来た？「あの娘」は自分の存在が認められていないと言ってたんだろ。なら、わざわざ稟の前に出て来たって辛い思いをするだけだったのは分かってた筈だ。「あの娘」は助けを求めてたんじゃないか？俺はそう思う」

「……確かにな。自分の存在を明らかにしたって辛い思いをするってのはわかってた筈だからな」

「だったら俺はどうすればいい？俺にはそんな魔法みたいな真似なんて出来ないぞ」

「お前がする事は「あの娘」を助ける事だ。今のままじゃ分離しようつとしても失敗するのは目に見えている。「あの娘」を助ける事が出来るのは稟、お前だけだ。「あの娘」を助けて来い稟。そうすれば後は俺が助けてやる」

「俺が裏シア……「あの娘」を……そうかつ!!」

ようやく稟は忠夫の言いまわしに気付いた様だ。

「そ、それとな、稟……」

「どうした忠夫？」

「……いくら中身が男だといってもいい加減、恥ずかしいんだがな」

何時の間にか稟の手は横島の胸倉を掴んでいた。

「うわあっ!!」

次の日の夕方、稟はシアをあのか園に呼び出していた。

「……稟くん、用事って何？」

「裏シア……いや、違う。あの娘を、シアの妹を助けるんだ」

「稟くん……でもどうやって？お父さんやお母さん達だつてどうにも出来なかったんだよ。それにあの娘は心の中に閉じこもっちゃった……いくら呼んでも応えてくれないのに……」

稟はそんなシアの肩を優しく抱いて「彼女」に話しかける。

「聞こえてるんだろ、俺も色々と思いだしてみた。あの日は丁度忠夫が消えた日だったんだ。だから詳しい思い出なんかは吹っ飛んで

いた。でも完全に忘れた訳じゃない、確かに覚えていた。道端に不安そうに座っていたシア、手を繋ぎ話ながら歩いているとだんだんと笑顔になっていったシア、そしてこの公園でそれまでとは打って変わった様に笑いながらはしゃぎ回っていた君。そう、確かに君は此処にいた。シーソーに乗って、ブランコに乗って、滑り台じゃ降り損なつて顔中砂だらけになったよな」

一つ、また一つと、稟が思い出を話しているとシアの目から涙が零れてくる。

「……り、稟……覚えて……覚えていてくれたんだ……」

「ああ、忘れていてゴメン。でも君だつてシアとしか名のつてくれなかったじゃないか」

「仕方ないじゃない、私には名前なんか無かつたんだから」

「そうだな、仕方なかつたよな。ゴメン、『キキヨウ』」

「……えっ？……キキヨウ？」

「そう、君の名だ。君の、君だけの名前だよキキヨウ」

「私の……私だけの名前……」

「名前が無くて存在できる筈がなかつたよな。でもこれでもう違う、君はキキヨウ、一人の女の子だ。だから此処にいていいんだ」

そして稟はキキヨウを優しく抱きしめる。

キキヨウも稟の胸の中で零れ続ける涙を止めようとせぜずただ、しがみ付いていた。

「……稟、稟……稟、稟、稟……っ……！」

「何だ、キキヨウ」

「ありがとう、ありがとう」

稟くん……ありがとう。よかったね、キキヨウちゃん。

空には夕陽も沈み、星が瞬き始めていた。

こうして、裏の存在でしかなかった彼女は、名前を得て一人の女の子になった。

続く。

#### 《次回予告》

横島による、シアとキキヨウの神魔分離。

その力の確立には哀しい過去があった。

その時、彼は完全に人ではなくなった。

その日、彼は彼女と会えなくなった。

だが彼は思う、無駄じゃ無かったと。

無駄では無かったと。

それは別離<sup>わかれ</sup>の日、誕生の日、そして誓いの日。

次回・第九話「何時かもう一度、茜雲を」

だから歩き出そう。

## 第八話「たった一つのモノ。君の名は」(後書き)

原作とは違い消える事を選んだのはシアではなくキキョウでした。

冒頭のアバンでも書いたようにネリネ(リコリス)とシアと出会ったその日に横島が消えた訳です。

帽子はちょっとした伏線です。

さて、次回はシアとキキョウの分離の話ですが横島の神魔人化の話でもあります。

横島の過去の話と平行して進みます。

楽しみに。

## 第九話「何時かもう一度、茜雲を」

『今日はこれ位にしよう』

予習が終わって背伸びをしたらふと、押し入れに目が行った。

押し入れの中に押し込んでいたままの箱。

その中にはいくつかの写真立てが入っている。

何度も捨てよう捨てようと思ってはみるが結局捨てられないまま6年が過ぎた。

そう、明日で6年目。アイツが居なくなってから…6年が過ぎた……

《喉が渴いたな。お水でも飲もう、稟くんとお父さんを起こさないようにしなきゃ》

私は音を立てない様にゆっくりと階段を下りていくとリビングに明かりが点いていた。

稟くんとお父さんの話声が聞こえたので邪魔をしない様に声をかけようとしたら二人の口からアイツの名前が出て来た。

暗い感情が湧き出て来たので気付かれない様に部屋に戻ろうとしたがその後に聞こえて来た言葉に私の体は雷が落ちた様な衝撃で固まった。

『明日で6年、6年も経つんだ。忠夫君が居なくなってから…』

『おじさん…』

『まるで昨日の様に思いだせるよ、忠夫君が楓を助ける為にあんな嘘を吐いた日の事……いや、嘘を吐かせてしまった日の事を』

『それは俺も同じです。いや、同じ事をやろうとした俺が言う事じゃないですね。おそらく忠夫は気付いていたんだと思います。だから俺の代わりに…あいつは…』

『すまない…本当にすまない！！…私があの日、紅葉に電話さえかけなければ慌てて帰るような事はしなかっただろうに……。そうすれば紅葉も……稟君…君のご両親も…死なずに…』

《……え？……何…それ……だって…電話したのは……忠夫だって……》

『やめてください、おじさんはただ楓が心配だっただけでしょう。その結果不幸な偶然が重なっただけです。その事で俺がおじさんを責めたりしたら父さんが化けて出てきますよ、「馬鹿な事を言ってるんじゃない」ってね』

『しかし、忠夫君は……あの子は…自分が嫌われる事を知っていながら…それでも紅葉を死なせる原因を作ったと嘘を吐いてまで楓を助けてくれたというのに……私は何も……な…にも……』

『…忠夫……』

《！！》

カチャリ

私は震える手でリビングへの扉を開いた。

『か、楓…』

『き、聞いて…いや、知ってしまったんだね…本当の事を…』

『どう言う事なの…？だって…お母さんが死んだのは……アイツの…忠夫のせいだって……自分でそう言っただよ！…嘘なんか…嘘なんか吐いた事はなかったもん！忠夫は……タダくんは私に嘘なんか吐いた事なかったもん！！だから…だから…だか…ら……』

私の目からは涙がボロボロと流れている。6年間、あの日から流れる事のなかった、彼が…タダくんが消えたあの日でさえ流れなかった

た涙が。

お父さんはそんな私を優しく抱きしめながら言った。知らずにいた、知ろうともしなかった、知らなければならぬ真実を。

「そう、お前は忠夫君の事を信じていた。何よりも、誰よりも……だからこそ信じてしまったんだ……彼の……楓の命を繋ぎとめる為に残酷で優しい嘘を」

——分かってた…分かってたの、タダくんは悪くないって……

…私の中から私の声が聞こえて来た。忠夫の嘘を信じた私の中からタダくんの嘘を信じなかった私の声が……

——ゴメンねタダくん、私が……私が弱かったから……

違っ、私だけじゃない……私の方こそあんな嘘を信じなければ……私が……私達が嘘を信じずにタダくんを信じていれば……

——うん、そうだよな……私達が……

そして別れていた私と私は私達に……一人の私に戻る。

『ごめんなさい、ごめんなさい……タダくん……ごめんなさい……』  
『楓……』

その言葉から幹夫は気付いた、楓が元の楓に戻った事を。

「うわあ~~~~ん、うわあ~~~~ん」

6年間、体の中に溜まっていた悲しみが溢れだすように涙となって流れ出す。

そしてタダくんへの想いがどんどん大きくなっていく。  
止まることなく熱い、熱い想いが……

何時の間にか泣き疲れて眠ってしまったのだろう、私は自分のベッドの中で目を覚ました。

起きあがった私は押入れの中からしまいっぱなしだった箱を取り出した。そして…

朝食の準備が終わる頃、凧くんとお父さんが起きて来た。

『か、楓？…』

『楓、大丈夫なのかい？』

『凧くん、お父さん、お早うございます』

目は赤く泣き腫らしていたけど私は笑顔で挨拶をした。

『ああ、お早う…』

『楓、お前は』

『タダくんがあんな嘘を吐いたのは私に笑ってもらったためだったんだよね。だから私は笑うの、何時タダくんが帰って来てもいい様に忠夫が？』

『うん、私は信じる事にしたの。タダくんは帰って来るって、絶対にまた会えるって』

凧くんとお父さんは呆然としてたけど、優しい顔になって頷いた。

『そうだな、俺も信じるよ。帰って来るって』

『勿論、私も信じよう』

楓の部屋の机の上、そこには6年間封印されていた想いと共に解放された幾つかの写真立が飾られていた。

初めて出会った日に、紅葉、楓、忠夫の三人で撮った写真が朝日を受けて光っていた。

そして2年後、想いは叶う。

第九話「何時かもう一度、茜雲を」

稟とシアは一緒に神王邸に帰って来た。

神王邸には横島達だけではなく、連絡を受けた桜と麻弓に樹、亜沙とカレハも集まっていた。

「稟殿、すまねえ……いや、ありがとう」

「稟ちゃん、ありがとう……ありがとう」

ユーストマとサイネリアは涙を流しながら稟に礼を言う。ユーストマのもう二人の妻、ライラックとアイリスも同じように泣いていた。彼女達にとってもシアは大事な娘なのだから、そして彼女の事も。

「麻弓に樹、亜沙先輩達も来てたんですか」

「うん、忠夫ちゃんに教えてもらったのよ」

「忠夫に？」

「後で成り行きを説明するより最初から知っていた方がいいと思っ  
てな。それで彼女の名前は？」

「ああ、キキヨウ…彼女の名前はキキヨウだ」

そしてシアの所に女性陣が集まって行く。

「ゴメンねキキヨウちゃん、気付いてあげられなくて」

「すみません」

「面目ないですよ」

「でも忠夫が言った。これからはキキヨウも一緒に居られるって」

そんなプリムラの言葉を聞いてユーストマは忠夫に聞く。

「だが、どうやるんだ？融合なら何とかなるがさすがに分離なんて成功した例はねえぞ」

「大丈夫、俺にはそれを可能にする力があるんだ」

横島はそう言いながら右手を出すと意識下より文珠を取り出す。

「ヨコシマ、本当にやる気？」

「当然だろ、それに約束したからな。稟がキキヨウちゃんを助けたら、今度は俺が助けてやるって」

「た、忠夫ちゃん。その珠は一体何なんだい？気のせいか体の中から出て来たようにも見えたけど」

フォーベシイは文珠を指さしながら聞く。周りの皆も不思議そうに文珠を見ている。

「これは文珠といって靈力を極限まで収束させて作った珠だ。これに意味を持つ漢字を込めて解放すれば大抵の事は出来る。捕縛の【縛】と込めれば文字通り動けなくなるし【氷】と込めれば絶対零度近くまで温度を下げる事が出来る」

「ならもしかして以前、結界の中の私を探し出せたのも」

「これで、【搜】したんだ」  
「へ〜、これは凄いね。そん所其処らの魔法具なんか目じゃないよ」

そんな風に樹達が文珠を眺めながら感心しているとタマモが語り出す。

「言つとくけどこれは絶対に此処にいる連中以外には内緒よ。向こ  
うの世界でも文珠を作るのは人界ではヨコシマだけだったんだか  
ら。もしばれたらどんな目にあわされるか分かつてるでしょ」

「ああ、当然だ。ばれる訳にはいかねえ、絶対にな!!」

「私も約束するよ。それはそうとその文珠とやらを使って本当に二  
人を分離できるのかい？分離の【離】だけじゃいくら何でも無理だ  
と思うんだけど」

「勿論一つだけじゃ無理だけどね、文珠は複数個使って並列同期さ  
せる事によって応用力が膨れ上がるんだ。今回は【神】【魔】【分】  
【離】の四文字を使って神族のシアちゃんと魔族のキキョウちゃん  
を分離させるんだ」

「ねえ、横島くん。ちょっと気になるんだけど、その文珠って高い  
んじゃないの？」

麻弓がそう聞くとタマモが答える。

「そうね、以前オカルトショップを開いている厄珍って怪しげなお  
っさんに聞いたんだけど、もし流通に乗ったら一個10億位はかる  
くするって言ってたわね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫くの静寂の後…

『じゅ、じゅうおく~~~~~~~~!!?』

「と言う事は…四個使ったから40億!?’」

「ち、ちよつと待ってよ忠夫!いくら何でもそんな大金使わせる訳には」

あまりの事にキキョウが表に出てきて捲し立てる。

「あゝ、大丈夫大丈夫。それはあくまでも流通に乗った場合で作るのは俺自身だから元手はタダなんだ」

「そ、そうなんだ。あゝ、ビックリしたっス」

「じゃあ、ユーやんにフォっちゃん。何処か広い場所に人払いと認識削除の結界を張ってくれ。さっそく始めるぞ」

「分かった。じゃあ、丘の上の公園にしようか。あそこなら丁度いい」

そうして全員が丘の上の公園に移動するとユーやんとフォっちゃんによって多重結界が張られ外界と完全に遮断される。

「さてと、それじゃあ早速」

横島は文珠に【開】の文字を込めると封印具であるブレスレットにはめ込もうとする。

「た、忠夫さま!?’」

「ちよつとヨコシマ、何をするつもりよ!?’そんな事したら」

神魔人の事を知っている二人は慌てるが忠夫は言う。

「神魔人での姿の方が力の制御は確實だからな。それに皆に本当の姿を見せるいい機会だ」

「本当の姿？　と言う事だ忠夫」

そう聞いて来る稟に一度軽く笑うと横島は【開】の文珠をプレスレツトにはめ込む。

すると辺りは眩い限りの光に包まれ、その光が収まると其処にはその背中に一對の翼をはためかせ瞳を深紅に染めた横島が立っていた。

「……タ、タダくん？……」

「忠夫……その姿は一体？……」

「忠夫殿……」

「忠夫ちゃん？」

呆然と自分を見る皆に横島は語り出す。

『言っただでしょ、本当の姿を見せるって。私は元々普通の人間だったけど向こうでの闘いで色々あって、今の私は神、魔、人、それぞれの種族の因子を同時に持っている神魔人と呼ばれる存在なの。普段はこの魔力封じの封印具で力を封印してるから人間の姿で居られるから問題はないけどね』

「あ、あの……、本当の姿って事は今の横島くんは女の子って事なのですか？」

『……確かに体は女だけど頭の中はちゃんと男のままだよ。口調だけはどうしても女の物になっちゃうけどね。だから今までどおりに付き合ってくれると嬉しいな』

横島はバツが悪そうにそう言うが、

「当然です！！たえどんな姿になったとしてもタダくんはタダくんです！！」

楓は拳を握りしめて力説する。

『…ありがとう、楓』

横島もそんな楓を抱きしめる。

「は、はわっ、はわわっ！！」

「ず、ずるいです、楓さんばかり。私だって忠夫さまがどんな姿になろうと関係はありません！！」

そんな横島達を見て皆も優しく笑う。

『さあ、始めるわよ。シア、そこに立って。そしてシアとキキヨウ、二人ともお互いに向き合っている感じをイメージして』

シアとキキヨウは言われたとおりに目を瞑り、目の前にお互いが立っている姿を思い浮かべる。

「そうか、俺にキキヨウを助けると言ったのは」

『そう言う事よ、お互いがお互いを認め合いそれぞれを一人の存在として認識する。それが出来なくては何個文珠を使ったとしても分離は出来ない。どれだけの力があつたとしても文珠は万能じゃないんだから』

そして横島は文珠を四個呼び出すと【神】【魔】【分】【離】と込め、シアに向かって放り投げる。すると文珠は一定の間隔でシアを中心に回り出す。

横島は翼を広げてシアに向けて両手を突き出し魔力の制御を始める。  
元々この方法は自分の体からルシオラの靈氣構造を無理なく分離させルシオラを復活させる為に編み出した物だった。

数ヶ月前……

「うがあああーーーーー!!」

妙神山で魔力制御の修行をしていた横島は突然苦しみ出した。

『横島さん？横島さん、どうしたんですか!？』

『ヨコチマー！！！しっかりするでちゅ！！』

修行を見守っていた小竜姫とパピリオはすぐに苦しんでいる横島の元に駆け寄る。

『これはまさか……ヒヤクメよ、すぐに横島を靈視するのじゃ!!』  
『わ、分かったのね……!!』

老師に言われたヒヤクメはすぐさま横島の靈視を始める。

『こ、これは大変なのね……、横島さんの体の中で魔族因子が暴走してるのね……』

『やはりそうか……小竜姫よ、横島の暴走を抑える為の魔力封じの結界を張るぞ。準備せい!!』

『は、はいっ!!!!』

横島は加速空間の中に作られた結界の中で眠らされていた。暴走も結界の力によって少し落ち着いていた。

『どう言う事なんですか、魔族因子の暴走なんて？ルシオラさんから譲り受けた靈氣構造は安定していた筈では…』

『安定はしておった。…じゃがおそらく文珠の並列同期の修行の為に高まった魔力が引き金になって、ルシオラの靈氣構造に含まれていた魔族因子が暴走したのじゃろう。……まったく皮肉な事よな、ルシオラを復活させる為の修行が横島を苦しめる事になるうとはの』

現在妙神山には連絡を受けた仲間達が集まっていた。

「老師様、横島さんは…横島さんはどうなるんですか？」

「隠していてもしょうがないでしょ、はつきり言つてちょうだい。

横島くんはこのままじゃ……魔族に……なっちゃうんでしょ…」

美神の言葉に仲間達は驚愕する。

「せ、先生が魔族になるとはどういう事でござるか？一体先生に何があつたんでござるか!？」

「ヨコシマの過去に私達の知らない何かがあつたというのは分かるわ。…いい加減教えて頂戴!!何があつたの？ルシオラって誰!？」

シロとタマモの問いによって皆押し黙るが、美神がようやく重い口を開く。

「ルシオラ…それは横島クンの恋人…恋人だった女性ひとの名前よ」

「せ、せんせ…いの…」

「恋人?…」

「美神さん」

「こうなった以上、彼女達も本当の事を知っておくべきよ。責任は私が取るわ」

そうして美神は語り出す、魔神大戦の真実を。

千年前から続くアシュタロスとの因縁。

その先兵としてやってきたルシオラ、ベスパ、パピリオの三姉妹。パピリオに攫われ、そのままスパイとして敵陣に潜り込む事になった横島。

そんな中で何時しか横島とルシオラの二人はお互いに引かれあう。南極での闘いの後に訪れた穏やかでささやかな平穏な日々。そして始まるさらなる激闘。

奪われた魂の結晶と消えかけた美神の魂。そして動きだすコスモプロセッサー。

ルシオラは横島を先に進ませる為に自らベスパとの闘いに赴く。ルシオラがベスパの魔力砲を受ける直前に飛び込んで来た横島がルシオラの盾となって霊気構造を破壊する妖毒が込められた魔力砲を受け、死の淵に立つ。

そんな横島に自らの霊気構造と共に命を捧げるルシオラ。

美神を救出させる為にルシオラは自分は大丈夫だと横島を送り出すが、それは横島を前へと進ませる為に吐いた嘘。

美神を救い、魂の結晶を取り戻す横島に告げられたルシオラの死。アシュタロスは一つの選択を横島に突きつける。

『結晶を渡せばルシオラを蘇らせ新しい世界のアダムとイブにしてやろう』

突きつけられた残酷な二者択一、だが横島は選ぶ。

「どうせ後悔するならお前を倒してからだ、アシュタロスー!!!」

結晶を破壊し、世界を選んだ横島。ルシオラの命と自身の心を犠牲に……

「こうして世界は救われた、例え様も無い悲しみと苦しみを二人だけに押しつけて……」

涙を流しながら美神は語り終える。美神だけではない、誰もが涙を流していた。

真実を知ったシロとタマモも抱き合って泣いていた。

「そ、そんな事があったのにヨコシマは私達にあんなに優しく……」  
「馬鹿でござる……拙者達は先生のそんな傷にも気付かずに甘えてばかりで……」

「私は……私はたとえ横島さんが魔族になったとしてもかまいません  
……私は横島さんの事をずっと……」

おキ又はそう言い、皆も頷くが……

『じゃが、このままでは横島と言う存在は消えてしまう。魔族因子が横島の人族因子を食い尽した瞬間全く別の魔族に生まれ変わる事になるじゃろう』

『そ、そんな……そんな事って……老師！！何とか、何とかならないんですか！？』

小竜姫の悲鳴にも似た問いかけは此処にいる全員の気持ちを代弁し

ていた。

『…今、横島にしてやれる事は二つのみ。一つはこのまま人として死なせてやる事』

そんな老師の言葉にタマモが食ってかかる。

「死なせてやるってどういう事よ！？その何処がヨコシマの為なのよ！？」

『今死なせてやれば横島は人として転生の輪に入る事が出来る。そうすればいずれまた人として生まれ変わる事が出来るんじゃない？』

「だったらもう一つの方法とは何なんだ？」

そう雪之丞は聞く。

『魔族因子の暴走を抑える為に対となる神族因子を横島に植え付ける事じゃ。そうすれば横島の意識は消える事はなくなる』

「ならそうすれば…」

『じゃがその代わりに横島は完全に人間ではなくなる。何しろ神、魔、人の因子を同時に持つ事になるのじゃからな』

老師の説明に皆は言葉を失った。

『どうするかは横島自身に決めさせるしかあるまい。儼等が勝手にどうこう出来る問題ではない』

「それしか…ないわね…」

そうして最終決断は横島に託された。

『…と言う訳じゃ。横島よ、辛いじゃろうがどちらかを選んでくれ。

このままお主を魔族に変えさせる訳にはいかんのじゃ」

「……神族因子を植え付けた場合、ルシオラはどうなるんすか？」

『ヒヤクメに霊視させたところ、ルシオラの魂はお主の魂と融合しかかっておるらしい。おそらくはそのまま固定されるじやろ。その場合、ルシオラは今生での転生は不可能となりお主の死後、共に転生の輪に入る事になる』

「……分かった、やってくれ」

『良いんじゃない』

「ああ、俺は死ぬ訳にはいかない。ルシオラの為にも」

『ならばさっそく始めるぞ。小竜姫よ、お前の神族因子を横島に移すのじゃ』

『はい、横島さん、苦しいでしょうが少しの間我慢してください』

小竜姫は横島の胸に手を置くとゆっくりと自分の体から神族因子を送り込む。

すると、体の中で魔族因子と神族因子がせめぎ合い放電が起こる。

「うわあああーーーーー!!」

横島は悲鳴を上げ苦しみ出す。小竜姫の体にも放電の逆流が襲ってくる。

『くっくっ！よ、横島さん…頑張ってください!!』

「うわあああ……」

…… ああああーーーーー!!」

まず、横島の声が変わった。ルシオラと小竜姫の声が重なった様な感じに。

そして目の色が変わる。黒から真紅、そして蒼に。  
身体つきも変わる。男の物から女性の物に。

さらには背中から二対四枚の薄緑色の翼が出て来た。

「よ、横島くん？ちょっと老師、これって一体…」

「やはり、この姿になったか…」

「この姿って…どう言う事なんですか？この姿は魔族というよりまるで女神のようですが」

ピートはそう問いかける。

「そう、女神じゃ。ルシオラの霊気構造の元となっておるのはアシユタロスの物、魔族因子もしくり。じゃが、アシユタロスは最高指導者達にその罪を許されすでに消滅しておる。それによって横島の体内に残されている霊気構造のアシユタロスの部分も変わっておるのじゃ。奴の前神であるイシユタルの物にな」

「じゃあ、今の横島は女神って事か！？」

「いや、あくまでも女神クラスの力を持つておるとい事じゃ。それに横島の体の中には神・魔・人の因子が混在しておる。例えて言うなら「神魔人<sup>しんまじん</sup>」と呼ぶべき存在じゃ」

そう言っていると横島の体からは放電は収まっていて、神族因子を提供した小竜姫の体は子供の様に縮まっていた。

横島は荒い呼吸の中、変わってしまった自分の体を呆然と見つめていた。

・ ・ ・

横島に制御される文珠の中心でシアの体は徐々に光に包まれていく。

「そう、あの後の私は自分でも思いたすのが嫌な位酷かった。何を

するでもなくまるで抜け殻の様にただ日々を惰性で過ごしていた。  
皆の心配なんて気にもしないで》

・  
・  
・

「…横島クンはまだあのまま？」

「はい…いくら話しかけても応えてはくれません」

横島はあの日からずっと修行場の庭にある岩の上で空を見上げていた。

誰とも関わろうとせず太陽が沈み、夕焼けが消えるまで。

「わ、私達では…何も…グスッ…横島さんに何もしてあげられないんでしょうか？」

「もうすぐ横島クンのご両親が来る事になってるわ。あの人達に任せてみましょう、私達には無理でもきつと何とかしてくれるわ」

美神はおキヌの肩を抱きながらそう言ってなだめる。  
それから暫くして百合子と大樹がやって来た。

「で、人様にこれだけ心配掛けさせてる家の馬鹿息子は何処だい？」

「お、お義母さん。横島さんにあまり酷い事は…」

「とにかく、案内してくれないかい」

さりげなく義母と呼んだおキヌをスルーして百合子は忠夫の居る所に案内させる。

「……あ、あれが忠夫なのか？」

庭で岩の上に座り、空を見上げている横島を見て大樹は呆然として

いる。

百合子はそんな横島の元へと歩いて行く。

「じゃあ、ちょっと行ってくるよ。ここは私に任せて二人にしておいておくれ」

「待ってくれ、俺も一緒に……ぐはあっ……！」

一緒に行こうとした大樹は百合子の裏拳で吹き飛んだ。

「却下。アンタが一緒だと娘に飛びかかりそうだからね」

「む、娘とのコミュニケーションが夢だったのに……ぐふっ」

大樹、終了。

百合子はゆっくりと歩いて行き、何も言わずに横島の横に腰を下ろした。

『……は……してた……』

横島はポツリポツリと話した。

「何をだい？」

『覚悟はしてた。分かった事だった、でも……でも……感じられないの……今まで確かに私の中に居たルシオラが……感じられないの』

「どんな人だったんだい？」

『とても……いい娘だったよ。……笑顔が可愛くて、夕陽が好きで……いい、命懸けで私を助けてくれたのに……見殺しにして……今度だつて……結局たすけ……助けられなかった……私は何も……ルシオラに何もしてあげられなかった』

そう語りながらボロボロと涙を流す横島を百合子は自分の胸の中に抱き入れる。

「何もしてないって事はないだろ。今、お前は生きてるじゃないか。ルシオラって娘が望んだのはお前が生きている事なんだろ、ならお前は生きなきゃ駄目なんだよ。お前はお前として生きていく事、それがルシオラにしてやれる事なんじゃないのかい？」

『だ…けど、だけど…私はルシオラに…会いたかった…もう一度…  
…会いたかったよ…』

横島は百合子に抱きついて胸の中に顔を埋めて泣き、百合子もそんな横島を優しく抱きしめ頭を撫でてやる。

「泣きな、今は思いつき泣きなさい。母親の胸っていうのはね、子供を育てる為、そして子供を泣かせてやる場所でもあるんだからね」

『うわあああ~~~~ん。うわあああ~~~~ん』

ひとしきり泣いた後、横島は顔を上げるとバツの悪そうな笑顔を見せる。

「さあ、もう気はすんだろ。後は心配をかけた連中に謝る番だよ」

『う、うん』

そして二人は皆が集まっている広間に入って行った。

『み、皆…心配掛けてゴメンなさい…』

横島は泣き腫らした顔で、それでも精一杯の笑顔で皆に謝る。

「横島クン……」

「横島さん……」

「せ、せんぜえ……」

「ヨコシマ……」

事務所のメンバーはそんな横島の元に駆け寄る。

「まったく、心配掛けやがって」

「でも、横島さんが元気になって嬉しいんジャー!!」

「はい、僕も嬉しいです」

雪之丞やピート達も喜んでいる。

「冥子も〜嬉しいの〜」

「立ち直るのが遅いわケ」

「でも、横島さんなら立ち直ってくれと信じてました」

冥子にエミ、魔鈴も笑顔で見ている。

『ルシオラちゃんとは生まれ変わってから会えるでちゅ』

『そう言う事さ、会えない訳じゃないんだ』

パピリオとベスパも笑っている。

『そうよね、ルシオラとはまた会える。たとえ来世だとしても……』

横島は日が沈みかけ、夕陽に染まる空を見ながら約束をする。

『もう一度一緒に見よう、あの…茜雲を』

・ ・ ・

光の中には二人分の影が見えて来た。

『もう少し、もう少しで』

徐々に弱まって行く光、そして完全に収まると其処には二人のシア…いや、シアとキキヨウが向かい合って立っていた。

「…あ…あ、ああ…」

シアは涙を流しながらキキヨウの頬を撫で、その存在を確認する。  
キキヨウも同じようにシアの存在を、そして自分が此処にいる事を確認する。

「キ、キキヨウちゃん…本当にキキヨウちゃんなの？」

「う、うん…うん、私は此処にいるよ…シア…」

生まれてからずっと表と裏、一人だった姉妹はやっと表と表、二人の姉妹に戻る事が出来た。

「ずっと…ずっとこうやって会いたかった…やっと会えたよ…キ、キキヨウちゃん…ん…ん!!」

「私だって…私だって…シア、シアー…!!」

号泣し、抱き合う姉妹を見ながら仲間達もまた泣いていた。

「俺が言う資格はねえんだが、本当によかった…ありがとうよ、忠夫殿。……忠夫殿？」

横島は稟達とはまた別の意味での涙を流しながらその光景を見ていた。

いや、シアとキキヨウの二人に自分とルシオラの姿を重ねていた。

「ヨコシマ……」

横島は自分の体を抱きしめる様に腕を回し、膝を地面に付け泣き続ける

その涙の意味を知っているタマモは横島に寄り添い、その肩を優しく抱く。

「忠夫、どうしたんだ？」

「タダくん」

「忠夫さま」

そんな横島の所に皆は集まって行く。

「忠夫くん、大丈夫？」

「やつぱり、何か無理をさせたんじゃない？」

特にシアとキキヨウは心配そうだ。

『……じゃ…なかった…無駄じゃ…なかった……た……』

「え？」

「忠夫？」

『無駄じゃ無かった、無駄じゃなかったんだ…そうだよ、ルシオ』

ラ……』

ルシオラを復活させる為の手段だったが、それは叶わなかった。  
しかし、シアとキキヨウを分離させ、二人を救う事が出来た。  
この力は無駄ではなかった。だからこそ、横島は顔を上げて笑う。  
涙は止まる事はなかったが、それでも最高の笑顔だった。

『さあ、稟！お次は仕上げよ！！』

「仕上げ？」

『ねえ、ユーヤん。確か神界は一夫多妻制だったわよね』

「あ、ああ、そうだが？」

『つまり、シアと稟が結婚すれば稟はユーヤんの義息子むすこになるのよね。その後、キキヨウと結婚すれば……どうなる？』

「そうすれば……キキヨウは俺達の……義娘むすめだ！！……その手があつたかあ……！！」

「やったあ……！！神ちゃん、ラヴよ！とお……！！ってもラヴ」

『キヤー、キヤー……！！』

神王一家は浮かれまくっていた。

「ちょっと待て……いきなりそんな事を言われても」

稟は当然慌てるが、

「稟くん……イヤなの？」

「そうよね、いくら何でも稟の気持ちを無視する訳にはいかないわよね」

「うん、我儘言って嫌われないもんね」

落ち込むシアとキキヨウの二人を見て、

「い、いや、別に嫌っていう訳じゃないぞ。ただ、あまりに突然だったんで」

と、言ってしまった。

「じゃあ、いいの？」

「いいんだよね！」

「どうなんでえ、稟殿!!」

『どうなの？稟ちゃん!!』×3

たたみかけてくる神王一家に押された稟は、

「は、はいつ!!よろしくお願いします!!」

了承してしまった。

「キヤー!!やったーあ!よかったねキキヨウちゃん!!」

「うんっ!シア、よかったね♪」

「それでこそ稟殿よ!!」

『よかったわ!これでキキヨウちゃんも正式に私達の娘よ!!』×3

「とおーーーーーでもラヴ♪」

「あ、あれ……何時の間に……は、ははははは」

もはや、この事態を受け入れるしかない稟は笑っしかなかった。

「稟くん……」

寂しそうに稟を見る桜に横島は言う。

『大丈夫よ桜。言っただでしょ、神界は一夫多妻制だって。だから桜も一緒に結婚しちゃいなよ、いいわよね。シア、キキヨウ』

「当然っ！皆で幸せになるっス」

「私も大賛成よ」

「シアちゃん、キキヨウちゃん、ありがとう。稟くん、私嬉しいよ」

涙を流しながら喜ぶ桜に稟は何も言えずに代わりに横島を睨みつける。

「た、忠夫…お前な…」

『大丈夫、稟なら、稟ならきつとやってくれると信じてるわ。頑張れ、稟！…！』

そう言い、親指を立てサムズアップ！！

「すっごい、いい笑顔だな、忠夫…」

こうして波乱にとんだ一日は過ぎていく。

翌日。

「ふふふふふふふふ…はーっはははははははあー……」

遂に…遂にこの日がやって来た――！！幾多の苦難を乗り越え、  
長き時の果てに、今！此処に！俺！ふつかあ――っ！！」

芙蓉邸の扉から出て来たのは、ようやく男の姿に戻れた横島だった。

「あはは、よつぽど嬉しいんだね忠夫ちゃん」

「まあ、無理ありませんわ」

「でも、残念なですよ。女の子の姿の横島くんの写真は高く売れてたのに」

そんな中、樹は地面に沈み込みそうなほどに頂垂れていた。

「あれだけの美女が…我が女神が…むさい男に…」

「あゝ、うっとおしいわね」

「ロードランナーの術で埋めるか？」

「嫌な草が生えてきそうだから止めといた方がいいですよ」

そんな会話をしていると神王邸の扉が開いてシアとキキヨウに桜、そして稟が出て来た。そして、それぞれの左手の薬指には指輪が光っていた。

「おめでとう皆。似合ってるわよ」

「ありがとうっス、亜沙先輩」

「シアもキキヨウも桜も皆幸せそう」

「今でもまるで夢を見ているみたいです」

「大丈夫、夢じゃないわよ桜。ちゃんと確かめておいたから」

「確かめるなら自分のほっぺでやってよキキヨウちゃん」

シアは赤くなっただ頬をさすりながらそう言う。

「どうした稟、元気がないぞ。わははははは」

「……そうやって笑っていられるのも今のうちだぞ忠夫」

そんな事を言う稟の目が紅く光って見えるのは気のせいだろうか。

「どう言う事だ？」

「そう言えばさ忠夫ちゃん、ネリネちゃんや楓達は何処なの？」

「なぬ？」

首を振りながら辺りを見回すがネリネに楓、タマモも居ない。

横島が嫌な予感に冷や汗を流していると魔王邸の扉が開き、三人が出てくる。

……その左手の薬指に指輪を光らせながら……

「……あの……、ネリネさん達。その指輪は何じゃらほい？」

「勿論、婚約指輪だ」

稟はそう言いながら横島を羽交い絞めにして拘束する。

「り、稟、何をする？婚約指輪とはどういう事だ！？」

「だから、忠夫ちゃんとネリネちゃん達が婚約するという事だよ」

真っ赤になってうつむいている三人の後ろからフォっちちゃんが現れる。

「婚約つて……魔界は人界と同じ一夫一妻制じゃなかったのか？」

「うん、そうだよ。だから神界で式を上げるのさ」

「……はい????？」

「神界の一夫多妻制はね、『神界での結婚』にも有効なんだ。つま

り、例え魔族や人族であつても神界で結婚すれば何人でも妻を持てるんだよ」

「だからネリネも楓もタマモもまとめて忠夫と結婚できるという訳だ。勿論、嫌とは言わないよな」

はははは…と乾いた笑いを浮かべる横島にネリネ達は瞳を潤ませながら近づいて行く。

「タ、タダくん…わ、私嬉しいよ…」

「忠夫さま、私は何時までも貴方に尽くし続けます」

「ヨコシマ、私達が結ばれるのは運命だったのよ」

「さあ、忠夫ちゃん。左手を出して」

フオっちゃんは横島用の指輪を出してゆっくりと近づいて行く。

この期に及んではもはや逃げ場はないと悟り、横島は項垂れながら左手を出す。

楓、ネリネ、タマモの三人は一緒にその薬指に指輪をはめていく。

「うふふ。シロ、私の勝ちよ」

そう、タマモはほくそ笑む。

そして、GS世界…

「うがあああーーーーー!!!」

「ど、どうしたの、シロちゃん!？」

「いきなり何なのよ!？」

突然叫び出したシロに美神達は驚く。

「タマモに…あの女狐にとんでもなく出し抜かれた気分がしたんでござるよ〜っ!」

「なん…デスッテ…」

「シロの超感覚に反応するって事は…何をしてるのよあの二人は  
——!」

そして、シアとネリネの婚約は三世界全域に発表され、世間は…特にバーベナ学園の男子生徒は大混乱に陥り出家する者も居たという。

続く。

キャラ設定5

横島忠夫（神魔人形態2）

作中での表記にあるように、神魔人形態での本当の姿はアシユタロスの前神であるイシユタルの影響を受けた為、目は蒼く、翼も二対四枚で正に女神の姿である。

普段が目が赤く、翼も二枚なのは魔力封じの宝具の封印を受けている為である。

寿命は宝具を付けている状態なら人間と同じ程度だが外すとほぼ、永遠。

リシアンサス

神界の王であるユーストマと魔界の姫であり、

フォーベシイの妹のサイネリアとの間に生まれた娘。

本来なら双子として生まれる筈だった妹と共に一つの存在として生まれて来た。

同じ体を共有している訳では無く、其々の肉体を持っている。

幼い頃から意識下で妹と話をしたりして掛け替えの無い存在として暮らして来た。

幼い頃、人界で迷子になり不安でいた時に稟と出会い、稟に想いを寄せる様になる。

横島への呼び方は「忠夫くん」

キキョウ

シア同様、ユーストマとサイネリアとの間に生まれたがシアと一つの体、

さらにはシアとは逆に魔族として生まれた為にその存在を無かった事とされた。

幼い頃にシアと共に稟と出会い、遊んでいるうちに稟に想いを寄せる。

体を共有している為に表に出てくる事も出来るが自分の居場所がない事を悟り、

シアの意識下に消えようとしたが稟に貰ったキキョウの名で自分を取り戻す。

横島の力によってシアと分離し、ようやく一人の存在になれた。  
横島への呼び方は「忠夫」

## 第九話「何時かもう一度、茜雲を」（後書き）

あとがき

この二組の婚約は最初から決めていた事で、当然まだまだ増えます。横島の神魔人形態でおいしいと思われたでしょうが、実はあれが今の横島の本当の姿です。

【開】の文珠での神魔人形態はまだ宝具での封印を受けている状態なのです。

さて次回ですが、もし文珠の制御を神魔人化しないでおこなったらどうなっていたか…と言うお話です。

そしてその次は今回書き切れなかった神魔人化後の話など、幾つかの短編をまとめようと思います。  
ではまた次回に。

## もしものif「芙蓉家の食卓」（前書き）

注・この話は番外編であり、本編とは関係はありません。

前回、横島は文珠の制御を完全にする為に神魔人化しました。  
だがもしも、神魔人化せずに制御を行ったとしたら……

シアとキキヨウの分離は無事に成功した、しかしその代償は決して  
安い物では無かったのである。

これは、そんなifのお話……

## もしものif「芙蓉家の食卓」

その日、彼女（彼？）は妙に機嫌が悪かった。

もしものif「芙蓉家の食卓」

シアとキキヨウの分離から数日が立ち、横島達はそれぞれ平穏な日々を過ごしていた。

横島は未だに【蜂蜜物語】の効果が切れずに女性の姿のままであった。

そんなある日……

「忠夫、どうかしたのか？」

「何がだよ！！」

何時もの登校風景だが横島だけは朝から何かピリピリしていた。

「おっはろー！！」

スパパーン！

合流してきた亜沙は何時もの様に稟と横島の背中を叩く。

「いてて、お早うございます亜沙先輩」

稟もまた何時もの様に挨拶を返すが、

「痛いじゃないスかつー！」

横島は何故か声を荒げる。

「ご、ゴメンなさい…そんなに痛かった？」

「あ…い、いや、怒鳴るつもりじゃなかったんですけど。…すみません」

申し訳なさそうな顔をした亜沙を見ると、幾分冷静になったのか横島も謝る。

「ホントにどうしたのよ。ヨコシマらしくないわよ」

「今日の忠夫、ちょっと怖い」

「大丈夫なんですか忠夫さま」

「何でもないよ…」

横島はそう答えるが、

「本当に大丈夫？タダくん」

そつ、心配そうに聞く楓に。

「大丈夫だって言ってるだろー！」

と、きつい言い方をしてしまう。

「ゴ、ゴメンなさい……」

「あ、ゴメン楓。……何か今日はヘンなんだ。妙に落ち着かないと  
いうか」

「ううん、いいの」

「……まさかね……」

亜沙はそんな横島を見てポツリと呟いた。

「おっ、来たぞーっ!!」

横島達が登校して来たのを見ると男子生徒の一人が声を上げる。

「忠夫ちゃ〜ん」

「今日も美しい」

「さあ、我等親衛隊に笑顔を」

なんということでしょう。横島が女性の姿になると、男共は手のひ  
らを返したように横島の親衛隊を結成したのです。

そして、横島はそんな男共を見ると体を怒りで振るわせながら文珠  
を取り出すと……

「黄泉比良坂の術ー!!」

【黄】 【泉】 【比】 【良】 【 ……】

「やめんかーっ!!」

「ちょっとヨコシマ！！さすがにそれはシャレにならないわよ」  
「そうです、忠夫さまが手を汚す必要はありません。トドメは私が……」

そう言つとネリネの手に眩い限りの光が集まって来た。

「ネリネも少し落ち着きなさい」

「あと、坂の一文字だけ……」

「だからやめんかー！！！！」

さすがに、尋常じゃ無い殺気を感じた男共は一斉に逃げ出した。

「ちつ、あともう少しだったのに」

「一体、どうしたっていうのよ。今日のヨコシマはホントに変よ」

「……俺にも解らんがどうも朝から落ち着かないんだ。イライラするし、身体は重いし、腹は何か鈍痛がするし」

「タダくん、それって……もしかして……」

「楓、しー！！！！」

亜沙は楓の言葉を遮る。

「どうした楓？」

「な、何でもないのよ何でも。ね、楓」

「むー、むー」

「なあ桜。男の俺が聞くのも何だが、忠夫の奴ひよつとして……」

「そのひよつとしてだと思つよ……」

「まままあゝ」

「た、忠夫さま……」

「キ、キキヨウちゃん。忠夫くん……まさか……」

「そのような。強く生きてね、忠夫」

「ヨコシマあ……」

「忠夫、がんばれ」

「ちよつと待てよ……」

「どうした、樹」

「いや、もし本当にそうだとしたら忠夫はもう男には……」

『……………あ——————!!』

そして、翌日……

「どわあああ——————っ!!」

早朝、横島の叫び声が響いた。

「ど、どうしたんですかタダくん!？」

「ヨコシマ!!」

「忠夫、何があつた!？」

三人が横島に部屋に駆け込むと横島は顔を真っ青にしている、その下半身は血で真っ赤に染まっていた。

「タダくん、しっかり。気を確かに持つて」

「か、楓……血が……あり得ない所から血が……はわっ、あわわ……えう……」

「あ、忠夫……やっぱり……」

「ヨコシマ……アンタ本当に女の子に……」

「い……や……!!」

即座に仲間達には連絡は行きわたり皆、芙蓉邸に集まって来て、横島はやって来たフオっちゃんに掴みかかる。

「どう言う事なのよ、これは!!」

「ヨコシマ、口調が女の子っぽくなってる」

「……どうなんだ？フオっちゃん!？」

「どうやら時間が立ち過ぎた様だね」

フオっちゃんは申し訳なさそうな顔をしてそう答える。

「あのー、それってつまり……」

「言いにくいだが、忠夫殿の体はすでに女性のそれに作りかわってるって事だな」

「はつきり言ってるし」

「は、はは……ははは……」

「タ、タダくん……」

横島からは呆然としたまま乾いた笑いが出てくる。

「さあ、まずはご飯を食べてそれからゆっくりお話をしましょ」

セーじやリア達、母親sが朝食を運んでくる。

「あ、ごめんなさい。手伝います」

「いいのよ、楓ちゃんも座って」

テーブルにおかずが並べられているとタマモが横島に話しかける。

「だ、大丈夫よ。いざとなれば文珠で男になればいいし、ヨコシマがよければ私が男になってもいいし」

「男になるって何よ！私は元々男よ！！」

「口調、口調」

「あつ、うつゝ」

涙目になっている横島の前にこんな日の定番であるご飯、いわゆる「お赤飯」が置かれる。

「たつくさん炊いたからいっぱいおかわりしてね。忠夫ちゃん」

リアはニコニコ笑いながらそう言うが横島の目からはポロポロと涙が零れる。

「ふええゝゝゝん」

そしてまた新しい日々が始まる。

もし、あの時神魔人化していれば【蜂蜜物語】の魔法効果は神魔人の魔力によって打ち消され、元の男の姿に戻れたであろう。

だが、このifの世界では神魔人化をしなかった。

これはそんな、もしもの世界……

とりあえず、終れ。

## もしものif「芙蓉家の食卓」(後書き)

あとがき

と言う訳で、今回はもしもの世界と言う事で魔法効果が解けずに本当の女性になってしまった横島のお話でした。

今回は、神魔人状態の横島が何故巨乳なのか？横島が封印具によって男の姿に戻る時に何が起こったのか？SHUFFLE！世界での横島達のちょっとした日常といった短編集になります。

そこで今まで書きためていたストックが尽きます。  
本腰入れて続きを書かないと……

あつ！チクタクも書かないとだ。

「言いたい事はそれだけか？……」

げっ！！よ、横島……

「何なんだ、この話は？」

まあ、その…何というか。

「お前、俺の事嫌いだろ」

そ、そんな事はないぞ。横島の事が嫌いならSSなんか書かないし。

「じゃあ、これは何だ？」

まあ、そのなんだ。…これで、ハッピーエンドって事にしない？

ポイツと横島は乱に文珠を放り投げる。

何だこれは？

乱が文珠を受け取ると光を放ち、そして……

お【死】まい

## G×S!「短編集」

さて、今回は短編集でお送りします。

レポート1、「その胸の訳」

「ねえ、忠夫くん。忠夫くんって女の子になった時最初からそんなに胸が大きかったの？」

シアとキキヨウの分離を記念してお祝いのパーティーを開いている時にシアはそんな疑問をぶつけてみた。

『こ、これ？ いやゝそのゝ…何て言うか……』

横島は照れながらも胸を隠すようにしながら言葉を濁すが、タマモがその疑問に答える。

「最初はそんなに大きくなかったわよ。そうね、今のシアと同じくらいだったわ」

「マ、マジッスか!？」

『ま、まあね……』

「だったら何故そんなに大きくなったの!! 納得の行く説明を要求するのですよ!」

『じ、実は……』

それは今を逆上る事数ヶ月前、他者を寄せ付けないほどに落ち込んでいた横島が百合子達のおかげでようやく自分を取り戻した頃の事。

「こんにちは、お久しぶりね横島君。それとも横島ちゃんと呼ぶべきかしら？」

「に〜に〜」

妙神山に美神美智恵が娘のひのめを連れてやって来た。ひのめは久しぶりに横島に会えたのが嬉しいのか手を伸ばして抱っこをねだる。

『からかうのは止めて下さいよ隊長』

横島はあれからずっと妙神山で過ごしていた。神魔人の姿のままなので人界に出る事が出来ないらしい。

今は神魔界において横島の神魔人としての魔力を抑える為の封印具の研究が進められており、その封印具が完成すれば横島は再び普通の人間として生活する事が出来るようになるのだ。

『はあ、待ち遠しいわ』

「それより横島君、ひのめを抱っこしてあげてくれない？」

『だ、抱っこですか？』

美智恵がそう言いながらひのめを横島に渡そうとするが横島は胸を隠すようにしながら少し後ずさる。

「横島君、嫌なの？」

『いえ、別に嫌という訳じゃないですけど……ひのめちゃん、抱くと胸ばかり弄るので……しかも霊波を込めて来るからくすぐったくて』

「…うつ、ふええ……に〜に。ぐすつ……」

そう横島がやんわりと断ろうとするとひのめは徐々にぐずり出し、それと同時に辺りに放電が起こり、普段は発火封じの札で押さえられているひのめの発火能力が暴走し始める。

「ああっ！ひのめのかんしゃくが！横島君、お願い！！」

「横島さん、私からも頼みます！！このままじゃ修行場が…さすがに三度目となるとただじゃすまなくなります」

美智恵と小竜姫に泣いて頼まれると横島もこれ以上は嫌とは言えなくなる。

『分かった、分かりました。抱かせていただきます！！……はあ…

…、いらっしやい、ひのめちゃん』

「びええ……ふあっ」に〜に」

横島が手を差し伸べるとひのめはすぐに泣きやみ、笑いながら横島に抱きつく。

『まったく、仕方ないんだから。ん、ひやうつ！！こ、こらひのめちゃん。だから胸ばかりいじっちゃダメだってば…やんっ！！』

「だーだー。ぱいぱい」

胸をいじり回されるが相手がひのめだけに乱暴に引き剥がす事は出来ずにされるがままになるしかなかった。

「だーだー。きやはは」

『だから霊波を込めちゃいやーっ！！』

そんな事が何回か繰り返された頃、ようやく封印具が完成した。

そして集まった仲間達の中の女性陣、特に一部分にコンプレックスを持つ者たちは横島の変わり果てた姿に呆然としていた。

「よ、横島クン……一体どうしたのよ、その有様は……」  
『どうしたも、こうしたも……ひのめちゃんに揉まれ続けた結果、こんな事に』

美神の指さす先には、小隆…小竜姫サイズだったモノが美神サイズにまでスケールアップしていたのだった。

「裏切りましたね横島さん！！私の心を裏切りましたね！？」  
『ちよつと待つてよおキヌちゃん。裏切ったって何を？』  
「へ〜〜んっ！！横島さんのバカぁーーーーっ！！」

そんな妙神山の出来事。

『と、言う訳なの』

「と、言う事は私もそのひのめちゃんとやらに揉んでもらえばそのデカメロンが私の物になるのですか……」

『デカメロンで……』

「忠夫くん！！どうすれば忠夫くんが居た世界に行けるの！？」

『シアまで。いや、むしろそれは私が聞きたいんだけど』

「いいなあ、タダくん……」  
『楓まで……』

そんなSHUFFLE！世界の出来事。

レポート2、「男と女と父と母」

『ほれ横島。これが神魔の技術を総動員して作られたお主の為の封印具じゃ』

『有り難うございます、老師！！』

神界より帰って来た猿神は金色に光るブレスレットを横島に渡しながら使い方を説明していく。

『よし、左手にはめたな。まずは双文珠を作るのじゃ』  
『双文珠を？』

今の横島は最上級神魔とほぼ同じ力を持つ存在。それ故に以前では作れなくなっていた双文珠も簡単に作れるようになっていた。もつとも、あの時の様に何度でも使える訳ではなく単文珠の様に一度しか使えない。

横島が右手に靈気を込めると白い光と黒い光が混じり合う様に渦を巻き、双文珠が手の中に現れる。

『では、その文珠に【封／印】と込めて封印具にある丸い窪みにはめ込めば神魔の力は殆んど封印され、元の人間の姿に戻るぞ』  
「じゃあ、これで横島さんはちゃんと人間に戻るんですね」

『いや、そう言う訳でもない』  
「…どう言う事よ、それ？」

横島が人間に戻れると喜んだおキ又だがそれを否定するような猿神の言葉に美神は聞き返す。

『その封印具は横島の中にある神魔の力を極度に抑え、反対に人の因子を高める物じゃ。その封印がある内は確かに人とほぼ変わりはないが横島が「神魔人」であるという事は変えようのない事じゃ』  
「じゃあ、横島くんはアシュタロスや貴方達みたいに魂の牢獄とやらに囚われているってことなの？」

『そうではない。横島はその封印具をしている限り人としての死を迎える事が出来るしお前達同様転生の輪に入る事も出来る。じゃが、美神の嬢ちゃんが魂の結晶を持って転生していた様に神魔人としての魂を持ったまま転生する事になる』

『じゃあ、ルシオラも私の中に居るままなの？』

『いや、死んだ後の魂の状態であればお主とルシオラの分離は何か可能の様じゃ』

『良かった……』

来世とはいえ、再会が可能と知って横島は安堵した。そして双文珠を封印具にはめようとした所で頭をよぎった疑問を聞いてみる。

『この双文珠って元の姿でも作れるの？』

『極限まで霊力を高めれば可能じゃと思うが、まあおそらく無理じやろうな。ちなみに開封の【開】の単文珠ならば「半・神魔人状態」になれるからその時ならば作る事も出来るやもしれん』

「そうなの、良かった」

『……何が良かったんですか、美神さん』

『言っておくが文珠の販売は絶対に禁止じゃぞ』

「ちっ!!」

『舌打ちしたよ、この人!!』

そしていよいよ横島が双文珠を使って元の姿に戻ろうかという時、おキヌが肝心の二人が居ない事に気付く。

「あれ？横島さん。お義母さまとお義父さまは？」

「おキヌちゃん、今何か発音の仕方がおかしかった気がしたんだけど？」

「えっ…き、気のせいですよタマモちゃん」

「本当かしら？」

『…あの二人には今日私が男の姿に戻る事は教えてないの』  
「何故ですか？」

『あの二人が私が元の男の姿に戻る事を許すと思う？』

「まず、許さないわね」

「許さないでしょうね」

「許さないわね」

「許さないでござる」

百合子と大樹の二人は横島が女性の姿になった時、喜々として着せ替え人形のように色々な服を横島に着せて喜んでいた。男の姿に戻ると知ったらどの様な妨害工作をして来るか分からないので横島はあえて二人には教えていなかった。

『じゃあ、行くわよ』

そして横島は双文珠を封印具にはめ込む。

すると横島の体を眩い光が包みこみ、光が収まると横島の体は以前の男の姿に戻っていた。

「や、や、やったー！ーっ！！戻った、戻った、戻ったぞー！ーっ！！」

「おめでとうございます、横島さん！！」

「これでやっとな先生との散歩が再開できるのでござる」

「今までサボってた分、たっぷり働いてもらっわよ」

「まったく、素直じゃないんだから」

そんな風に皆が喜んでいると、突然部屋の扉が開き現れてはいけな  
い二人が現れた。

「忠夫ー！っ！！今日も可愛い服を買って来たぞー！っ！！」

「さあ、着替えま……しよ……」

「や、やあ、お袋……」

百合子と大樹は男の姿に戻っている横島を呆然とした表情で見ている。

「た、忠夫、アンタ何で……何で男になってるのよ！！」

「男になってるんじゃないく、男に戻ったんじゃないが！！」

「そんな事はどうでもいい！！何で娘のままでいないんだ、この親  
不孝者！！」

「あのなー、あのままじゃ人界に帰れないから老師に頼んで元の  
姿に戻る封印具を作ってもらったんだよ」

「……ほう」

「……そう言う事か」

途端に二人の雰囲気は変わり、それと同時に辺りの気温も10度位  
一気に下がった様に冷気に包まれる。

「どう言う事だい？」

『ど、どういふ事も何も儂はただ、横島の為に』

百合子のプレッシャーにたじろぎ、猿神は震えながら後ろに下がって行くが其処には大樹が待ち構えていた。

大樹は猿神の頭を鷲掴みにすると力一杯に握りしめながら持ち上げて行く。

『痛い痛いっ！！、割れる割れるっ！！、き、緊箍児より痛いっ！！』

「てめえ、この猿っ！！俺達の大事な娘に何て事しやがる」

「小竜姫さん、異空間の修行場、お借りしてもよろしいかしら？」

『は、はい。ど、どうぞ』

「ありがとうございます。じゃあ、あなた、行きましょう」

「おう」

百合子と大樹は猿神を掴んだまま修行場へと歩いて行く。猿神はもがきながらも逃げようとするがそれはやはり無駄な足掻きだった。

『しょ、小竜姫、助けてくれい！！』

『む、無理ですよ！！』

『ワ、ワルキューレ！！』

『その命令は実行不可能だ』

『ジーク！！』

『ガタガタブルブルガタガタブルブル』

小竜姫達に助けを求めるが、娘を奪われた二人が放つプレッシャーにはさすがの彼女達も為すべがなかった。ジークに至っては部屋の隅で座布団を頭にかぶり丸くなって震えていた。

『や、止めてくれいっ！！離してくれーーーーっ！！』

「それは無理な相談だ。……俺達はお前を決して許しはしない」

「そう言う事よ」

『か、勘弁してくれーーーーいっ！！』

ガラガラガラ

ピシャンッ

横島達は修行場の向こう側に消えた猿神の無事を唯唯祈る事しか出来なかった。

『ギヤアアアーーーーーッ！！』

レポート3、「悟。が好き。」

横島がようやく薬の効果も切れ、男に姿に戻れたある日の事。

「なあ、プリムラ。今日の時代劇はどうしても見たいんだが」  
「ダメ。私もこの番組が見たい」

TVの前に陣取っているプリムラに稟は時代劇を見せてくれと頼むがプリムラは譲る気はないらしい。

そんなプリムラにタマモはどんな番組を見ているのかと聞いてみる。

「プリムラは何を見ているの？」

「昔のアニメを紹介する番組」

「ほくく、懐かしいな。向こう（GS世界）ではやってなかったアニメだからな」

そう言いながら横島もTV画面に釘付けになる。そう言われては稟も諦めるしかなく一緒にTVを見始める。

二つの世界ではTV番組でも微妙に違い、片方で「鉄腕アトム」や「ガンダム」があり、もう片方では「ジェッターマルス」や「ドラグナー」があるといった感じだ。

「お茶を入れて来ましたよ。飲みながら皆で見ましょう」

「ああ、そうだな」

楓がお茶と茶菓子を持って来て四人でゆっくりとTVを見る。

時たま、子供の頃に皆で見ていた番組が紹介されると昔の話に花が咲き、その度にプリムラとタマモはのけ者にされた様にむくれていた。

『では次は、『悟空の大冒険』のED曲をお聞きください』

TVを見ていた横島とタマモはその曲と共にED映像が流れたすと飲んでいたお茶を嘔き出し、突然笑い出した。

♪ 学校が○き、好○、○き、勉強が好○、○つき！ ♪

[illegible][illegible]

「な、何だ？いきなりどうしたんだ二人共？」

当然であろう、何故なら二人共本物の孫悟空であるゲーム猿を見ているのだから。

♪ そーんな奴が悟○の大冒険を見てみたら〜

「ご、悟空が……ちっちゃくって……可愛い悟空がてくてく歩いてるよ。」  
あははははっ!!」

[illegible]

笑い転げている二人を見ながら稟は呆然としている。

ふと、横を見ていると楓も蹲り肩を震わせながら笑いを堪えていた。

「か、楓まで。何がどうしたんだ？」

楓もまた、夢の中でゲーム猿、孫悟空を見ているのであった。

♪ 好き！

[illegible]

[illegible]

ようやく歌も終わり二人は落ち着きを取り戻した。

「はあ、死ぬかと思った」

「私毛」

『では次は、あの『ドリ。ターズ』が声優を務めたTV人形劇『飛べ！孫悟空』より挿入歌『ゴー・ウエスト』をお聞きください。

『ニンニ。ニキニ。ニン。キニキ。キ。ニンが三蔵、ニン。  
♪ニンニ。ニキニ。ニン。キニキ。キ。ニンが三蔵、ニン。  
キニキ。キ、ニンニ。ニキニ。シンが悟空』

其処に映っているのは志村けん風にデフォルメされた孫悟空の人形。

[illegible][illegible][illegible]

「お兄ちゃん、忠夫や楓達は何が可笑しくて笑ってるの？」

「さあ、俺にもさっぱり？」

注・ 解らない人はつべやニコで検索して見て下さい。

この話は本編で語られなかった物語で、一学期の中頃に起きた出来事です。

レポート4・「ファーストキス・レクイエム」

横島視点

それは麻弓の何気ない一言から始まった。

「…ねえ、楓」

「はい？」

「ファーストキスってどんな味だった？」

ガタンッ

突拍子の無い質問に楓はその場でひっくり返った。

「おお、今日は縞々なのね」

「タ、タダくんが好きそうだから…って何言わせるんですか…！と言っより口にしないで下さい…！」

スカートを押さえながら立ち上がる楓だが変な事を言わないでくれ、周りからの殺気がうっとうしい。いや、確かに好きだが……

「それよりいきなり何ですか？そ、そのキスだなんて」

「いやー、隣のクラスの友人と話していたらちよつと議論になりまして。で、何味だった？横島くんとはもう経験済みなんですよ」

笑顔で楓を問い詰める麻弓だがその危険な発言のせいでクラス中の空気は徐々に冷たくなっていく。稟もまた嫌な予感がしているのか気にしない振りをして次の授業の準備をしている、俺もここはそれに習っておこう。

「何だ樹、その殺意に満ちた視線は？」

「安心していいよ、俺様だけじゃないから」

「その言葉の何に安心しろというんじゃ」

辺りを伺うとクラス中の男共の視線は俺と稟に注がれていた。

「わ、私そんな経験ありません。キスだなんてそんな事……」

楓は顔を真っ赤にしながらもこちらをチラチラと見つめて来る、そろそろ逃げる準備をするべきか？

「なーに？横島くん、一つ屋根の下で暮らしておきながらキスの一つもしてないなんて。甲斐性無し？度胸なし？責任逃れ？はつきりした方がいいのですよ」

「ほつとけー!!」

「他に経験がありそうな子と言えば……リンちゃんはどう？」

「わ、私ですか？…そ、そのお……」

話を振られたネリネは赤く頬を染めてこちらをチラチラ見て来る。か、可愛い。いや、それはそれでいいんだがこの状況でその表情は俺の命に危険が。

「していただけたらと、何時も待っているのですが」

揺れている。男共の貧乏ゆすりで校舎が揺れている。

これでは何時ぞやの妖怪「コンプレックス」が現れてもおかしくないぞ。

稟視点

もう止めてくれ。そう思いながら俺はある席に目をやる、今は居ない様だ。

戻って来る前に安全な場所に逃げようと席を立とうとする。

だが、どうやら運命とやらも俺の敵だったようで、シアが帰って来てしまった。

「あれ、どうしたの皆。何だか雰囲気怖いけど」

「あ、シアちゃん。いや、キスの味ってどんなのかなあって」

「何々、何の話？キスがどうかしたの？」

来た、来てしまった空気破壊神。

何で亜沙先輩がここに来るんですか？

「キスの味ってどんなのかなと言う話になりました。亜沙先輩はキスの経験はあるのですか？」

「え、ボ、ボク？ボクにある訳ないじゃない」

亜沙先輩は照れて顔を赤く染めながら何故か忠夫をチラチラ見てい

る。

止めてやって下さい。ああ、忠夫の顔が逆に青くなっていく。

「シアちゃんはどうなの？」

麻弓の質問で皆の視線はシアに集中している、今の内に教室から逃げ出そうとすると。

「私？キスの経験ならあるよ」

……世界よ、そんなに俺が嫌いなのか？

「へえ、シアちゃんキスの経験あるんだ。結構意外……」

一瞬の静寂の後……

「……な、なんだってえー……っ！！」「」「」

窓ガラスが割れるかと言う位の絶叫が木霊した。

「だ、誰なのですか？相手は一体誰なのですか？いや、聞かなくても大体分かるけど一応念の為」

「えっとね…八年前、この街で…稟くんと」

シアは顔を赤らめながらそう言った。

膨れ上がった殺気に怯えながら俺が逃げる為に扉を開こうとすると一瞬早く扉が開き、タマモとプリムラが入って来た。

「一体これは何の騒ぎ？」

「何だか騒かしい」

「あら、タマモちゃん。実はね…」

タマモ達は麻弓に説明を受けていて、俺はと言うと逃げるタイミングを失って男子生徒に追い詰められていた。

「ふうん、キスねえ。キスと言えば意外に思つかもしれないけど」  
「けど、何？」

「ヨコシマの唇って結構柔らかくて甘いのよ」

その瞬間、時は止まった。

横島視点

「ちょっと待てタマモ！！俺はお前とキスをした覚えは無いぞ！！」  
「其処はアレよ。寝てる間にご馳走さま」

タマモはしてやったりという顔で頬を赤らめながら舌を出す。  
可愛いとは思うが今はそれどころではない、早く逃げなくては。

「ふう……」バタリ

「楓、しっかりしなさい楓！！」

「まままあ」タマモちゃんと忠夫さんは何時の間にかそんな仲に。  
まままあ」

楓は気絶し、亜沙先輩が介抱し、カレハ先輩が妄想する。  
そしてこのパターンだと麻弓が何やら余計な事を言いそうだが。

「……ちよつと待つのですよ。寝てる間にと言う事はまさかタマモちゃん、貴女は……」

「しょつちゅう一緒に寝てるわよ。腹ただしい事に中々手を出してくれないけどね」

タマモはタマモでとんでもない爆弾を投下してくれた、寝る時は狐の姿だと言えないのが悔しい。

「忠夫さまっ!!」

「な、何でせうかネリネさん？」

「今日、泊まりに行ってもよろしいでしょうか!!」

「私も泊まりに行こうかな。どう、忠夫ちゃん」

「あー、だったら私も泊まりに行ってもいいよね、稟くん」

ネリネや亜沙先輩、シアがそんな事を言っている中で俺と稟は男共に追い詰められていた。

こうなったら逃げる為にはあの手段しかない。

「美神除霊事務所・防衛術奥義!!」

「防衛術奥義だと？た、頼む忠夫、俺も一緒に」

稟はそう言つて来るがそれは望む所だ、何しろこの奥義は一人では出来ないのだから。

俺は稟に笑いかけると迫つて来る男共に稟を突き飛ばす。

トン

「え？」

「『土見クン、お願い!!』」

ああ、懐かしいなあ。俺もよくこつやって美神さんに盾にされたものだった。

「後は頼んだぞ、稟」

「忠夫ーっ！貴様ーっ！！」

まあ、シア達の治癒魔法で何とかなるだろう。俺は稟の悲鳴を聞きつつ、その場を逃げ出した。

そして、その日の夕食は何故か俺だけおかずが一品少なかった。楓、あんまりじゃないか。俺が悪いんじゃないか……

そんなある日の出来事であった。

短編集・終わり

《次回予告》

あの人は私の憧れの人。

そして私は人間。

人間じゃないと駄目なんだ。

あの人の為にも人間じゃないと。

その為ならこの位の苦しみ…

その為にならこの命だって…

次回・第十話「せめて人として、されど人として」 (前編)

だから私は……

**G×S!「短編集」(後書き)**

と、言う訳でしてG×S!本編は今回の更新でストックをすべて使い切ってしまった。

これからは亀更新かなあ……

頑張って続きを書いて行きます。

他の作品も投稿して行こうかな。

第十話「せめて人として、されど人として」(前篇)(前書き)

お待たせして申し訳ありません。

## 第十話「せめて人として、されど人として」(前篇)

私は今、何処か知らない街に居る。不思議と何となく分かる、これは夢だつて。

私の足は勝手に動き、知らない人の家に入つて行く。  
表札には【横島】と書かれていた。

『ナルニアに転勤ー！？』

『そうよ、学校から帰つて来たら早く荷物をまとめるのよ』

『くそつたれ、あの糞部長！！すぐに日本に戻つて来て今度は奴をタンザニアに飛ばしてやる』

『油断したアンタが悪いのよ』

『嫌じゃー！っ！そんな日本語も通じんような地の果てに行きたくはないわいつ！！』

——あれ？……あの人達誰だろう？……でもあの男の人、なんだか懐かしい感じがする。

『俺は日本に残るからな』

『そんな我儘を許すと思つてるのかい』

『諦める、母さんを怒らしたらどうなるか分かっているだろう《忠夫》』

——……え？……忠夫つて……ひょっとしてタダくんなの？……

朝食を食べ終わったその人はブツブツ言いながらも部屋に戻つて行った。

向こうからは私が見えないみたい。やっぱりこれは夢なんだ。  
私は忠夫と呼ばれた人の後に着いて行く。

『冗談じゃない、俺は絶対に日本に残ってやるぞ』

そう言いながら彼は着替えを始めた。

『きゃっ！！』

私は慌てて振り返った。後ろからはパジャマを脱ぎ、学生服に着替える音が聞こえて来て、どきどきと私の心臓は破裂するかと思うくらい脈打っている。

本当にタダくんなの………少しくらいなら見てもいいかな？……やだ、私ったら。

『さてと』

突然後ろから手が伸びて来て机の上にあったバンダナを掴む。  
着替え終わったんだなと振り返ると私は息を飲んだ。

——あ………ああ………

バンダナを着けようとして露わになった彼の額には大きな傷があった……あの時の、バカだった私がタダくんに付けてしまった大きな傷が。

——タダくん、タダくん………タダくん！！

抱きつこうとするが私の体は彼の体をすり抜けてしまう。

——でもやっぱり生きてるんだ。知らない場所だけど……生きていてくれた……ぐすっ、なら何時かは本当に会えるよね。

それから私は登校する彼について行き、学校帰りに彼は色々なアルバイトを捜していた。

『くそう、何とかバイトを見つけて日本に残れるようにしなくちゃ』

——がんばってね、タダくん。

そうタダくんを応援しているとタダくんはある一点を凝視していた。其処には《ボディコン》というのか、際どい格好をしている女の人<sup>が</sup>いた。するとタダくんはその女の人の所に走り寄って行き……

『一生ついて行きます、お姉様——っ！——！』

ドカンッ

「い、痛い」

目を覚ました私は頭からベットの下に落ちていた。

「い、今のは……タ、タダくんなの？」

起きあがり、頭をさするとベットから落ちた時に頭を打つたらしく  
タンコブが出来ていた。

「うつゝ、頭もだけど……何処かも痛いよ、タダくん」

それでも、再び燃え上がった想いは消える事は無く楓は横島との再  
会に思いをはせて行く。

しかし彼女は毎朝、“その痛み”にしばらく悩まされ続ける事にな  
る。

#### 第十話「せめて人として、されど人として」(前編)

ごほごほ……

ああ、今日はちよつと辛いな。  
でも大丈夫、この位なら普通に耐えられる。

あの日、ボクはお母さんに酷い事を言った。お母さんの気持ちも知  
らずに……

それを考えればこの位何でもない。

だからボクは人間じゃないといけないんだ。お母さんの、あの人の  
為にも人間じゃないと……

魔法なんか使えちゃいけないんだ……

そう思いながらボクは長く伸びた自分の髪に触れる。

コンコン

部屋の扉がノックされ、何処か間延びした母親の声が聞こえて来た。

「あーちゃん、おはよ」

「う、うん。お早うお母さん」

亜沙がそう応えると扉が開き母親の亜麻が部屋に入って来る。

白い帽子を被りオーバーオールを身に着けている母親というよりどちらかという妹といった方が説得力のある女性だが、紛れもない亜沙の母親である。

お母さんはボクの長く伸びた髪を見るとそれまでの笑顔が突然曇り、涙顔で私に駆け寄って来る。

「あーちゃん！大丈夫？どこか痛くない？具合は？熱は？お母さんに何でも言つてね、何でもしてあげるからね」

「うん、大丈夫だよ。それから一つお願い」

「何？何をしてほしいの？」

「髪、切ってくれる？」

「分かったわ、あーちゃんがそうしたいのなら」

お母さんは「ちょっと待っててね」と言い残し部屋を出て行き、ボクはそんな母親の背中を何処か申し訳なさそうな顔で見つめる事が出来なかった。

「（ごめんねお母さん）…ゴホゴホッ」

そう、心の中で謝るが再び襲って来た苦しさから咳き込む。

「大丈夫、まだ耐えられる。もう少し…もう少し…」

そして、ふと壁に掛けたコルクボードに貼っている写真に目をやる。カレハと一緒に撮った写真、楓達と女の子だけで撮った写真、去年家族で海に行った時に撮った写真、そして忠夫ちゃんとタマモちゃんに来てから新しく撮った写真。

ボクはそんな写真の中でも一枚の写真を見つめる。麻弓ちゃんに頼み、忠夫ちゃんの腕に抱き付き強引に撮ってもらったツーショットの写真。

忠夫ちゃんはエッチなくせにこちらから強引に迫ると真っ赤に照れてうろたえる癖がある、現にこの時も腕に胸を押し付けてたけどあたふたするだけで何も出来ずにいた。

そんな忠夫ちゃんの顔を見てると何だか顔が熱くなって胸がトクトクして来る。

本当に不思議な男の子だ、楓達が好きになるのもなんとなく解る、出来る事ならボクも……。

そう言えば子供の頃に出会ったあの男の子、何となく忠夫ちゃんに似てるな。

……まさかね。

所は変わって此処は木漏れ日通り。楓・ネリネ・タマモは左手に光る指輪を眺めながらにやけていた。

「『えへへへへへ／＼／／／』」

まあ、それはシア・キキヨウ・桜も一緒なのだが。

「『えへへへへへ／＼／／／』」

「皆、周りの視線が痛いのでそろそろその辺で…」

「無理だ、諦めるしかないぞ稟」

横島達は海に行く時の水着を買いにデパートへと向かう途中である。

楓達、横島ラバーズとシア達、土見ラバーズは横島と稟との絆の証でもある左手薬指の婚約指輪を眺め、頬を赤らめながら歩いている。

この二組の婚約はもはやこの界限で知らない者は居らず、横島と稟は周りからの、特に嫉妬に狂った男達からの視線攻撃に晒されていた。

「えへへ、タダくん♪」

楓は微笑みながら横島の腕に抱きつく。その心からの幸せそうな顔を見ると横島もまたつられて顔を赤く染める。

「な、何だ楓？」

「くす、呼んでみただけ♪」

ザワワツ!!

周りから注がれる視線に今まで以上の、殺傷力が無いのが不思議なほどの殺気が注がれる。

「下に見苦しきは男の嫉妬だね」

「何を言ってるのよ。緑葉君こそ、つい殺気<sup>さつき</sup>まで向こう側に居たくせに」

其処に合流して来たのは樹とようやく補習を終えた麻弓、後は亜沙とカレハも一緒に海に行く為の水着を買いに行こうとこの場所待ち合わせをしていたのだった。

「ところで稟、亜沙先輩達はまだ来ないのかい？」

「もうそろそろ来る頃だと思っがな」

俺はそう言いながら辺りを見回していると近くの電柱の影に何やら変な物を見つけてしまった。

……何だ、あの「段ボール」は？

「忠夫ちゃん、稟ちゃん!!」

丁度そこに亜沙先輩とカレハ先輩がやって来た、当然俺達に注がれる殺気の度合いも増して行く。

「お待たせ」

「遅くなつて申し訳ありません」

「いえ、構いませんよ」

「じゃあ、全員揃つた所で出発なのですよ」

麻弓の合図で俺達は駅前のデパートへと歩いて行き、そして俺達の後を付ける様にあの「段ボール」も動き出す。

「なあ、忠夫…」

「気付くな、稟!!」

「そうだよ。気付いてはいけないよ稟、それは重大なルール違反だよ」

「し、しかしだな、あれだけあからさまな…」

「俺達には何も見えていない!!」

二人はそう言つて目を逸らすが俺は氣になつてしょうがない。

何なんだ、何故俺達は街中で「段ボール」に後を付けられなければならないんだ？

ダメだ、やっぱり氣になつてしょうがない。

我慢できなくなった俺は振り向くと「段ボール」に駆け寄り掴み上げる。

「ふえ？」

「あれ？」

其処に居たのは小さな神族の女の子だった。

「あら、ツボミちゃんじゃないですか」

「知ってるんですかカレハ先輩？」

楓がそう聞くとツボミちゃんと呼んだ女の子を抱きしめたカレハ先輩は満面の笑みで答えた。

「はい、ツボミちゃんは私の妹ですよ」

「は、初めまして、お姉ちゃんの妹のツボミです」

ツボミはカレハに肩を抱かれて照れながらも自己紹介をする。

「で、ツボミちゃんは何をしてたのかな？」

「はい。稟さまをストーカーしてました」

「……はい？」

「まあ、ツボミちゃんらしいですわ」

「（（いや、らしいですませていいものなのか？）（（（

「所で一体何処でツボミちゃんとやらに粉をかけてたんだいMr、ロリペドフィン」

「人聞きの悪い事を言っな。この子、ツボミちゃんとは今日が初対面だ」

取りあえず、せっかくやって来たツボミちゃんを追い返す訳にも行

かず彼女も連れて行く事にした。

「お兄さんが横島忠夫さんですね」

「俺の事も知ってるの？」

「はいです。お姉ちゃんのお話の中によく横島さんの事が出て来ます」

「へえ〜、『よく』ねえ」

「な、何ですか亜沙ちゃん／＼」

「べっつにい〜」

「で、ツボミちゃんは稟とはどうやって知り合ったんだい？」

「はい。2年ほど前私は駅前でもっともしつこい男の人達に絡まれていた所を稟さまに助けていただいたんです」

稟はその事を思い出そうとしてる様だがどうやら思い出せない様だ。

「ごめんね、覚えてないよ」

「ま、稟には日常茶飯事の事だろうしね」

「でもそれって、困ってる人を助けるといふ事をごく自然にしてるって事ですよね。益々好きになっちゃいました♪」

「…稟、殴っていいかい？君が泣くまで」

「一人で泣いてる…」

そんな話をしている内に目的地のデパートへと到着する。

シアや楓達はさっそく水着売り場へと移動しようとするが稟は何時の間にか横島が居なくなっているのに気が付いた。

「忠夫の奴、逃げたな」

「まあいいじゃないか、稟も何だったら何処かに行ってもいいよ。」

楓ちゃん達の水着は俺様がしつかりと選んであげるからさ」

其処に聞いた事の無い女の子の声が聞こえて来た。

「余計な事しない。樹に任せたらどんなイヤらしい水着を選ぶか分かったものじゃないでしょ」

「何を言うんだい、俺様は……え？」

話しかけられた樹が振り向くと其処には女性の姿になった横島が居た。

「忠夫？」

「タダくん、どうしたんですか。何で女の子の姿に？」

「稟達は見たと思うけど私の体にはちよつとシヤレにならない傷があるでしょ。私は別に気にしないけど一緒に居ると楓達まで変な目で見られそうだから傷を隠せるワンピースの水着を選ぼうと思ってね」

「何だ、そう言う事かい。任せなさい、女性達の水着は俺様が責任を持って選んで……」

「人の話聞いてた？私は『ワンピース』を選ぶと言ったの。かろうじて危ない部分を隠せる程度の際どい紐ビキニなんて身に着ける気は無いわよ」

「何を言ってるんだい、忠夫。そんな人聞きの悪い」

「あ、あの、私も忠夫さまと同じ意見です」

「わ、私もっス」

「そ、そんな、ネリネちゃんやシアちゃんまで……」

「まあ、普段が普段ですから信用してもらえと思うのが間違いなのですよ」

シア達にやんわりと断られ打ちひしがれている樹にさりげなく止め

を刺す麻弓であつた。

「ねえ忠夫、あなた何か何時もと違う感じがするんだけど？」

「そう言えば……」

キキヨウが横島に何か違和感を感じ、ネリネもそれに同意する。

するとプリムラが横島の周りを観察する様に回りながら歩き、そして何かに気付いた様に手をポンと叩くと。

「分かった。眼が紅いのに羽根が無い。それと声も何時もと違う」

「……それだぁー……っ!!」「……」

プリムラの指摘に皆は納得したように声を上げる。

「タダくん、これって」

「言つて無かつたけどヨコシマは翼を隠す事が出来るのよ。そして声は文珠を使つて変えてるの」

「声は何時もの感じじゃ変に思われるしね」

「そうなんだ」

タマモの説明に横島が付け加える。

「そうだ、ツボミちゃんも一緒に海に行く？」

「ええっ、いいんですか？ 凄く凄く行きたいです」

「なら、ツボミちゃんも新しい水着を買わなくてはなりませんね」

「はいっ!! ちょうど新しい水着が欲しかったです」

「ならば俺様がツボミちゃんにお似合いの……」

横島はそんな風にほくそ笑む樹の目の前に二つの文珠を見せる。



そんな亜沙に横島は何も言うつ事が出来ずにいた。

続く

### 《次回予告》

横島達は海水浴へと出かける。

そんな中、亜沙は倒れ、そして横島は全てを知る。

激昂する横島、困惑する亜沙。

そして二人は……

次回・第十一話「せめて人として、されど人として」(後編)

忠夫ちゃん、私は……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6243u/>

---

G×S！夕陽が紡ぐ世界

2011年8月10日23時11分発行